緋弾のアリア――碧き守護者――

メルチェ

「10年でずいぶん変わるもんだな…。こんな街並みだったか」

俺は桜田陸(さくらだりく)。

久しぶりに生まれ故郷の日本に帰ってきた。通い始めた高校の寮では父さんの友人の息子である遠山キンジと相部屋になり、日々普通に学校に通っている。そう普通に。

俺が通うのは『東京武偵高校』。簡単に言ってしまえば近年凶悪化した犯罪に対抗するために新設された国家資格、武偵を養成する学校だ。え？犯罪者に対抗するための学校が普通なのかって？…まあ、高校生が武器を持っている時点で普通と言い切るのはなかなか無理があるかもな。

今日も俺はいつも通りそんな普通じゃない学校で普通に事件と遭遇する。

目次

第一章　日常という名の事件発生　1
1、硝煙とともに……1
2、束縛プレイ!?……23
3、ドレイ宣言……43
4、二人目の再会……67
5、その男未知につき……92
6、生徒兼教師……115
7、綺麗と恐怖は紙一重……136
8、仲裁……155
9、身体測定……181
10、天然タラシ発動……207

11、日常……228
12、カルテット……255
13、1歩ずらす事……281
14、イヤな予感はよく当たる……309
15、事件発生……342
16、悪寒……370
17、入院……398
18、交響曲……421
19。平和ボケ……447
20・パートナー……466

第一章　日常という名の事件発生

1、硝煙とともに

初めまして、メルチェと申します。小説投稿は初めてなので、誤字脱字、文才などいろいろ問題はあると思いますが、温かく見守ってください。不定期更新なのであれですが、よろしい句お願いします。
ではこちらから本編ですっ。

「ここで、いいんだよな」

手元のグーグル先生が表示してくださった地図を見ながら表札を確認する。どうやらここで間違いないようだ。
ん？　俺か？　俺は桜田陸（さくらだりく）。目の前の学校に通う事になったもうすぐ17歳の男

子だ。

俺の目の前にあるのは『東京武偵高』。東京湾に浮かぶ人工浮島（メガフロート）の上に立てられたこの高校は少し普通ではない。

――『武偵』とは『武装探偵』の略称である。近年凶悪化してきた犯罪に対抗するため新設された国家資格。この資格を持つモノは武装を許可され、逮捕権を有する。つまり警察に準ずる権限を持つ。ただ、武偵は金などの報酬をもらって働くため、どちらかというと便利屋の面が強い。

海外にいた俺は急に連絡をよこした父さんの言いつけ通りまた通う事になった。

今は4月のはじめ。今日がこの学校の始業式と言うこともあり、8時をとっくにすぎたこの時間帯には人がいない。俺は転校生扱いになるので1度校長室によった方がいいのだが……残念だ。この時間では間に合わないっ。と言うことで、

「直接体育館に乗り込もう　！　――ッ」

武器は常に携帯しているし、貴重品も持っている。名札がないのは仕方がない。さあ行きますか。

そう思い１歩を踏み出したところでキィーン……と頭の中にノイズが走る。この感覚は。

ノイズが強くなる方角に全速力で走った。

「なんじゃこりゃ……」

俺が多分ノイズの発生現場だろうところにつくと、ぽっかりと大穴が空いた体育倉庫が。まるで大砲でも撃ち込んだかのような穴だ。中をこっそりうかがうと、何だろう。何かピンク色の長いものが見える。あれは髪だな、多分女子生徒の。その髪の毛は中に置かれている跳び箱の隙間から覗いている。と言うことは、あの子がすごい勢いでドアをぶち破り跳び箱の中に着地。武偵高なら扉だって防弾製のハズ。それに穴を開けられるほどの速度って言ったらそれこそ上空から墜落するよう

な激突コースだ。

さっきかすかに聞こえた爆発音から、事件が起きたと考えるのが普通だろう。中の女の子は大丈夫なんだろうか。

「大丈夫？」

「「え　!?」」

心配になって確認しにいった跳び箱の中にいたのは、１組の男女。男の上に少女がまたがって、そのセーラ服のブラウス、が……

「失礼しましたー」

「「待て待て待て　！　誤解だ(よ)！」」

一体どこら辺が誤解なんでしょう。

うら若き男女が狭い場所で身を隠し、少女のブラウスは首元まであがっている。

しかも馬乗り。どう見ても真っ最中だろ、これは。

「「その思考が誤解なんだって　（なのよ）！」」

「あーそうなの　？」

よくハモってんな。意外と仲良しなのか？

まあ、事件性があるのは分かっていたのでからかうのはここまでにしておいて。

「お前ら伏せろ　！」

――――ガガガガガガガンッ！

少女の方の頭を中に押さえ込み、俺も防弾製の壁際による。

移動の際に少し見えた限りだと、あれはＩＭＩ社のＵＺＩで間違いなさそうだな。全部で30。どう捌こうか

「うっ　！　まだいたのね！」
「『いた』って何が　！」
「あのヘンな　2輪！　『武偵殺し』のオモチャよ！」

バリバリバリバリ！

少女がその小さい手で２丁の拳銃を器用に操り、銃撃戦を展開していく。
うまい。
この手の小ささで２丁拳銃を扱えるとは軽くＳランクだろう。反動が大きな45口径のコルト・ガバメントでも手がぶれてないし。

それにしてもあのＵＺＩ。『武偵殺し』のオモチャだったか。
少女の口調からして狙われていたのは男子の方。こんな小さい子が推定１７０くらいの男を助けたのか。

俺も少女にならい、銃撃戦に参加する。腕を真横に広げて左手の手首から先だけを外に出す。そのまま標的の方は見ずに発砲。感触では最前列の7台をつぶしたってとこかな。

え？　どうやって当ててるのかって？　それは企業秘密です♪

というのは冗談で、ただ見なくても俺の場合は当たるってだけ。頑張ればみんなできるようになる。

残りは23台。とりあえずは弾倉（マジガン）を再装填する時間がほしいな。

「馬乗りお嬢さん！　あいつら引き離せるか？」

「今やってる！　それとその呼び方やめなさい!!」

ずぎゅん！

うおっ。名前が分からないから見たままのあだ名をつけただけなのに撃たれたぞ!?　しかも初対面。何この少女恐ろしい。

この甲高いアニメ声……どこかで聞いた様な気がするんだけど。どこだったっけ？

頭の片隅でそんな事を考えながら俺も追加で5台撃破し、3台タイヤの前をつぶす。少女（めんどくさいから馬嬢で）は牽制しながらも2台壊したようだ。いったん銃撃がやんでＵＺＩたちが遠ざかる。並木の後ろで体勢を立て直す感じか。こちらもあと少しで弾切れを起こすところだったのでこのタイミングはありがたい。

「あ、アンタ、な、何してんのよ……！」

そういえば弾倉（マジガン）買わなきゃないんだった。ポケットの中に5発と元から入ってるのをあわせて7発。ギリギリか。

「頑張ったご褒美に、今だけお姫様にしてあげよう」

さっきから1発も撃ってない男の方も武偵だろう。銃は持ってるはずだから案外大丈夫かもな。

「姫はその席で。銃なんか振り回すのは男だけでいいだろう？」

これは俺も参加しろって意味でいいんだよな？　それでいかなかったら、男として否定されることになる、と。それだけはちょっとな……

「――――ちょっとそこの青髪！　アンタ何でさっきから無視なのよ!?　この状況をおかしいと思いなさいよ！」

「……だってそういう関係なんだろ？　まあちょっとあれだなとは思うけど俺は気にしないから続けて」

「ちッがーーーうッ　!!」

なんか甲高い声で叫ばれたと思ったらまさかの俺だった。

こんな物騒な時にそれだけイチャラブできれば十分だろ。趣味がどうなの？と思わなくもないがそれは個人の自由だし。海外ではよくある光景だ。別に気にしねぇよ。それに上から下まで全部真っ赤にしながら言われてもいまいち説得力はない。

それより今はＵＺＩ(あのオモチャ)をどうするかが先決だな。残りが16台。遠山(名札を見て名前が分かった)武偵もよく分からないがいきなり協力してくれるようなので遠慮なく使わせてもらおう。

「遠山武偵。ＵＺＩ(あのオモチャ)を今から撃破する。自分を狙ってきた方を自己責任で倒す。合図は3カウントだ」

「OK。そういえばキミの名前を知らないな」

「俺の名前は、」

ズガガガガガガン!!

俺の自己紹介を妨げるように再び轟音が鳴る。しかしここは死角だ。いくら撃ったところで全て無駄弾になる。ご愁傷様。

向こうが攻撃を再開したのでこちらも反撃と行こうじゃないか。

「アンタたちまさか出るつもり!?　危ないわ！」

「アリアが撃たれるよりいいさ」

今更だが遠山武偵のこのキザなセリフは何なんだ？　元からこんな性格なのか……？

おっと。これは気になるが今は優先順位が違うな。

「行くぞ。　3、2、1!!」

宣言通り3カウントで2人同時に体育倉庫の外に躍り出る。目の前には前列の間から銃口がのぞくように2列に並んだＵＺＩ。順当に行けば8台ずつだな。7発あれば十分。と、思ったのに。遠山武偵の方は7台。俺の方に9台。さらには……おいおい。人間平等が一番だぜ？

一斉に火を噴く9台のＵＺＩの弾を全て自分の銃弾ではじき返す。銃弾はビリヤードの様に連鎖して連なっていき――後に残ったのは目の前の9台分と左右の6台分のガラクタ。俺はたった7発で2倍近くを倒したのであった。これは見ないで撃つよりもむずかしい。普通では絶対にできないことだが計算と長年の勘を培ってきた俺にはできるのだ。

隣の遠山武偵も何かとできるヤツみたいだ。銃口の中に銃弾を入れていたヤツは初めて見た。もしかして父さんが言っていたのはこいつのことだったのか？

――俺は父さんに言われて父さんの親友の息子が通っていると言うここに来

た。しかし名前や顔などは教えられていない。自分で見つけ出してこいと、言われただけだ。いくつかもらったヒントを当てはめて見るとこいつはぴったりくる。ただネクラなんだと思っていたが、跳び箱から馬嬢を抱えて出てきたあたりから雰囲気が鋭くなった。その前に何かの変化があったのか。いきなり協力的になったり雰囲気が変わったのは何かをしてスイッチが入ったから……？　そうなると何かの遺伝系の可能性が強い。

これでだいたい候補は絞れた。キーワードは『遺伝、身体能力の飛躍』。そういえばこんな内容の実験をアメリカでやっているとか。名前は確か――

「ちょっとアンタ、私の話聞いてるの　!?」

浮くからだ　聞こえてくるのは　アニメ声

おっと。ガラにもなく自分の世界で考え事をしてしまったようだ。

いつの間にか体が持ち上げられている。馬嬢すごいな。こんなチビでいろいろ小さいのに徒手格闘も一流か。

周りに注意を配っていなかったため、つい、仕掛けられた背負い投げにカウンターを返していた。本当に無意識のうちに。

腕を掴まれているため体をひねって、馬嬢の肘を可動域の外まで持って行く。人間誰しもが動かないところまで無理矢理動かされたら抵抗するために力を弱める。今回も例外ではない。予想通り関節を守るため手の力を緩めた隙を狙って腕を引き抜き、馬嬢を巻き込むようにしながら空中でバク転。着地と同時に馬乗りでマウントポジションを取る。

「な、なんでっ!?」

「あ、ごめん。いまどく」

やらかした。女のそれもこんな小さい子に返す技じゃなかった。全体重ではないがマウントをとってしまったから重かっただろう。

なぜ自分が押さえ込まれたのか分からずまだ困惑している馬嬢に手を貸して立たせてやる。目の前にたたれると本当に小さい。１４０㎝いってるぐらいか？　頭

1つ分は違うな。ここでなぜか目線が下にいき、名札が視界に入る。

「神崎・　H・アリア……　？」
「何よ」
「え　？」
「私の名前に何か文句でもあるの　!?」

腰に手を当てて、あるはずもない胸を突き出す。

『私の名前』？　え、ってことは

「アリア　!?」
「そうよ　？」
「おー。すごい久しぶりだな」
「は　？」
「え。覚えてないのか　？　桜田陸だよ」

「え !?　陸 !?　ウソ !?」
「本当」
「久しぶりね　！」

俺が名乗るとアリアは幽霊でもみたかのような驚き具合を見せた。最後に会ったのは確か3年前だったな。アリアはまだ驚きが抜けないようだが、再会を喜ぶように2人でハグをする。遠山武偵がぽかーんとした顔で俺たちを凝視している。そういえば日本ではこういう事をする習慣がないと聞いたことがある。

「アリア、しばらく会わないうちにいろいろ変わったみたいだが。髪の毛意外にも瞳の色が変わっているのはなんで？」
「いろいろ事情があってね。今はこれが自然の色なの。そう言う陸こそずいぶん抑えめな色になったわね」
「まあね。あの髪の毛は日本では目立つと聞いたから」

向こうでは金髪だったから、今の少し濃いめの青い髪はアリアにとって違和感なんだろう。俺にとってもアリアのこのピンク色の髪はなんか変な感じがする。

「１つ聞いていいかな？」
「なんだ、遠山武偵」
「２人は恋人なのかな？」
「こ、こ、こい、恋人なんて　！」

あー、やめてくれ。アリアにその手の恋愛話を持ち込むと――

ずぎゅんずぎゅん！

――相棒（ガバ）が出るんだよ。

「恋人じゃないわよっ。強隈の次は名誉毀損とか救いようのないバカね！」

ガンッ、ガンッ！

アリアが足を踏みならすたび、防弾製のハズの体育倉庫の床が破片となって飛び散る。

アリアは恥ずかしい思いをすると相棒（ガバ）を振り回して周りのモノを破壊するクセがある。俺も最初の頃は地雷を踏みまくって大変な目にあった。遠山武偵も少し引き気味に逃げる準備を始めて、それから顔が赤く……？

遠山武偵の視線を追うとアリアのスカートにたどり着く。俺もそれにそって視線を落とすと……スカートがだんだん下がってるぞ！

どうやらここに突っ込んだときの爆風でホックがとれたらしい。アリアは怒り心頭と言った感じでまだそのことに気づいていないんだ。やばい。これこそやばい。このまま気づかずに下まで落ちたら、風穴地獄決定だ。

『ベ・ル・ト』

武偵なら通じるであろうウィンキングで素早く伝える。この窮地を乗り越えるには共闘しなくてはっ。男2人の意志は通じ合った！

投げられたベルトをキャッチしてアリアの腰に巻き付ける。男性用のは緩いのかちゃんと止まっていなかったので俺のネクタイをスカートとベルトの間に挟んでストッパーを作る。

「な、っっ　!?」

俺の行為を見てから、自分の腰元を見て、やっと自分の状況を理解したらしい。少し落ち着いていた赤面をさらに真っ赤にさせて、じゃきっ、キンジの方に向けて二刀流を発動した。やばい。久しぶりすぎて地雷踏み抜いた！　このままだと遠山武偵即死でアリアが9条違反だ。強猥で死刑にしたら武偵界を揺るがす大問題だぞ。

戦車の様に走っていくアリアの前に割り込み愛刀の黒紫ノ柊でその刀と切り結ぶ。

「何で　！　邪魔するのよ！　陸！」

「落ち付けって　！」

「こいつの風通しを良くするの　！　邪魔するって言うんなら……」

「言うなら　？」

「――アンタにも風穴開けてやる　！」

ずぎゅぎゅん！

俺に向けて銃弾が２発飛んでくる。

はは……顔面直撃コース……銃の方を警戒してなかったら避けられなかったわ……。たらり、一筋冷や汗がこめかみを伝う。逃げなきゃ殺られる！

「逃げるぞ　！」
「賛成　!!」
「こら　！　逃げるな！　待てー!!」

出会いと再会は硝煙の臭いとともにやってくる。
これが後に『碍（エネイブル）』と呼ばれる男・遠山キンジと、『緋弾のアリア』として世界に恐れられる鬼武偵・神崎・　H・アリアと、『静嵐（せいらん）』として全世界に名を馳せながら後に『聖藍』と呼ばれる武偵・桜田陸の出会いと再会であった。

どうだったでしょうか。

アリアと陸の関係は次回で明らかにしたいと思います。

次回もお楽しみに!!

少し修正しました。

2、束縛プレイ!?

第2話です。
アップした1話にもうお気に入りがついていて天まで舞い上がる思いです！
陸とアリアの関係が明らかになります。
では本編どうぞっ。

コンコン。

「どうぞー」
「失礼します」

きっちり一礼してから中に入る。

キンジ（一緒に逃亡している間に仲良くなり、お互いを名前で呼び合う事にした）と別れた俺が今入った部屋は、武偵高校が三大危険地帯の１つ・教務科。ここは教師（バケモノ）の巣窟だ。何が悲しくてこんなところに行かなければならないんだ、とも思うが仕方ない。俺は転校生であり、クラスが分からない転校生が教師のところを訪ねるのは普通だろう。俺だってここが普通の学校だったらこんなに緊張しないさ。

「今日は大変でしたね？　転校初日だったのに」

中に入るとすぐに眼鏡をかけ、髪を軽く巻いた優しそうな女の先生が出迎えてくれた。彼女は高天原（たかまがはら）ゆとり先生。探偵科の教諭でこの学校の『良心』とも呼べるような先生らしいが、この柔和な雰囲気と優しげな垂れ目にだまされてはいけない。さすがに俺もこの人の現役時代を実際に見たわけではないので情報だけだが、『血塗れ（ブラッディ）のゆとり』と呼ばれていた最強の傭兵だ。つまり、怒らせてはいけない。

「ええ、まあ」
「じゃあ桜田くんも来たことだし行きましょうか、神崎さん」
「久しぶりねぇ、陸……！」「げっ」

なにっ、なぜここでアリアとあってしまった!?
ごごご……！　とアリアの後ろで火山が噴火しそうになっているのが分かる。笑っているのに目が笑っていないとか、そんな高等技術いつ身につけたんですか、アリアさん!?　あまりに怖いので不自然にならない程度にソーッと距離をとることを試みる。が

「りーくー？　どこに行こうっていうのかしら？」
「ヒィっ！」

失敗。アリアに気づかれてがっちりと腕を組まれてしまった。アリアの実家ではピンからキリまで何でもオッケーなバーリ・トゥード（縮めてバリツ）という格闘

技が使われている。今は先生の目の前で派手に動けないからだろう。俺と腕を組んだまま肘の関節を外向きに外そうとしてくる。正直に感想を言おう。痛い痛い痛い痛い……！

関節が外されないようにだんだん体をアリアの背中に近づける様に回避しているが、それもそろそろ限界だ。完璧にアリアと背中がごっつんこしてしまっている。今から下手に動かすと逆に肘が粉砕される勢いだ。お主、なかなか……とかほめてる余裕もないよ。……はぁ。仕方がない。あの手を使うか。

「アリア」ﾋﾞｸﾘｯ

「な、みゅっ　！」

名前を呼んで意識を一瞬そらしたうちに、組まれていた右腕の肩の関節を強制的に脱臼させて腕を引き抜く。そのまま振り向いたアリアのおでこにちゅっ、とキスを落とした。アリアはどっきりにあった猫の様な声を出して目をつぶる。

「怒っているアリアも可愛いけど、笑っている方が可愛いよ？」
「ま、また、陸はうまいこと言って……。最後まで怒れないじゃない」

そして極めつけのこの一言。この方法をとると凶暴アリアちゃんはなりを潜め、急にしおらしくなる。いまだなぜかは分からないが、昔からこの方法はよく使ったものだ。ただしこれには『名前を呼ぶだけの隙を突くこと』『パーソナルスペースに入り込む』という条件がある。まず大前提としてアリアの気を自分からそらせなければ意味がない。今回は２つめが最初からクリアしていたため楽だったが、銃撃戦の中でやると骨が折れるんだな、これが。叫んでも聞こえないし、パーソナルスペースなんて入ろうモノなら撃ちまくられるし。それを何とかかいくぐって今の俺がいるわけですよ、はい。

「２人とも仲良しねぇ、もしかしてｋ」「知り合いです。旧知の仲です」
「あら、そうなの」
「はい、そうなんです！」

先生の勘違いを即座に否定して会話を打ち切る。ここの人たちって何ですぐに恋人だとかそう言う話に持ち込みたがるんだ。アリア火山が噴火寸前なんだからやめてほしい。ホントにやめてほしい。切実に俺のあらゆる関節が危ない。

「あなたたちのクラスはここ、　2-A組よ。私が担任だからよろしくね」
「「よろしくお願いします」」
「じゃあ、中に入りましょうか」

先生とともに2人で教室に入る。知り合いも多く盛り上がっていた教室内はその瞬間シィ……ンと耳が痛くなるほどに静まりかえった。なんだ、そんなに転校生が珍しいか？それとも俺とアリアの髪型を見て「なんて対極的なのっ」とか思っているんだろうか。……いや、ないな。

教壇の横に立つと後ろの席の方にキンジが座っているのが見える。おお、同じクラスだったのか！　おーい、キンジ！　とアリアで落ち込んだ気分を手を振るこ

とで持ち上げた。なんと言うかクラスに知り合いがいるのは助かる。だが、とうのキンジは苦笑いで手を挙げただけだった。なんか女子の皆さんの視線も突き刺さってるし、キンジってば意外と人気者なのか？

「女の子の方は皆さんも知っての通り、３学期に転校してきた神崎・Ｈ・アリアさん。男の子の方は今学期から入学することになった桜田陸くんです。皆さん仲良くしましょうね」

「「はーい　！」」

待て待て、どこの小学校だここは。

すんでのところでガクッ、と言ってしまうのを押さえ何とか平常心を保とうとする。『バカの吹きだまり』という表現もそれほど間違っていないようだ。武偵高校では専門的な事を学ぶので一応一般教科（ノルマーレ）があるのだがこちらの偏差値は驚くほど低い。普通の高校だったら定員割れするレベルで低い。『武偵』高校としてはこの学校すごく上位らしいんだがな。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい。陸はあたしの後ろね？」

アリアは俺にきろ、とその赤紫色（カメリア）の瞳を向けながらそんな事を言った。クラスの生徒たちは一瞬絶句して、それから一斉にキンジと俺の間を視線を行ったり来たりさせて……わぁーっ！　と歓声を上げた。ちなみに俺の意見は反映されていない。アリアと生活していて自分の意見を通すときには、まあコツがいるんだがその話は後々。

「な、何でだよ……！」

「よ……良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たようだぞ！　先生！　オレ、転校生さんと席変わりますよ！」

「あ、私も！　桜田くんと席代わります！」

絞り出すように呟くキンジに答える男がいた。実際に立つとアリアとは逆の意味で衝撃を受ける。身長（タッパ）がやたらとあるのだ。俺より10㎝ほど高い。いいからだ付きをしているが戦闘職種ではなさそうだな。手の見た目の堅さからして装備科（アムド）あたりだろう。俺に席を譲ってくれた女の子の方は救護科（アンビュラス）だろうな。雰囲気がナースだ。

「あらあら最近の女子高生は積極的ねぇー。じゃあ武藤くんに白石さん、席を変わってあげて」

先生はなんだか嬉しそうな視線をキンジとアリアに向けると、て何で俺にまで向けてるんですか。わーわー。パチパチ。と教室はすぐに拍手喝采を始めた。仲良くなにか1つの事に対して盛り上がるのが好きらしい。そう思ったところでアリアが、

「キンジ、これさっきのベルト。陸のネクタイは後で返すわね」

とベルトをキンジに放り投げた。ああ、あの死線をともにしたベルトくんか。ネクタイくんも返してもらって良かったんだけど。それを言うと風穴ストームが待っていそうなので、心の中だけにとどめておく。

「理子分かった！　分かっちゃった！　――これフラグばっきばきに立ってるよ！」

俺たちが席に着くと、キンジを挟んでアリアの反対側、つまり俺の右斜め前に座っている女の子が勢いよく立ち上がった。身長はアリアと同じくらいで金色の髪をツーサイドアップで結んでいる。身長の割に出るところが出ていて男性受けが良さそうな甘い見た目だ。制服が改造されまくってフリルが特大セール並についている。この子はロリータファッションというモノが好きなのだろう。

「キーくんベルトしていない！　りっくんはネクタイをしていない！　でもその両方をツインテールさんが持ってた！　これ、謎でしょ謎でしょ!?　でも理子

には理解できた！　できちゃった！」

『キーくん』はキンジ、『りっくん』は俺のあだ名だろう。ずいぶんカワイイ名前をつけられてしまった。

「キーくんはベルト、りっくんはネクタイを彼女の前でとるような何らかの行為をした！　そしてそれを彼女の部屋に忘れてきた！　つまり３人は――少しアブノーマルな恋愛の真っ最中なんだよ！」

その一言に教室が沸き上がる。少しアブノーマルな恋愛ってなに。そう思うのは俺だけじゃないはずだ。もし俺だけだったら……泣くよ？

こんな冷やかし満載の推理なんて真に受けないだろうと期待した、が――

「キンジがこんなカワイイ子といつの間に!?」「影の薄いヤツだと思ったのに！」「転校初日からそんなことができるなんて、うらやま…うらやましい！」「陸くん

になら縛られたい!!」「私も!!」」

――そうだ。武偵高って頭悪いんだった。さっきも説明したと思うけど、ここは偏差値40をギリギリ切らない程度。中学生の方がまだ賢い。

そんな学校の生徒にマトモな答えを期待した俺が悪かった。男子の発言はまだ良しとしよう。だが2、3聞き捨てならないセリフがある。ちょっと最後の女子軍！ネクタイで何を想像したのかな？内容によっては俺の沽券にかかわるんですけど?!

「こいつらバカで構成されてるから気にしないでいいぞ、陸」
「納得。でも 1つだけみんなに言っておきたいんだけど」
「なにかね、束縛りっくん」

そのあだ名ヤメロ。って先生?!「若い子には刺激が必要なのね～」とか納得するの止めてもらえます?!

ここは昔ながらの奥の手・咳払いで。

「ごほん。少なくとも俺とアリアは恋人じゃないぞ　？」

「「え」」「「なんで」」

俺の発言により騒然となるクラス。「え」はまだ許すとしても「なんで」っておかしくね？　逆に俺がその発言の理由を聞きたいわ。だからその『つまんなっ』みたいな目で見るの止めようか。

アリアにアイコンタクトで伝えたけど言っても大丈夫そうだったし。

「じゃあ、りっくんとツインテールさんはどんな深い関係なのさー」

「ロン中（ロンドン武偵高校付属中）にいたときの戦兄妹（アミコ）だよ。ちなみに俺今年で17歳ね」

「「は　？」」

先ほどと違ってこの反応は予想通り。理子の深い関係については特に否定しない。実際浅いワケじゃないし。

――――戦兄妹（アミコ）とは戦徒（アミカ）という先輩の生徒が後輩の生徒とコンビを組み、1年間指導する二人一組（ツーマンセル）特訓制度の事。あくまでそれは上級生と下級生に付随する制度であり、同級生同士ではあり得ない。

だからこそ今クラスメイトたちは混乱しているのだ。

――――じゃあなんで戦兄妹（アミコ）なんだ、と。

「気になるなら調べてもらって構わないよ」

「こいつ『静嵐』だから細かい事考えない方がいいわよ」

「ウソ　!?」

「『静嵐』ってあの『中東王』？」

「中東の犯罪組織　1ヶ月で9割つぶしたってヤツ？」

「なんかいろいろ伝説ある人　!?　こいつが!?」

『静嵐』は俺の2つ名のことだ。いろいろやっているので2つ名だけが1人歩きしていて名前が追いついていない。静かな嵐のようにいつ事件が終わったのかも分からないほどだからだそうだ。と言うか『中東王』ってこんなところまで知られてるのか。……恥ずかしい。

「桜田くんはすごいコだけどみんなのクラスメイトだから仲良くするのよ～？」

「「は、はーい」」

と、ここで先生のフォロー。ナイスタイミングです！

正直自分の活動を目の前でこれだけ騒がれると少し照れる。

教室内も多少のざわつきと俺を凝視している以外落ち着きを取り戻した。ここでHR再開かと思いきや

「ねぇねぇ！　理子気づいちゃった！　気づいちゃったよ！」

理子がガタン！　と椅子を思いっきり後ろに蹴って立ち上がる。その音にみんなが理子に注目する。

今度は何ですか。やっとアリア火山の噴火を鎮めたんだ。ヘンな事言うなよ？

「りっくんさっき『少なくとも俺とアリアは』って言ったよね!?　じゃあ『キンジとツインテールさん』は!?」

「言ってない　！」「確かに　!!」

……あ。

「熱い熱い恋愛の真っ最中なんだね　!!」

やらかした。

確かに俺は『少なくとも』って言った。あの場でそんな言葉の裏まで考えてる余

裕ないだろ。誤解を解くので必死だったんだし。第一理子がそんなところまで覚えてるワケないって思ってたんだよ！　これは仕方ない。単なる事故で……って、ヒッ。

プルプルとアリアの両腕がホルスターの方へ向いているッ。

死刑をまつ死刑囚の様な気持ちでなるべく頭を低くする。これが俺にできるせめてもの抵抗だ。

「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏ではそんな事を　!?」「フケツ！」

理子に便乗して教室がまた騒ぎ出す。

武偵高では専門科目があるので学年や組を部活のように飛び越えるのである程度面識率は高いが……新学期早々こういう話題での息のあいかたは万国共通だな。

「お、お前らなぁ……」

理由は違うものの、キンジが俺と同じように頭を抱えて机に突っ伏したとき――

――

ずぎゅんずぎゅん！

鳴り響いた2発の銃弾がクラスを凍り付かせた。そして俺の肝も冷凍保存された。

ついにガバメントに手が伸びたアリアがホルスターから抜きざまに撃ったからである。左右の壁に突き刺さった銃弾が全てを物語っていた。

「れ、恋愛なんて……くっだらない！」

凍り付いた教室にアリアの声が響く。さっきまで意気揚々と冷やかしていた理子

は両手と左足をあげたまま後ろ向きに移動という器用な事をしていた。

……武偵高では学校内で発砲しても文句を言われない。銃や刀剣の携帯を必須としている学校だ。生徒同士のケンカが銃撃戦な事もなくはない。だが、自己紹介でやったヤツはいないだろうなぁ……。

「全員覚えておきなさい　！　そう言うバカな事を言うヤツには……」

それはアリアの決めぜりふと言っても過言ではないほどの発言で。どこに行ってもみんなが愛用してしまう一言だった。

「――――風穴開けるわよ　！」

2話終わりました！　どうだったでしょうか。

少しテンパってヘンな更新の仕方をしてしまいました。すみません……。

これからも頑張って執筆していきます！

3、ドレイ宣言

すこしずつお気に入りが増えて嬉しいメルチェです。

今回は陸の実態に迫る!?　かもしれません。（多少）

オリジナルの解釈とか入っているのでそこは適当に流してください。

では、本編どうぞっ。

『こうなったのも全てあんたらのせいよっ！』

と大変ご立腹なアリア嬢と猛牛みたいに追いかけてきたクラスメイトたちを何とかまいた俺はキンジと理科棟の屋上まで来ていた。

だってあいつら戦兄妹（アミコ）の事ばっかり聞いてきて答えるの面倒だったんだもん。そんなに気になるなら探偵科（インケスタ）や情報科（インフォルマ）のヤツが調べてやればいい。儲かって良かったじゃん。普通に調べても出てこない情報もあるんだけど。

「なあ、陸」
「なんだ」
「俺も少し気になったんだが、同い年で神崎の戦兄妹（アミコ）だって事はお前インターンで中等部いったのか？」

給水塔の裏で腰を下ろしくつろいでいるとキンジが質問を投げかけてきた。お前もかと思わなくもないが、クラスの連中みたいに全部聞いてくるんじゃなくてある程度は仮説を立ててるみたいだし。なぜか「キンジならいいか」って思うんだよ。自慢じゃないが俺の勘は良く当たる。

「ああ。俺は　8歳から10歳までフランスの中等部にインターンで行っててな。いわゆる飛び級？　みたいな」
「……それ、お前相当やばいヤツって分かってる　？」
「自他ともに認めてる」
「……そうか」
「それで　2年後にロンドンに仕事の関係で移ったときにだな、中等部に転校する予定だったんだけど『キミはもう中等部では扱えません』って無理矢理高校に入れさせられた」

俺の告白にキンジがすごく微妙な顔をする。そんな顔にもなるわな。俺だって聞いたときそう思ったし。
考えても見てくれよ。13歳のガキが自分たちと同級生（タメ）だぞ。しかもアメリカとはほぼ真逆のお国柄。実力主義の真反対、階級主義だ。俺が何かをするたびにやれ自分のところはこういう一門で、だとか。こんな功績を残していて、だとか。知らないよそんなの。やったのは全部ご先祖様だろ？　俺と一緒に依頼（クエスト）受けると成績

あがるとかで、媚売ってくるヤツいたけどうざかったなぁ。

「んで、学校でよく　1人でいた俺を見たアリアが、自分のプライドも相まって戦徒契約試験（アミカチャンスマッチ）を申し込んできたってワケ」

「そうだったのか。神崎プライド高そうだしな」

そうなんだよ！　同じ年なのに何でアンタが高1なのか、とか。私にその実力を見せてみなさいだとか。簡単に組み手して合格にしたらガチギレしてたな。十二分に実力ははかれたんだけど。アリア、今よりもさらに子供っぽかったからな。ツンデレぶりだけは相変わらず。

「陸も苦労してるんだな……」

「全くとは言わないがそんなにしてないぞ　？　アリアからかうの楽しいしな」

「……そうか」

アリア、基本的に素直でウソつけないから鎌かけるとすぐに引っかかるんだよね。それがおもしろいの何のって。ただ引き際を間違えるともれなく二丁拳銃（相棒）の一撃が腹に刺さる。と言うかぶっちゃけからかった時点で刺さる。マジ痛い。なに、じゃあからかわなければいいだろ？　何まじめなこと言ってんの。何のために痛い思いまでしてアリアからかってると思ってんの。……俺が楽しいからに決まってるじゃん。

「……お前への評価が変わったわ」
「ふーん。俺は最初からおもしろそうな奴だと思ってるけど？」
「……アリガトウ」

おーい、片言ですよー。

密かにこいつめんどくさい奴かもと思ってるのは知っている。言われたことある

からな。

「――キンジ、隠れるぞ」

「急に何だよ」

「静かに。女子だ」

「!!」

2人でいそいそと給水塔の裏側に隠れて身を潜める。

足音からして3人。動きの雑さから言って強襲科（アサルト）の女子だろう。こいつらに見つかるのは非常にまずい。さっきのクラスメイトたちの様子から言って、俺たちが見つかれば通信科（コネクト）のヤツらが校内ネットで情報拡散して捕まる。それだけはマジで勘弁。

「さっき　教務科（マスターズ）から出てた周知メールさ、2年生の男子が自転車を爆破されたっ

てヤツ。あれ、キンジじゃない？」
「あ、あたしもそれ思った。確か桜さまもだよね？　本当は始業式出る予定だったけど通りがかりに救助してたんでしょ？」
「転校初日で救助とかかっこよすぎ！」
「やばいよね!!」

実際屋上に上がってきたのは強襲科（アサルト）の女子どもだった。しかもさっき見かけた気がする。うちのクラスじゃねぇか。
3人はフェンスに腰掛け弁当をたべ始める。まてまて。もしかしなくてもこいつらが食べ終わるまで俺たち動けないじゃん。

「それにしても　2人とも不憫だよね。アリアに目つけられるとか」
「確かに。なんか朝から探り回ってたしね。朝は　探偵科（インケスタ）の先輩になんか依頼してたよ」
「マジで？　あたしもいきなりキンジの事聞かれた。『昔は強襲科ですごかった

んだけどねー』って適当に答えたけど」
「さっきは教務科の前にいたよ。キンジの資料漁ってるんじゃない？」
「うっわー。ガチでラブなんだ。桜さまと知り合いなのになんでキンジ？」
「「さぁ」」

隣から「余計なお世話だ」と小声で呟いているヤツがいるが、ここはスルーしておこう。

ふむ。ここでもアリアは浮いているらしい。気心が知れればツン要素が強いだけで意外と仲間思いでいいヤツなんだが、いかんせんそれまでの過程に問題がある。基本1人で行動するアリアは周囲から勘違いされやすい。俺が来るまで、階級主義のロンドンでもつまはじきにされてたみたいだしな。何かと誤解を生みやすい性格をしているからな。

「キンジとか女嫌いなのによりによってアリアとか最悪だよね。アリアってさ、ヨーロッパ育ちだかなんだか知らないけど空気読めてないよねー」

「でもでも、アリアってなにげに男子の間では人気あるみたいだよ　？」
「あー、そうそう。　3学期に転校してきてすぐファンクラブできたんだって。写真部が盗撮した体育の写真、万単位で売れるヤツもあるって聞くし」
「そう言えばさ、写真で思い出したけど――これ見た　!?」
「見た見た　！　峰さんの『りこブロ』でしょ!?」
「そうそう　!!　さすが探偵科のAランクって感じのすばらしさだよね！」

なぜかアリア批判が理子（バカ）の褒めちぎり大会にすり替わっている。あいつがAランクとはさすが武偵高だな。今度何か依頼をしてみよう。使えそうな人材は把握しておきたいし。で、その『りこブロ』でなぜ理子（バカ）のすばらしさが分かる？

「いつの間に撮ったのか知らないけど桜さまの正面アングルとかやばすぎ。かっこよすぎて鼻血出るかと思った！」
「それ分かる　!!　ぶはっ、てなるよね」
「不知火くんもイケメンだからうちのクラスって最高だよね　！」

「不知火くんの場合は噂さえなければ完璧なんだけどね……」
「それはもう言ってもしょうがない。でも正直さ――不知火くんと桜さまならあたしいけるかも」
「「右に同じく」」

すごい危ない会話をしているのは気のせいだろうか。……いや、気のせいと言うことにしておこう。なんかその方が幸せな気がする。

「話それたけど、桜さまのその写真校内ネットのオークションで　6桁いったらしいよ」
「高っ　!?　まあ、でも納得できるけど」
「今峰さんに焼き増しの注文が殺到してて、校内の女子ほぼ全員がうちのクラスに押しかけてるらしいし」
「私も頼まなきゃ　!!」
「体育の写真とかほしくない　!?」

「ほしい　!!」
「というかむしろ着替え途中の写真でしょ　？」
「「それな　！」」

この学校本当に大丈夫なんだろうか。盗撮写真が万単位とか６桁とか。犯罪臭がやばい。なるほどあの理子（バカ）が『さすが』って言われるのは盗撮の腕の話か。何とも武偵高らしい無駄なスキルでやけに納得だ。能力の使い方を明後日の方向に間違えている。

「……ご愁傷様」

さすが武偵高、バカだなと思っているとキンジが同情の視線を向けてきた。今の会話のどこにその要素があるのか全くもって不明。何で俺に言うのかも不明。だが、１ついっていいか。

「『桜さま』って相当人気あるんだな」
「……」
なぜかこの後キンジから向けられる同情の視線が強くなった。いや、なぜに？

――ところ変わって寮の一室。
先生に確認したところ探偵科のキンジの部屋が空いていると言うことなので、そこに入る事になった。キンジと同室って言うのは気が楽でいいよね。キンジからも「まあ陸なら……」と了承してくれたし。未だに昼休みからの同情視線引きずってるけど。ホントになんで。現在は放課後でこれから自室となるリビングでくつろいでいる最中だ。

5限の専門科目の時間ではずっとキンジのチャリジャックについて調べてた。どうやらあれは『武偵殺し』という武偵を狙って殺害するとネーミングそのまんまの犯罪者の犯行らしい。ヤツは爆弾魔で、過去にも3件事件を起こしている。もっとも、真犯人はすでに逮捕されていて今回のは模倣犯の犯行という事になっているらしい。その記事見たから言うけど、今回の犯行も真犯人のものだ。つまり過去のは誤認逮捕。でも、逮捕に踏み切った過程も強引だしどちらかというと『裏』が絡んでる可能性の方が大きい。

6限は学校の生徒情報について。アリアは相変わらず強襲科のSランクを保っているようで、ここでも浮いているっぽい。『唯我独尊傍若無人、逮捕率は高いが協調性に劣る。圧倒的実力で敵を制圧するワンマンタイプ。作戦は考えず犯人逮捕のためなら大抵の無茶はやる。よく言えば臨機応変だが悪くいえば考えなし。実力は認めざるをえない』とずいぶんな評価をされている。危険だから直せって言ったんだけどな…。

他には学校で有能な人材を捜していたのもある。同じクラスで行けば昼休み話題

にあがっていた不知火亮。強襲科のＡランクで武器をそつなく何でも使いこなす秀才タイプ。

後はアリアに席を譲った装備科（アムド）Ａランクの武藤剛気。乗り物なら何でも操縦できると言う特技を持つ。

２人ともキンジの親友らしいが全くの正反対で不知火はモテるが武藤はモテない。

「――――キンジ。アンタあたしのドレイになりなさい　！」

……うん。誤解しそうになっているそこのキミ。経緯を話すから少しまとうか。

６限が終わってすぐ、キンジと待ち合わせして一緒に寮に帰宅→少し時間がたってからアリアがピンポンダッシュならぬピンポンプッシュで登場→尾行をしている

ものだと思って言わなかったら知らなかったみたいでキンジがパニック→なぜか俺が怒られる→アリアのトランクを部屋の中に運ばされた（キンジが）→そして現在。

……誤解されてもやむなし。と言うか誤解するなっていう方がムリゲー。

「ほら　！　さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！　無礼なヤツね！」

盛大にスカートを翻しながらソファーの1つに腰を降ろす。

アリア、キンジの顔をよく見ろ。『呆れてものも言えない』って顔だぞ。ったく。俺がいない間に性格がほぼ元に戻っちまったじゃねぇか。仕方ない。元・戦兄（あに）として一言いってやるか。

「キンジ、いろいろ借りるぞ」

「あ、ああ」

「アリア、ほれ。飲み物だ」

「ありがと、陸」

キンジに一言宣言してマグカップに入れたインスタントコーヒーをアリアの前に置いてやる。俺の部屋でもあるのだから断らなくても良かったんだが、キンジの方が居住歴は長いからな。

「人の家に押しかけてきて無礼者とはずいぶん偉くなったな、アリア？」

「――！」

対面のソファーに座って笑顔で話しかけると、コーヒーを飲もうとしていたアリアの手がびくッ、となって止まった。こぼさないようにテーブルに戻す。

「とても英国貴族とは思えないな」

「アンタに……いわれたくないわよっ」

「？　……！」

昔はこういう言い方をするとすぐに撃って来たので迎撃準備をしていたが……いっこうに来ない。不思議に思ってアリアの顔をのぞき込むと――瞳に涙をためて拳をぎゅっと握っていた。こんな事は初めてなので対処に困る。キンジは……使えそうにないし。かと言って放置もできない。

「どうした？」

「アンタが『戦兄妹（アミコ）の契約が終わっても隣にいる』って言ったんじゃない！　なのにあたしの14歳の誕生日前日に書き置きとプレゼントだけしていなくなるし。消息不明だし、この3年間連絡の1つもこないし」

「……」

「あたしがどれだけ心配したと思ってんのよバカ陸　!!」

バンバンバンバン!!

今度は優しく声をかける。事情を話し始めたのはいいがいきなりキレてガバで乱射するの止めようか。

とりあえず銃弾は全て避けてアリアの手を掴み俺のこめかみに銃口を当てさせる。

「俺が悪かったからとりあえず落ち付けって。分かった？」

「！　……うん」

これをやると根っからの武偵なアリアはすぐに我を思い出す。たまにヘッドショット狙ってくるけどあれは至近距離じゃないからOK。

ガバをおとなしくホルダーにしまってまた座り直す。そのときにスカートがきわどいところまであがっているのを見てキンジが素早く目をそらした。

「その件は俺が全面的に悪かった。事件を追っていろんなところを転々としたり

潜入ったりした関係で連絡どころじゃなかった。でも日本に来る前に連絡するべきだったな」

「ううん。あたしも事情も聞かずに怒ってごめんなさい……」

「よし。２人とも謝ったからこれで終了な？」

「うん　！」

アリアのピンク色の頭を数回なでてやる。これが好きなのは昔からだな。

「……で、俺にドレイ宣言した理由は　？」

っは！　アリア叱ってたらすっかり忘れてた。

今まで黙っていたキンジがキッチンから顔を出す。どうやら今まで隠れていたらしい。

「陸は『お前が自分に足りないものを身につけたらパートナーになってやる』っ

て言ったわ。アンタをドレイにすればそれが分かる気がするの。言うなれば陸をパートナーにするための……捨て石？」

「布石な」

「まあいいわ」

捨て石意味違うから。ものすごく失礼な単語だから、それ。ぜんぜん良くない間違え方だから。

俺をパートナーにって話し。現在進行形なんだな。アリアに俺がいなくなってからの3年間パートナーがいなかったのはまだ自分に足りないところを見つけられてないからだろう。元にもどってるわけだし。

「何でそんな事が言い切れる」

「あたしの勘よ」

さすがアリア。直感が優れてるだけあるな。

アリアとは違う意味だが、俺もキンジに目をつけている。

一年時強襲科Sランク。ネクラそうな見た目の割に強襲科の生徒からは今でも人気がある。リーダーシップに富みカリスマ性あり。そして気になったのは――――調子の波と、定期考査未受験によるEランク判定。いかにもワケありって感じだろ？

「勘って……お前なぁ。人の家に押しかけてきていう言葉じゃないだろ」

「まあ、いいじゃない」

「よくねぇよ」

「ねぇ、おなかすいた」

「おい」

突然話題を変えたアリアにキンジが突っ込みを入れる。意外とキレがいいな。

キンジが「こいつになんか言ってやれ」とアイコンタクトを送ってきた。そう

いったってなぁ。追い出す必要性を感じるほど失礼な発言はしてないし。さっきの事で少し罪悪感あるし。仕方ない。

「俺が夕飯を作ろう」
「ホントに!?　やったー！」
「は？　なぜにそうなる」

ということでレッツクッキング！

第3話いかがでしょう？

陸のチート感がかいまみれたでしょうか（笑）

『インターンで中等部』というのが個人的解釈に当たります。なにぶん『小学生がインターンで高校に入る』という文を見つけてしまったので。チゲーよ、と思う方。オリジナル設定だと思って見逃してください。

アリアをしかれる人材が必要だなと思っていれてみましたが、結局陸の方がひどいヤツ（笑）

思ったより文字数が多くなって最後尻切れトンボみたいになってしまいましたがそこはご容赦を。

これからも亀更新ですが頑張って2日以上はあけないようにします……たぶん。

4、二人目の再会

はい、第4話です。
この先の話を書いてから、あ、と思い付け足しで挿入投稿させてもらいました。
思いつきで書くからこうなる。
以後ないように気を付けます。ご迷惑おかけしました。m(_ _)m

ぱかっ。ぱたむ。ぱかっ。……ぱたむ。

「おいキンジぃ～？」
「は、はい？」
「冷蔵庫に水しか入ってないんだけど?!」

キンジの両肩に手を置いてギリギリと力を込める。
冷蔵庫を開けたら水が2本入ってただけ！　後は何も入ってない。冷蔵庫は水を冷やすためにあるワケじゃないんだぞ？　驚きすぎて2回も開けちまったじゃねえか。

「お前普段なに食ってるワケ？」
「下のコンビニの、弁当、ですます」
「はぁ!?」

俺の剣幕にキンジはたじたじになりながらへんな敬語で答える。
コンビニ弁当、だと……？

「今すぐにこれをそのコンビニで買ってこい」
「なにこr「ダッシュ」はい！」

ダダダッ、バタン。

メモとお金を握らせて背中を叩くと、言いつけ通りダッシュで部屋を出ていった。

ったく、普段からそんなものしか食べてないからネクラとか言われるんだぞ？

「……昔から陸はご飯に関しては凄かったわよね」
「戦闘が主な武偵にとって動く体を作るにはまずご飯だからな」
「それもそうね」
「ところでアリア」
「な、みゃきゃおっ!?」

アリアの腰を両側から掴み、30㎝ほど上に持ち上げる。

う～ん、やっぱり。

「細すぎ軽すぎ」

「な、何よ！　急に……！」

「マトモな食事してないだろ？」

「うぐっ」

「デリバリーか外食だな？」

「うぐぐっ」

アリアがしまった！　みたいな顔をして、視線を反らす。

図星か。なんとも分かりやすい顔だな。

大方俺と別れてから料理を教えてくれる人がいなくて作らなかったのだろう。事件も追ってただろうし。ちゃんと食べないからチビなんだぞ、とは言わなかった。命の危機に直面することになるからな。

「これからは俺が作るからちゃんと食うこと」

わかった？と聞くとすぐさま首を高速で縦に振りだす。それを確認してから下に下ろした。二人とも俺の監視の本しっかりと食育をせねば。俺が来たからにはコンビニ弁当もデリバリーもとらせん。たまにならいいが栄養が偏りやすいんだぞ？

「陸……買って…きた」
「おー、お疲れー。風呂でも入るか？」
「そうだな。行ってくる」

キンジから袋を受け取りキッチンに入る。自炊していないわりには用具がしっかり揃っといて、こりゃ誰か作ってるヤツがいるなと簡単に推理できた。

「アリアもキンジが出たら入れよ～？」
「分かったわ！」

アリアはソファーに座ってテレビに釘付けだ。内容は『モフモフ動物大集合！』。アリアこういうの好きだもんな。毛並みがモフモフしてるヤツ。ライオンのたてがみにくるまりたいって行ったときは全力で止めたけど。両ほほに手を当ててカワイイー！　とくねくねしている。そんなほほえましい光景を見ながら夕飯作りに取りかかった。

「ん……いいにおいがする」
「ちょうど良かった。いまできたところだ」

タイミング良くあがって来たキンジの前にも料理を並べてやる。今回は急ごしらえなのでビーフシチューとサラダにバゲットだ。

「キンジっ。早く座りなさいよ　！」

「分かった分かった」

アリアがキンジの手を引っ張り無理矢理着席させる。こいつさっきから椅子に座ってキンジが出るのは今か今かと待ち構えてたからな。そんなに慌てなくても料理は逃げないのに。アリアが俺たちの顔を見合わせて3人同時に

「「「いただきます」」」

「「ごちそうさまでした」」

「はいよ。これからは毎日まともなもの食わせてやるからな？」

すごい勢いで2人がビーフシチューをさらっていき、30分後には2日分は作ったハズの中身が全てなくなっていた。お前らよく食ったな……。

ぷしゅーー！
もういいかな。

「陸、それ何ー？」
「ももまん。試作品食べる？」
「食べるわ!!」
「熱いからやけどするなよ」
「はむっ、あっつ!?」

だから熱いって言ったのに。
ご飯を食べてる間密かにももまんを作っていた。アリアの好物は変わってないようだ。時々叫びながらもおいしそうに食べている。それだけ幸せそうに食べてくれれば作った方も満足ですよ、はい。

「味、どうだった？」

「さすが陸ね　！　松本屋にもひけをとらないわ!!」
「そうか。じゃあ風呂入ってこい」
「……入ってくる……」

まだ食べたそうにしていたアリアに風呂を促す。もちろん気づいてたがわざと知らない振りをした。こいつ下手したら一食ももまんで終わらせるからな。ありえん。

俺は食器の片付け、キンジはテレビを見ていると――

……ピン、ポーン……

やけに慎ましやかなドアチャイムの音。それに反応するかのようにキンジの肩がびくっとあがる。

「知り合いか？」
「や、やばいぞ、陸！　星伽白雪――俺の幼なじみだが――アリアが見つかったら殺される！　なぜか俺の周りの女子はあいつにボコられて来たんだ！」
「星伽…白雪…」
キンジの周りの女子がボコられるのは嫉妬からだろ。ドンパチで解決するのは武偵らしい。それより星伽白雪ってどこかで聞いたことがあるような……。
「まずはアリアをどうにかしないと……っ!?」
ガンっ！
慌てた拍子にキンジが机の角に思いっきり小指をぶつける。うっわ、いたそー。
「大丈夫か？」
「～～な、なんとか」

「これで居留守を使うって言う手はなくなったな」
「そんな簡単にいうなよ……」
「１つ手がある」
「ホントか　!?」
「ああ」

あの手を使えばアリアが騒ぐ事はないだろう。

「キ、キンちゃんどうしたの　？　大丈夫？」

ドアの外から白雪とやらの声がする。やっぱり聞いたことある、この声。顔を見れば思い出せるか？

「あ、ああ。大丈夫。すぐ開ける」
「準備オッケーだ」

キンジと目配せしてそれぞれの持ち場につく。俺が脱衣所に入ったぐらいで玄関のドアを開ける音が聞こえた。さて、俺はあとこれをここに張ってっと。

ガラリラ。

あ。

「〜〜〜 !?」

「誤解だから、とりあえずこれを読んでくれ…… !」

タイミング悪くアリアが浴室から出て来てしまった。大声で騒がれる前に慌てて目を閉じてもっていた紙を渡す。多分真っ赤になっただろうアリアは、ガラっ！と大夫荒々しく中に戻っていった。

『ワ　カ　ッ　タ。　ゼ　ッ　タ　イ　ヨ　？』

おそるおそる目を開けると脱衣所にアリアの姿はない。浴室の向こうからタッピングで返したらしい。い、一命を取り留めたぜ……！　かごの中の武器で攻撃されてもおかしくない状況だったからな。まさに奇跡。

「……キンちゃん。私に、何か隠してる事ない？」

「ない！　ないない！　隠し事なんてありあ、じゃない、ありえねーから！」

「……そう。少しあがらせてもらうね」

「おい白雪！」

やばい！　なんか負のオーラがこっちまで漂ってくる……！

キンジが相当な危機に迫られている。この中にずっといたらアリアが浴室にいることがばれてしまう。その前に俺から出向くしかないっ。

「すまん、キンジ。遅くなった。紹介したい人って？」

「陸　！　こっちに来てくれ！」
「そんな……紹介したい人だなんて……」

脱衣所から出ると今にも泣き出しそうなキンジと、草履を脱ぎそうな巫女さん。巫女さんの方から発せられていた負のオーラが、俺の一言で一瞬のうちに幸せ全開になる。そんな気に入られる様なこと言ったつもりはないけど……。

「こんばんは。キンジと相部屋の桜田陸で、って白雪　!?」
「え　？」
「なんだ、お前ら知り合いだったのか　？」

顔を間近で上げてよく見ると、ぱっつん前髪の大和撫子の確かに白雪だ。やっと思い出した！

「覚えてないか　？　俺だよ、桜田陸。青森の星伽神社で一緒に稽古しただろ？」

「え !?　りくちゃん !?」
「そうだよ」

なあーんかこのパターン前もあったような……。まあいっか。
俺は10歳でフランスを離れた後３ヶ月だけ日本に戻っていたんだ。そのとき父さんの伝手で世話になってたのが白雪の実家の『星伽神社』。同い年だったことや、その頃から武偵として活動していた俺は白雪に稽古をつけることもあった。逆に琴や三味線とかの芸術関係は白雪に習ってたけどな。そう言えば数回白雪の元に男の子が訪ねてきて、一緒に遊んだ記憶がある。

「６年前ぐらいに一緒に遊んだのって……もしかしてキンジか」
「６年前……？」
「そうだよ！　確かキンちゃんとりくちゃんと私で何回か遊んだよね！」
「あ！　思い出した！　でもあいつは髪も瞳も黒かったぞ？」

「異国の見た目をしたものを敷地に入れるわけには行かない、って言われて変えてたんだよ。ちょうど変装グッズの中に入ってたからな」

「子供のうちから何もち歩いてるんだか……」

あの3ヶ月、すごく楽しかった。武偵の活動は一切しなかったけど充実した日々を送れていた。きっと父さんが裏で手を回していたんだと思う。フランスでは同級生はいても同い年はいなかった。依頼の対応が忙しかったし年相応の遊びをしたのはあれが初だったと思う。

「りくちゃんにも会えたし、きて良かったよ。あ、これタケノコご飯だから良かったら2人で食べて。男の子2人だと少し足りないかもしれないけど……」

「もらうよ。ありがとう」

「あ、ありがとうな」

「じゃあ、明日から恐山に合宿で早く出るからもう帰るね」
「また和食教えてくれ」
「分かった。キンちゃんにリクちゃんさようなら」

白雪は春風みたいにさわやかな笑顔を作ると、こっちに背を向けて去っていった。素早くキンジが玄関の扉を閉める。キンジは一安心したみたいだけど俺、どうしよう。アリアと顔合わせるの気まずい。と、そんな事もいってられないので。

「あのー、アリア？　もう出て来て大丈夫だぞ……？」

とりあえず脱衣所の外から声をかける。アリアにはしっかりと聞こえたようで浴室から移動してくる音が聞こえた。ああ、気まずい……。

「アリアさん？　怒ってます…？」
「……怒ってないわよ。でも、陸約束破ったら風穴だからね！」

出て来たところで声をかけると、少し顔を赤くしながらびしっ、とさっき俺が渡した紙を突きつける。本当はこれを脱衣所の内側に貼り付けてすぐ出てくるつもりだった。そうすればすぐにキンジの援軍にいけたんだけどそうは問屋が卸さない。タイミング悪くアリアと鉢合わせになってしまったというわけ。

『静かにしてたらももまん10コプレゼント』

紙の内容はたったこれだけ。これだけで難を逃れるならむしろ儲けもんだよ。

「分かってるよ。特別うまいの作ってやるからな」

「ホントに？　早くたべたいな～」

ほのかに頬を染めたままほえむアリアは、すごく、可愛かった。見ないうちにずいぶんと雰囲気も大人っぽくなったらしい。それはもう戻ってきたキンジが軽く

赤面するほどには。戦妹（いもうと）の成長はなんだかほほえましい気分だ。

「……ずいぶん前にさかのぼるが、ドレイってどういう意味だ」

アリアから意識をずらすようにキンジが無理矢理話題を振ってきた。確かにそれは気になるのかも知れないけど、女子に振る話題が『ドレイ』ってどうなの。いや、アリアが言い出したことだし本人は全く気にしてないと思うけどね？

「強襲科であたしと陸のパーティーにあんたも入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「なにいってんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で一番まともな探偵科に転科したんだぞ。それにこの学校からも、一般高校に転校しようと思ってる。武偵事態辞めるつもりなんだよ。それをよりによってあんなトチ狂ったところに戻るなんて

――ムリだ」

「あたしには嫌いな言葉が　3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この　3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

「いや、いいわね？　って言われても。てか何で陸はハモってるんだ？」

「俺も初めて会ったときに言われたから」

ロンドンでアリアに追い回されてる最中、ぽろっと『疲れた』って言ったらガバメントの銃弾とともに上から降ってきたんだよ。言葉に自分自身納得したのと、その状況がやけに印象に残ってて今でも忘れられない。

「陸は前、中、後衛のどれでもいけるからそうね……キンジのポジションはあた

しと一緒にフロントにしましょ」
「勝手に決めるな。そもそも何で俺なんだ」
「太陽は何で昇る？　月はなぜ輝く？　キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」
言ってることは武偵としてすごく正しい。だが、アリアのたとえはいつもスケールがでかい。本当にでかい。それも話の最中にぶっ込まれるから一瞬「はい？」ってなる。
「とにかく帰ってくれ。風呂も入ってさっぱりしただろ？」
「まあ、そのうちね」
「そのうちっていつだよ」
「キンジが強襲科であたしのパーティーに入るって言うまで」
「でももう夜だぞ？」
「何が何でも入ってもらうわ。私には時間がないの。うんと言わないなら――」

「言わねーよ。なら？　どうするつもりだ。やってみろ」

キンジの横柄な態度にアリアがその赤い瞳をぎんっ、とつり上げて。

「言わないなら、泊まってくから！　長期戦も想定済みよ！」

「は!?」

アリアの指さした方向を見るとトランプ柄のブランドものっぽいトランクが鎮座していた。なんかでかくね？　これ何日分だよ。服足りなくなったら近いんだから自分の部屋に取りに戻ればいいのに。『面倒くさい』とはいわせねぇ。

まあ、なんにしろアリアがこの部屋に泊まるのはあいつの脳内ですでに決定事項だ。今からその考えをひっくり返すのは至難の業。

「キンジ、あきらめろ。部屋もベッドも空いてるし困らないだろ？」

「あきらめろって、お前はいいけどさぁ」

「アリアは自分が決めたことは納得できる根拠がないと変えないぞ　？　なんかあるのか？」
「なんか考えるのもめん　d「それ禁止」……イヤになってきた」

アリアの前で2度目の禁句とはなかなか度胸があるな、キンジ。次言ったら多分サマーソルトくるぞ。

「とりあえず寝室を要塞化するわ。陸手伝って」
「はいよ」
「バカキンジ。アンタはここにいなさい」
「いろいろ小さいヤツに言われなくてもいかねーよ」
「誰が　！　胸が！　極小！　だ！」
「いた、いだだだ　!!　そこまでは言ってない！　いだだだ！」

キンジの一言にアリアがサマーソルト↓三角締め↓腕ひしぎのコンビネーション

技をお見舞いする。

あーあ、アリアを胸の話題でからかうからこういうことになるんだよ。ご愁傷様です。

それからしばらくは寮の廊下までキンジの悲鳴が響いていたらしい。

どうでしたでしょうか。

白雪とも知り合いな陸。こいつの交友関係は誰までつながっているのでしょう？

これからも亀並に精一杯更新しますのでお願いします。

5、その男未知につき

第5話です！

何とか2日開けずに更新できた、と自己満足中です。

――――sideキンジ――――

翌朝。

昨日はどっかのツインテール（アリア）が家に押しかけて来て『ドレイになれ！』とか『ここに泊まっていく！』とかふざけた事を言ってる夢を見たな……。すごくはた迷惑な夢を見てしまった。でも夢の中の陸が作ってくれた飯はうまかった。

「バカキンジ　！　ほら、起きる！」

がすっ！　と腹にハンマーパンチが決まり。

ぐしゃ！　と俺の顔面をアリアが黒いオーバーニーソックスで踏みにじってくる。

……ああ、夢オチじゃなかった。

「はにふんだこの！」

「朝ご飯　！　陸が作ってくれたんだから早く起きなさいよ！」

「じゃ……あ……ど……け　！」

俺は顔に押しつけられたアリアのアンヨを両手で押し返す。もう本当に昨日から何のエロゲですか。

「陸のご飯が冷めるじゃない！」
「行くからそれぐらいで攻撃してくんな、バカ！」
「それぐらい!?　バカ――ですって!?　キンジの分際で！」
分際でって何だ分際でって。ずいぶん好き勝手言ってくれるじゃねぇかこの野郎。
「お前が黙れ　b」「　2人とも～？　朝飯はこれからずっとなしでいいんだな？」
「「すぐ行きます　！」」
これからまともな朝飯が食えるのに棒に振る手はない。ここはひとまずアリアと休戦して急いで行かなければ。本音？　……陸の間延びした声がクソ怖い。
アリアと手分けして（？）俺の着替えをし、急いでリビングに向かう。

「やっときたか。悪いな、昨日のあまりだとフレンチしか作れなかった。食べれるか？」

「あ、ああ。大丈夫だ。パンもいけるぞ」

「OK。明日は和食にしよう」

そこにはどこぞのレストランかと思うぐらいの朝食が並んでいた。フレンチトーストにサラダ、冷製のコーンクリームスープ。最近は和食のお重を食べたりコンビニのおにぎりで済ませたりと両極端だったのでなんか新鮮な感じがする。ってか昨日の余り物って感じの料理じゃないだろ……。めっちゃうまいし。陸に完全に胃袋掴まれてるな、俺。向かい側でも「ふにゅ〜」と言いながら頬に手を当ててご満悦で食べている。こいつもか。

「アリア」
「ふにゅ？」
「クリームついてる」
「ありが、＃＄％＆＊!?」
「んむっ!?　げほごほ!!」

ちょうどコーンスープを飲んでいる時に来たその行動の威力は絶大だった。なんと陸がアリアの鼻についた（どうやってつけるんだあれ）クリームを指でとって食べたのだ！

ありえん!!　俺はこんな『恋人の朝食』みたいなもの求めてないぞ!?　外国ではよくやるのかと思ってたらアリアの顔も真っ赤だし。昨日から思ってたけど陸って鈍感な上にたらしなのか……。あんまり近くにはほしくないタイプだぜ。女子が増える。……でも言ったら飯がなしになりそうだから言わないけど。

「ん、朝から少し甘かったか」

あんたの行動がな！　アリアと意見がシンクロしたようだ。ｺﾜｺﾜとすごい勢いで首を振っている。

「そんなに甘かったか？　アリアも大人の味覚になったんだな」

「〜〜〜　!!」

えらいえらい、と陸がアリアの頭をなでる。それに対してアリアはまた顔を真っ赤にしてガタン！　と立ち上がると

ぽかぽこがすっ！　ぽこぽこどすっ！

と3回に1回のペースで俺にパンチやキックを決めてくる。みぞおちやすねに入って痛い。そんな真っ赤になりながら急所狙うって何。というかなんで俺に攻撃

してくるんでしょうね!?

「いた、いたいってアリア　！　アリアっ」

みゃうー！　となおもパンチを繰り出そうとするアリアの卵肌のおでこを手で押さえる。リーチの分、こちらにはパンチが届かない。やっと話ができるぜ。

「なによぅ」

「登校時間ずらすぞ。お前先に出ろ」

「なんで」

「何でも何も、この部屋から俺たちとお前が一緒に並んで出たら面倒な事になるだろ」

「一応男子寮だしな、ここ」

陸も朝食の片付けをしながら俺の意見に賛同する。昨日あれだけアリアで追い回

されたんだ。今日もその二の舞なんてごめんだね。

「うまいこと言って逃げるつもりね　！」

「同じクラスなんだし隣の席だ俺たちは　！　逃げようがないだろ！」

一度アリアを躱し、部屋から鞄その他諸々をとってくる。玄関の前に戻るといつの間にか準備を終えてる陸とむうぅぅぅ、とふくらんでいるアリア。

「そんな風船みたいにふくれてもダメだ　！　別々に部屋を出るぞっ」

「やだ　！　逃がすもんか！　キンジはあたしのドレイだ！　陸も！　アンタのためのドレイなんだから捕まえるの手伝いなさい！」

「はいはい、分かりましたよ」

アリアは俺の腕にしがみつき、絶対に放さないぞ！　の構えを見せる。本当に勘弁してくれ！　陸だって反応に困って、え。

「待て待て待て　!!　なんで俺を捕まえるんだ陸！」
「えー、だってガバで脅されたら仕方なくない　?」
「分かるけど粘れよ　！　『静嵐』さんよぉ！」
「陸、よくやったわ　!!」
「それとこれとでは事情が違う。アリア、お前もだ」
「みゃうっ　!?」
「お前らにつきあってたらバスに遅れるんでな」

陸が俺の首根っこをつかみ、アリアを小脇に抱えたまま部屋を出る。こんな細身でどこにそんな腕力が、じゃなくて！　何でか知らない間に靴も履かされてるけど！　とりあえず言わせろ!!

「「この裏切り者ーー　!!」」

――ｓｉｄｅキンジ・ｅｎｄ――

――ｓｉｄｅ陸――

「りっくんおまたせにゃー　！」

金色（ハニーゴールド）の髪を揺らしながらこちらに近づいてくる陰あり。彼女の名前は峰理子。俺の転校初日に追いかけ回される推理（原因）をつくってくれやがった張本人である。

俺がいるのは武偵高の屋上。盗聴の心配も少なく、もし襲撃が来てもすぐに対応できるベストポジションなのだ。

「これが頼まれたものだよぉ」

「サンキュー、理子」
「だからりこりんだって言ってるのにぃ　！」

ぽすっ、と抱きついて来ようとする理子を軽くいなし封を開ける。数日間接してきて分かった。こいつはこういうヤツだ。

――俺は理子にキンジの情報調査を依頼していた。一応俺の方でも調べてあるがどれくらい信憑性があるものか確かめるためである。後はこいつの実力？　Ａランクと格付けされているがＢに近いのとＳに近いのでは大差がありすぎる。それをはかるためだ。

ざっと内容に目を通す。

『遠山キンジ。元強襲科のＳランク武偵。現在は探偵科のＥランクで４月には武偵を辞めようと思っている。リーダーシップがあり――』

ほぼ俺の調べた内容と同じか……と言うことはこいつはＡランクでも結構上の方だな。

「りっくんでもライバルの情報はきになるんだねぇ」
「ライバル　？　誰と誰が？」
「キーくんとりっくんが」
「ああ。アリアの話　？　俺らはライバルとかそんなんじゃないよ」

調査書をしまってブレザーの内ポケットに入れる。

「うっそだー　！　だって今日キンジの寮から３人で出てきたモンだからいろんなカップリングが生まれてるんだよ？　アリアファンクラブと陸ファンクラブが対戦してるし」
「ファンクラブ　？　俺に？」
「うんにゃ」
「それ、多分気のせいだよ」
「え !?　あー、うん」

だって俺生まれてこの方告白なんて一回もされた事ないし。つきあった事もない。もちろんそう言う展開になったことなんかないし……。言ってて悲しくなってきた。モテないってつらい……。理子にまで『かわいそうな子』みたいな目で見られるし。モテないって、つらい……。

「（うすうす思ってたけどこういうタイプかぁ。そりゃ近づけないわ）」
「ありがとう、理子。報酬については連絡してもらえればいいから」
「オッケー！　何でも１つりこりんの好きなことにつきあってくれるんでしょ？」
「ああ。俺にできる範囲であればな」
「了解！　楽しみにしててね！」
「じゃあまた明日な」

手を振って別れようとすると

「りっくん　！」

ぎゅうー、と理子が後ろから抱きついて来た。普通なら背後とられるってあまり良くないんだけど、敵意は感じなかったしとりあえずやらせてみた。むにゅっ、と背中に柔らかいものが張り付く。理子を『ロリ巨乳』とあがめ奉っているヤツらがいるとは聞いたが……これのせいか。そいつらに今の状況知られたら殺されかねない。

「１つ聞きたいんだけどぉ。――何で理子に依頼したの？」

「同じクラスに　Ａランクの探偵科がいたからだけど？」

「う・そ。自分で調べた方が早いじゃん。全部『ランクオーバー』なんだからさ♪」

「……」

「理子も陸の事調べたんだぁ。こんな成績出せる人いるんだねー　？」

理子が胸元から（なぜそこにしまっている）出した紙を俺に向き直って眼前でぺらっと掲げる。

「『桜田陸。13歳までで武偵高全課程を修了。武偵始まって以来の最年少記録である。専門科目は全て。その全てにおいてSランクを取得しており解決した事件は大小合わせて4桁に登る。二つ名は『静嵐』。いるだけで人が集まってくる天性のカリスマ持ち。その人に見合ったものを事件の報酬とする少々変わり者。基本は銃と剣（ガン・エッジ）だが、場に応じて武器や戦闘形式を即座に変えられる――』」

理子の読み上げたそれは、よくそこまで調べたな、と思うようなものまで入っていて。努力に免じて少しまじめに相手しますか。

「それで？　何が言いたいわけ？」

「おっ、ちょっと雰囲気かわったねぇ。理子はそっちの陸も好き」

「そりゃどうも」

「つれないなぁ」

――『ランクオーバー』。

これは俺の二つ名ほど有名ではないがそこそこの知名度がある。主に俺をさして言う言葉だが要はＳランク以上Ｒランク未満のことだ。Ｓランクの人間じゃかなわないが、勝手にＲランクにするわけには行かない、と言うことで日本政府が勝手につけた単語である。だが意外にも海外でもこれを知っているヤツがいて、二つ名のように何回か呼ばれた事がある。俺もそのときに初めてこの単語知ったんだけどね。

「それ別に二つ名じゃないんだけどヘンなふうに広まってんのな」

「カタカナだから向こうの人の方がむしろ愛用してるんだと思うよー」

ふふっ、といたずらっぽく笑いながら紙をまた胸元に（だからなんでそこ？）しまう。俺を下から見つめる仕草はやけに手慣れていて。そう言えばこいつＣＶＲの

評価高いんだっけ。結城先生にこの間廊下ですれ違ったらなぜか興奮気味に「うちこない!?」と誘われたな。美少女しか入れない特殊学科に男を何で勧誘する。しかもこんなに平凡なのに。不知火とか誘えばいいのに。

「理子、りっくんの事しりたいなぁ」
「理子が調べた事が全てだよ」
「ぜぇったい、何か隠してるー」
「――じゃあ報酬使う？　俺の情報（こんな事）のために？」

まだ疑っているようなので奥の手を使わせてもらう。こうすれば何も考えていないようで冷静な理子はすぐに分かる。今情報を引き出すために使うのと後で選んで使うの、どちらが有効か。俺は意外と『峰理子』という人物を高く評価しているつもりだ。

「むぅー！　その手を使うとは卑怯だぞ、りっくん！」

「ごめんごめん。じゃあお詫びにヒントをあげよう」
「お？　なになに！」

口をとがらせ、幼児さながら頬をふくらます理子の頭をなでてやる。お、髪の毛サラサラ。染めてるのかと思ってたけど地毛なんだ。

「俺がここに来たのは」
「うんうん！」
「授業を受けるためじゃないよ」
「……え？」
「じゃあ、これヒントだから」
「ええ?!」
「後は頑張って推理しな。仮にも探偵科なんだし？」

固まった後叫び声を上げた理子を尻目に横を通りすぎる。アリアとは対照的なシ

ナモンの甘ったるい香りが漂ってくる。それはちゃんとした女の子の香りで、でも理子だから似合うんだろうな、と余計な事を考えた。

仮にも武偵で探偵科を専攻してるんなら自分で考えないとね？　答え待ちは良くない良くない。アリアぐらい推理が壊滅的であれば救済措置をとるかもしれないけど。

「武偵憲章　6条。『自ら考え、自ら行動せよ』。仮にも武偵なら従うべきだな」
「……はーい」
「じゃあ俺もう行くから。この後アリアに呼び出しくらってんだよね」
「いってらー」
「ａｄｅｍａｉｎ（明日）」
「――!!　ａｄｅｍａｉｎ（また明日）」

理子が一瞬驚いた様な顔をしてすぐに不敵な笑みに切り替える。なるほど。こいつもなかなかおもしろい。アリア、キンジとはまた別枠だな。もう少し探ってみて

もおもしろいかもしれない。
　今後の予定を内心で立てながら屋上のドアを閉めた。

　一方その頃。
『こちら狙撃科棟。我らのマシュマロが！　マシュマロが潰れております！』
『隊長！　このままヤツの悪行を放置しておいていいんですか!?』
『う〜む……』
『どうかご決断を！』
『早急にブチのめした方が世界人類のためです！　リア充のクソ野郎!!』
『明後日作戦会議を開く！　相手は強敵だ！　準備は周到にせねばならん！』
『さすがです！』
『すぐ全隊員に通立つせよ！』
『『イエッサー!!』』

無線機ごしに物騒な男子間のやりとりが行われていた。

「これ、俺について、でいいのか？」

当の陸に盗聴されているとはつゆ知らず……。

陸の情報が出てきたので容姿などを書いておきたいと思います。

髪・藍色（金髪は染めてたのでこっちが地毛）

瞳・緑
身長・178㎝
体重・58㎏
性格・からかうのが好きなのに恋愛に関してだけは鈍感。なのに人たらし。やれ、と言われればハニートラップもできるかも。無自覚イケメン。モテない男子の大敵。

みたいな感じです。

一部加筆・修正しました。これからもたびたびあります（汗）

文字数を統一したい！と思いつつ、なかなか実現しそうにありません。尻切れトンボにならなかっただけいいんじゃ……と思っております。

次回は時系列的に（？）AAの話になると思いますが是非ご覧ください！

6、生徒兼教師

はい、第6話です。題名で何となく想像できると思います。

「次はAAですッ」とかいってたヤツどこのどいつだ。全然違うじゃないか。東京湾にコンクリ……じゃなかった、沈めるよ！

と言うことで、本編どうぞ。

「死ねぇえええい！」

「リア充リアルに爆破ぁ！」

バラバラバラ！

バキュンバキュン！
パァン！パァン！

「おい、陸！なんだこの状況!?」
「殺されかけてる！」
「だから何で!?」
「知るか！」

現在逃走中。何で？襲われてるからだよ！信長の三段銃並みに効率のいいチームワークでな！
近くにＳＩＧやトカレフ、中間にアストラＭ９０１、モーゼルＭ７０２などのマシンピストル、棟の屋上からは狙撃科のやつらが狙いを定めている。
この前から殺気がすごいと思ったらこいつらか。学校中に広がってるから特定しにくかったんだよな……。

「陸に攻撃はいいとして、何で俺も巻き添え?!」
「アリアといるからじゃん？」
「好きで一緒にいるワケじゃねえ！」
「とりあえずつくまで我慢しろ」
「勘弁してくれ……！」

とにかくキンジがうるさいので、銃弾を凪ぎ払ったり、撃ち返すついでに銃弾ではたきおとしたりしながら目的地に向かった。

「戻って来てしまった……」

俺たちがやって来たのは強襲科――通称『明日なき学科』。この学科の卒業生

の死亡率が3パーセント弱あることに由来する。任務の遂行中、もしくは訓練中に死亡しているのだ。武偵の暗部とも言われているが、犯人の逮捕率が高いのもこの学科だ。そういう部分では花形と言えるだろう。

「死にさらっぶ!?」
「くたばれんばぁ!?」
「キンジ、何の訓練する？」

右肘を真後ろに下げ、そのまま一回りしてソバットをお見舞いする。
今日は蚊が一杯いるなぁ。2匹ぐらい潰しちゃったよ。

「えげつな……」
「何か言った？」
「いえ、何も」

発砲や剣戟の音が響く専用施設に足を踏み入れる。まずは蘭豹先生を探さないと。

「おーうキンジぃ！　お前は絶対に帰ってくると信じてたぞ！　さあここで1秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったか夏海。お前こそ俺よりコンマ　1秒でも早く死ね」

「キンジぃー！　やっと死にに帰ってきたか！　お前みたいな間抜けはすぐに死ねるぞ！　武偵ってのはマヌケから死んでいくもんなんだからな」

「じゃあ何でお前が生き残ってんだよ三上」

基本的にパーティーを組んで（アリアのように単独行動の方が珍しい）任務にあたる強襲科では仲間に対してすごく人懐っこくなる。

元強襲科のキンジもその例には漏れないようで入った瞬間同級生に囲まれていた。情報通りの人望の厚さだな。

一方俺の方は……

「きゃあぁぁ、桜さまだ！」
「超絶イケメン!!」
「専門強襲科にしたんですか!?」
「彼女いますか!?」
「拳銃ぶちかます女子ってどうですか？」

周りを女子で囲まれていた。ちなみに男子からは射殺しそうなほどの殺気を込めた視線が向けられている。この女子群を引き離さない限りここまでの二の舞だ。かといって質問全部に答えてたら朝がくる。ここはひっくるめて。

「強い女性は好きだけど、ケガしないようにね？」
「「ぶはっ　!!」」

ばたばた、と俺の近くにいた女子から倒れていく。……え、なにこれ。集団感染か何か？　男子からの視線弱まらないし。ホント何これ。

遠くの方で救護科（アンビュラス）を呼ぶ声がした。

「キンジ、蘭豹先生の番号って知ってる？」

「は？　蘭豹？　知ってるけど」

「ちょっとお　s「あんたが『静嵐』さんですかぁ？!」

蘭豹先生を電話で呼び出そうと思って番号を聞いていたのに途中で遮られました、はい。ここの男子生徒って人の話を邪魔するのが好きなの？

遮ったリーダー格っぽい男子は多分1年生。と言うか全員1年か。3年生はほとんど任務でいないし、2年はだいたいキンジのところに集まっている。

上下関係が厳しい武偵高しにしてはずいぶん礼儀知らずなヤツらだ。まあ普段からアリアと生活している身に比べればたいしたことないけど。

「もしもし、蘭豹先生ですか？　2年の桜田です。今強襲科につきました」
『そうか。もうすぐつくで』
「「おい、無視して電話かけんな　！」」

キンジから携帯を借りてかけることにした。
そっちの都合で怒られても。こっちの用の方が先約だからさ。

「それで？　君たちは俺になんの用があるの」
「すまし顔むかつく　！」
「イケメンむかつく　！」
「「ぶっつぶす　!!」」

……君たち人と会話する気あるの？　今の16歳ってみんなこれなの？　1歳

しか違わないのにまさかのジェネレーションギャップ。
皆さん同じように中指を立てながら口々に叫ぶ。集団でしゃべってるからもうなに言ってるのか理解できない。アリアじゃないんだからせめて会話は成立させようか。

「なんや騒がしいな、お前ら」
「蘭豹先生。初めまして」
「おう。お前が『静嵐』の桜田やな？」

もうどうしようこいつら、とか思ってる時にタイミング良く先生が現れた。普通にでかい。多分俺よりもでかい。そしてさらにその身長よりもでかい日本刀を肩に引っかけている。こっちもでかい。俺、蘭豹先生見てでかいしか言ってないな。

「見てだいたいの状況はわかったわ。殺し合いかぁ？」
「いえ、武偵辞めたくないんで９条違反はしませんよ」

「「この、キザ野郎ー　!!」」
「黙ろうか」
「「……」」

軽く睨んで黙らせる。このぐらいの殺気で余裕なくしてるようじゃ、俺どころか上勝ちなんて夢のまた夢だね。
先生も強襲科だけあって考えが物騒だ。まあでも。

「『武偵』として殺していいんだったら遠慮しませんけど」
「……ほおぅ。自分なかなかおもろいなぁ」

目にかかった前髪を掻き上げて先生を見る。さすが高評価な学校の教師。それなりに耐性があるね。今、俺は殺気の範囲を1年だけにして濃くした。他のところに

は一切広めてないからこれに気づけるのは相当な猛者だね。２年の何人かと、先生。後は上の階からこちらを見ている女の子。その子に手を振って視線を前に戻した。

「黒桜さまもかっこいい……」
「「ぶはっ」」
「救護科ぅー　!!」

女子も危ないなぁ、とか絶対思ってないから。俺はそんなこと断じて思っていない。ただすこーし、救護科忙しそうだなーって思っただけだから。

「っ、おもしれぇじゃねえか　！　やってみろよ!!」
「先生、あいつ潰していいんですか」
「好きにしろや。一回根性たたきなおさなあかん、おもっとたし」

「分かりました」

周りにいた関係ない生徒たちが壁際によっていく。壁際によっているのはキンジたち2年生だけ。先生は適当なところであぐらをかいて酒を出し始めた。武偵高の教師、本当にまともなのがいねえな。ってかそのでかい瓶どっから出した。

「Do(か)in(っ)co(て)m(来)ing(な)(よ)」

「なに言ってるかよくわかんないけど　！」

「「ぜってぇナメてるよな　!?」」

やっぱりこの学校バカだな。単純な英語なのに分からないとか。そもそも英語自体分かってるのか？　バカなのは知ってたけど。こんなに分かりやすい挑発に乗っちゃダメでしょ。

「「おらぁぁぁ　!!」」

「自分の位置知らせてどうするの」

それぞれ大なり小なりの剣をもって襲いかかってくる。こいつらのランクがどれだけか知らないけど所詮アマチュア。一度も外で仕事をしたことがないひよっこに俺（プロ）がまけるワケがない。ここは格の違いを見せてやりましょうかねぇ。

剣の峰や柄で痛覚を刺激して強制的に麻痺させる。次に左足を伸ばして時計回りに一回転。上に飛んで回避しようとしたやつらは剣幅で肩を押してすでに倒れたヤツの上に折り重なるように転ばせる。

ババババン!!

バラバラバラ!!

斜め上から銃弾が雨あられのように降り注ぐ。攻撃も決まらない、人数も減っていくとなれば焦るのも無理はない。数にものいわせて銃撃戦に持ち込めば勝てると

思ってるんだろうか。まあチームワークやタイミングは悪くない。

ガン、ガン、ガン、ガン。

ジャケットの中に手を交差させるように突っ込んで抜きざまに放つ。俺のてから離れた計20本のナイフが銃口に突き刺さった。

「撃ったら腕が飛ぶよ」
「っこの……！」
「終了や、ガキども!!」

最後の1人になったリーダー格の男子が自棄気味にナイフを掴んで飛びかかる。
それを剣ではたき落とし、蹴り飛ばしたところで

ッドォォン!!

ゴングの代わりにＭ５００の号砲が鳴り響く。デザートイーグルと同じく50口径のこの銃は９㎜弾の銃と違い発砲音がばかでかいのだ。貫通性も破壊力も高いのだがその分腕にくる反動も大きい。それにびくともしないというのはさすがと言うかなんというか……。

「この勝負は桜田の勝ちや　！」

「何でだよ　！　まだおわってねぇだろ!!」

リーダ格の男子が蘭豹に突っかかる。そうやって目先の感情ばっかり優先させてるから大事なことにも気づけない。そういうバカなヤツが強襲科なんてやってると簡単に死ぬよ？

「何も分からんくせにいきまいとるから桜田に遊ばれるんやで　？」

「え？」

「入試でＡやＢをとったからいうて調子にのっとったヤツらは気づかんかったかもしれんが――桜田は元の位置から一歩も動いてないで？」

その通り。俺は一歩も動いていない。強いて言えば軸足にしてた右足は動かしてすらいない。そのことに男子生徒は驚いた様に目を見開いて、その場に膝をつく。さあ問題はここから立ち上がる努力をするかどうか。たたきのめした張本人が言うのもなんだけどこういうプライドが高いヤツは潰れやすい。だが、潰れないで持ち直せば強くなる事はできる。

「２年も見とったら分かると思うが、調子のってるヤツは潰されるで！　なんたってこいつ
『ＡＤＣＴ』やからな！」
「「『アドクト　？』」」

――『Armed（実戦）Detective（指導）Combat Trainer（員）』、通称『ADCT』はその名の通り武偵の実戦訓練を指導する指導員の事だ。主に16歳から22歳の若年層が90パーセント、欧米や北欧ではすでに取り入れられている制度でもある。選ばれるのは武偵として3年以上の活動履歴があり、Aランク以上を最低2年間保持している者。IADAから直接の指名で、この役に就いた者は各国で優遇される。その代わりランクが落ちた瞬間に話は白紙に戻され、ランクも正規のものからワンランク落とされる。もし落ちてCランクになったら、Dランク武偵として登録されると言うわけだ。大変名誉な職であると同時に多大なプレッシャーがかかるのだ。そもそもなぜ若年層が多いのか。熟練の武偵が教えた方がいいのでは？　と思うだろうがそうではない。あくまでこの制度は学生武偵のためにあるのだ。犯罪が凶悪化、多組織化している昨今において学生武偵の能力向上は必須とも言える。普通の科目でもよくある『先生に教えてもらうよりも友達の方が分かりやすい』というやつだ。年が近い方が感覚が似ている場合が多く、教師に口で説明されるよりも効率的に能力が上がるとの研究結果がアメリカでも発表されている。指導員は同じ学生なので気軽に接することができるのもこの制度の利点だろう。

「要はあれやあれ。生徒兼教師や」
「「教師ぃ　!?」」
「ちなみにこいつ最年少で……いくつからやっけ　?」
「　14です」
「やばいぞ　!　『静嵐』が教師とか!　しかも最年少!!」「ここやばくね　?」
「緑松、蘭豹、綴、南郷……」「武偵高三大危険地帯のうち教務科がトップに躍り出た……!」「ここに犯罪者集めれば終わりだろ」「つーことは、俺ら用無し　?」「やべぇ　!」

なぜか自分たちの存在意義について語り出す始末。俺、教務科と同じ枠組みなの?　え、やなんだけど。しかも、武偵の巣窟に犯罪者はこないから。強襲科の皆さんの存在意義ちゃんとあるから安心してもらって大丈夫ですけど。

「こいつとりあえず全部できるからいろんな専門科目で見れるで」

「「マジか　!?」」

「だいたい強襲科にいることが多いから気軽にきてもらえれば。それと指導はするけどあくまで生徒だから。よろしく」

「「よ、よろしくおねがいしまーす……　!!」」

2年だけではなくさっき襲いかかっていた1年生も居住まいを正している。一応学生武偵で登録されてるんだけどな、俺。

「先生、　3年生はもう来ないんですか？」

「普通ならよっぽどヒマなヤツやないとこないやろけど……お前がいると知れば飛んでくるんちゃう？　強襲科（死にたがり）の3年やし」

「そうですか」

それは何とも光栄な話だ。是非とも一見しておきたいね。これは個人的な感想だけど、ただそれだけじゃない。日本でも『ＡＤＣＴ』の導入を本格的に始めるようで、優秀な人材をリストにしておいてほしいってＩＡＤＡ（お偉いさん）から言われてるだよ。犬になったつもりはないけどこれも仕方ない。『ＡＤＣＴ』の特典はすごく便利だし。

「『ＡＤＣＴ』の桜田陸です。改めまして、よろしく」

後日、陸に関する調査が殺到しすぎて面倒くさくなった探偵科と情報科の生徒が、合同で陸の情報を校内新聞でばらまいたとかいないとか。ただ東京武偵高校校内ネット（イントラ）で『桜田陸』の単語が１００万では収まらなかったことだけは事実と伝えておこう。

予告を無視ったメルチェです。いやあ、予告はするものじゃないですね。もうしません（コラ）

というのは冗談で……次こそはAAです！本当です。…本当ですよ!?

7、綺麗と恐怖は紙一重

第7話です。

珍しく朝に投稿しました。いつも22時過ぎに投稿してたから新鮮です！

では本編どうぞ！

「ぱんちゅー、丸見えー♪　キィーン」

「こっ、こら-！　バカライカ！　ローアングラー！　お金払え！」

こんにちは！　私は間宮あかりです。この前あこがれのアリア先輩の戦姉妹に

なった強襲科の1年生だよっ。ちなみに今怒っている方が私。
そして私が追いかけているのは同じ強襲科の友達で火野ライカ。金髪の髪を短いポニーテールにしている女の子だよ。強襲科でもAランクをとってる強いこなんだけど――

「今日という今日は許さないんだからー！」
「白木綿のガキぱんちゅはいてるヤツに言われても全然怖くないよーだ！」

――下から人のスカートの中を覗いてパンツを見るようなヘンタイなんだよ！
強襲科ではノルマが終われば何をしてもいいから、他の人と同じように自主練をしていた。アリア先輩こないかなぁ……、なんて考えながら二階のトレーニングルームでエクササイズバイクを立ちこぎしてたらめくられたの！　ライカに！
立ちこぎなんてしてるからだろ？　だって座ると足がペダルに届かないんだもん……。

毎回恒例の追いかけっこをする私たちだけど、それも長くは続かなかった。1階を見下ろす男子生徒の会話を聞いてライカが急に立ち止まったからだ。そのせいで、むぎゅ！　とライカの背中に激突してしまう。

「――おい、聞いたか。キンジが強襲科に帰ってくるって!?」

「付き添いで桜田も来るらしいぞ!?」

「マジかよ！　キンジって遠山キンジだよな？　それにあの桜田もかよ！」

「強襲科の主席候補って言われてたヤツと『静嵐』か！」

2年の先輩たちがどこか興奮気味に語るのを聞いたライカは――

勝ち気なその顔に緊張感をよぎらせている。その様子があまりに珍しかったので、一度怒りを脇において呼びかけた。

「……ライカ？」

「遠山キンジ……あの人が帰ってくるのに加えて桜田陸か」

「キンジに陸……？　その人たち誰？」
「両方とも 2年の先輩。桜田陸の方はお前も知ってるだろ？　4月から転校してきた『桜さま』だよ」
「え、あの ？」
「そう。最近学校中で噂になってるあの人」

2年の『桜さま』は学年が違う私たち1年生の間でも有名だった。すごくかっこいいんだって。そう言う噂をあまり知らない私でも知ってるくらいだから相当人気があるんだと思う。残念ながら顔は見たことないんだけどね。

「んで、その桜田陸の二つ名が『静嵐』。　Sランク保持者で8歳の時からインターンで中等部に在籍。13歳の時に武偵高1年に飛び級したって言う超絶エリート。解決事件は大小合わせて4桁に迫る勢いらしい」
「 8歳から!?　飛び級!?　4桁ぁ!?」

「詳しくは分からないから探偵科のヤツにでも依頼して聞いてみれば　？」

ライカから聞いた桜田陸の情報は驚きでいっぱいだった。高校生で2つ名を持っているのももちろんすごいけど、それより年齢の方が気になる。もちろん今の時代武偵になりたい小学生がインターンで入る事もあるにはあるけど、よっぽど優秀じゃないと入れないハズだ。12歳で入るのも考えられない事なのに8歳からなんて。

ライカも私が驚くのは分かってたみたい。アリア先輩ぐらいすごい人なんてそんなにいないし、志乃ちゃんにでも依頼してみようかな。

「もう　1人の遠山キンジは任務でいつもいなかったし、去年転科しちゃったけど……前は強襲科でSランク武偵だった」

「い、　1年の時にSランク!?　そんな人いるんだ……！」

こっちにも!?

武偵ランクの頂点――Ｓランク武偵は厳しい人数制限があり、各分野で突出した能力を持つ者だけが選ばれる。大人の武偵も含めて、世界で数百人しかいない存在だ。

アリアもそうだが、高校生がＳランクに格付けされるというのは希なことだ。それが経験を積んだ２、３年ではなく１年生以下と言うことであればなおさら。

「遠山キンジは入試で教官を倒したらしい。伝説の男だよ。先に紹介しちゃった人があれだからそう感じないかもしれないけど、プロ武偵に勝てる厨房も十分バケモノだろ」

ライカの解説に内心納得してしまう。

武偵高の教官は前職が強靱な軍人・傭兵・警察……他にはマフィアなどと噂をされる全国選りすぐりの屈強なプロたちだ。その強さは生徒であれば身をもって日々思い知らされる。

そんな彼らを当時中学３年生が倒したというのだ。桜田陸と同じようにバケモ

ノ扱いされても不思議ではない。

「……バケモノ……」

ライカの話から2人の人物像を想像してみる。遠山キンジは教官を倒したのだ。きっとアクション映画でバズーカ砲を片手で撃つようなプロレスラーみたいな大男。桜田陸は女子が話題にするほどの美少年だ。さすがにプロレスラーはない。ボクシングの選手みたいなマッチョだろうか。

（そんな人たちが同じ学校なんて……私、入試は補欠合格だったのに……）

1人想像をして恐怖に震えている私の横で。

「　2人とも話した事ないけど顔は知ってる。あっ、あれだ」

「……」

「キンジだ　！」「本当に帰ってきた　！」「桜さまー　！」「超絶イケメン　！」

ライカがおもむろに指したのは1階のホール。私もおそるおそるそこを覗いてみると、2人の男子生徒があっという間に人に囲まれていた。片方は男子。もう片方は女子。2年の先輩がもみくちゃにしてる方が遠山キンジ。女子に囲まれて困り顔なのが桜田陸だろう。

（……？）

2人のギャップに私は戸惑う。だって全然想像と違う。遠山キンジは少し目つきが悪い暗そうな人だし、桜田陸は芸能人と言われても納得してしまうほどの美形。中性的な顔立ちですごくきれいな人だ。女子が噂するのも頷ける。加えて2人とも細身で武偵高の生徒が騒ぎ立てるほどバケモノな感じはしない。

「……なんか……想像してたのと違う……」

「そう見えるんだよな。特に遠山キンジなんか。上勝ちすると大手柄だから狙ってる1年もいるけど……どうも勝てる気はしない」

上勝ちとは下級生が上級生に私闘で勝つと言う意味の武偵高の隠語のこと。実戦

的な訓練の年数は本人の実力に直結する。数ヶ月でも差が出るほどだ。年単位で違えばその差は大きい。普通はそんな上級生に勝つなんて事は起きえないので成し遂げた者は教師かあらも周りからも高く評価される。

口ぶりから察するにライカも少しは狙っているのかもしれない。

「それに、あの人の戦妹は 諜報科（レザド）の風魔だし。あれも闘（や）りにくそうなんだよなぁー。まあ、そばに桜田陸がいるならケンカふっかける気にもならないけど」

と、後頭部をかきながら歯がゆそうにライカがトレーニングジムを出ようとした、そのとき――

「ちょっとお　S「アンタが『静嵐』さんですかぁ　!?」

仲間を大勢引き連れた男子生徒が桜田陸に声をかけていた。どちらかというと挑発っぽいだろうか。仲間も剣や銃を取り出していてまるでケンカを売っているよ

う。

「ライカ　！　なんか下でケンカが起こりそうな雰囲気だよ！」

「何っ　!?　上勝ち狙いの１年か！　誰だ？」

私の一言にライカがトンボ帰りしてくる。正直なところは分からないけど一年生（下級生）が二年生（上級生）にケンカを売っているのだ。上勝ち狙いとみてほぼ間違いないだろう。まさか二つ名持ちのエリートに仕掛けるとは思ってもいなかったが……。

男子生徒たちが一方的に騒ぎ続けること数分。入り口から蘭豹先生が入ってきた。蘭が名字で豹が名前の香港出身の女教師である。

「仕切ってるのは田村か。あたしにも負けるようなヤツが上勝ち狙いとはバカもいいところだが……桜田先輩の戦い方が見れるならナイスだな」

「……　？」

ライカがおもしろそうに階下を見下ろす。ライカは強襲科で男子よりも強く、転がされた男子は大勢いる。田村くんはそのなかの１人だ。

桜田陸の呼び方を紹介の時とは違って『桜田先輩』とライカは言い換えた。そこには何か尊敬の念がこもっている気がして気になる。私もアリア先輩に憧れてたからそういう気持ちはよく分かるんだ。でもライカが男の人を尊敬なんて珍しい……。

――と、人の事を考えていた思考は次の瞬間一瞬で吹き飛ばされる。

「『武偵』として殺していいんだったら遠慮しませんけど」

言葉とともに濃密な殺気を感じとったからだ。もちろん私に向けられたワケじゃない。対象は田村くんたち１年生の男子。そこの一点に集中するように向けられている。間宮の本能が告げる。この人だけは――敵に回しちゃいけない。

「あかり ?!　お前具合悪いのか？」
「え ？」
「すごい汗かいてるぞ !?」

ライカに言われて初めて気づく。体中に冷や汗が伝っていた。緊張の度合いが半端じゃない。ライカは心配そうに私に声をかけている。この様子から見て殺気には気づいていない。一部の人しか気づかないなんて相当なコントロールが必要だ。それをいとも簡単にやるとはさすが武偵高で騒ぎ立てられる人物と言うことか。

「…… !」
「桜田先輩余裕だな……。なんかこっちに手振ってるけど、あかり知り合いか ？」
「ううん」

突然、桜田陸がこちらに向けて手を振る。自分の殺気に気づけた人間だと分かっているのだ。しかしその顔は実に穏やかで。まるで友達に手を振るような気軽さだ。同一人物の雰囲気とは思えない。気づけば、私は桜田陸を窓越しに食い入るように凝視していた。

「……それにしてはやけに魅入ってるな」

「……」

この至近距離でライカのつぶやきが聞こえないほどに私は階下の人物を注視していた。

「……すっげぇ」

――結果だけ言えば1年生の惨敗だった。

剣や銃を使う数十人を相手に日本刀一振りで圧倒する実力。闘う姿は何かの踊りみたく綺麗。先ほどの恐怖はどこへやら、そこには思わず息を止めてしまうほどの綺麗さがあった。一言しかもらせないライカの気持ちが良く分かる。ここまで実力を見せられては認めるしかない。この人はアリア先輩と同等かもしくはそれ以上。ライカが尊敬するのも仕方ない。

「あかり、どうせだから近くに行こうぜ」

「ちょっと、ライカ！」

ライカが私の手を引いて1階に駆け下りる。速いってぇ!!　30㎝ほどの身長差があるライカに引きずられるように走る。足の長さが違うんだから考えろ、バカライカ！

私たちが降りている間に桜田先輩についての話題は進んでいたみたい。

「「『ＡＤＣＴ』　？」」
「要はあれやあれ。生徒兼教師や」
「「教師ぃ　!?」」

学年問わず生徒の間から連続で驚きの声が上がる。え、桜田先輩って先生だったの!?　先輩で先生なの？

武偵高では優秀な人材を教師として雇っている。19歳という若さながら教師をやっている蘭豹先生がいい例だ。しかし生徒兼教師の『ＡＤＣＴ』という制度は初めて聞いた。外国で活躍していたアリア先輩なら何かしってるかも。帰ったら聞いてみよう。

「こいつとりあえず全部できるからいろんな専門科目で見れるで」
「「マジか　!?」」
「だいたい強襲科にいることが多いから気軽に来てもらえれば。それと指導はす

るけどあくまでも生徒だから。よろしく」
「よ、よろしくおねがいしまーす……　!!」

さっき闘っていた1年生だけではなく2年の先輩たちも背筋を伸ばしている。みんな同じように緊張しているのだ。私も隣のライカまでも背筋を伸ばしている。そんな中、一人だけ自然体の男子生徒は目立った。遠山キンジだ。他の人と同じように緊張した面持ちだけど、そこまで体は固まっていない。いくら存在感が薄くて暗い人でもさすがに一人だけ違ってたら目立つ。桜田先輩に自然体でいられるなんて、遠山キンジはライカの言うとおりバケモノなのかもしれない。そう言えばどこかで名前を聞いたような……。
全然思い出せないけど。

「キンジ、申請に行こうぜ。俺も一応武器だけ登録しないと」
「お前登録してなかったのかよ？」

「始業式にごたごたしてた今まで忘れてた」
「その節はどうも」

桜田先輩は遠山キンジと仲がいいらしい肩を組みながら出て行った。桜田先輩はさっきの怖い笑顔じゃなくてすごく無邪気な顔で笑っていた。

「「桜さまカワイイ～　!!」」
「不知火×桜さまだと思ってたけど……キンジ×桜さまも捨てがたい　！」

その笑顔に1、2年の女子が騒ぎ出す。蘭豹先生も出て行ったので、体育館の中は余計に盛り上がっていて、みんな自主練どころではなくなっていた。

「ライカ、キンジ×桜さまってどういう意味　？」

「なっ……あたしにそれを言わせるなッ。あかりにはまだ早いっ」

さっきの女子の会話について聞いただけなのに、ライカは顔をすごく真っ赤にして体育館から出て行っちゃった。同い年なのに教えてくれないなんてライカのケチ！　いいもん、志乃ちゃんに聞くから！

意地悪なライカにあっかんべー、と舌を出しながら、2階のトレーニングジムで自主練を再開した。アリア先輩に近づくためには頑張らないと！

今回は予告を無視らなかったメルチェです。

次ぐらいまでAAでいきたいと思います。（変更の可能性アリww）

6話あたりからお気に入りが倍近くになってとても嬉しいです！

なので感想や投票などもっといただけたら嬉しいなぁ、と調子に乗ってます！

お待ちしています!!

8、仲裁

こんにちは、メルチェです！

すでに7話から2日以上空いている(汗)
それと試験のため1週間ほど更新止まります……

陸の発言に注目！
と言うことで本編どうぞ！

――side陸――

「かぁーわぁーいぃー！」

ぎゅううう。

アリアが謎のネコ科動物を抱きしめている。それはもう破裂しそうな勢いで。

俺たち一行は学園島の中にあるゲームセンターに来ている。俺たちを強襲科棟の外で待ち伏せしていたアリアに、キンジが「ゲーセンに行く」と言ったところ興味をもってついてきたからである。俺もそういうところにはつれて行けなかったしな。

アリアが今にも抱きつぶさんとしている謎のネコ科動物改めレオポンは、入ってすぐのＵＦＯキャッチャーの中にあって見事アリアのお眼鏡にかなった代物である。とるにとれなくて３０００円も使ったアリアに仕方なくキンジが変わったところ、なんと、３匹連なって出て来たのだ。しっぽにしっぽが重なるように。しっぽ三連弾。

とれたときには三人で迷わずハイタッチしたが二人はすぐに「フン」とそっぽを向いてしまった。やれやれどうにかどうにかならないものかね？

「陸、はい」

ふと見るとアリアが俺の方にレオポンを１匹向けている。どうやらくれるらしい。つい、口角があがってしまう。なんか父の日にプレゼントを渡す娘、みたいな感じだ。ほほえましい。全国のお父さんが娘を好きな気持ち分かるかもしれない。

「ありがとう」

「キンジにも　１匹あげるわ。アンタあの手柄だからご褒美よ」

「お、おう」

アリアがつり目気味のおめめを細めると普通にカワイイ。元が美少女なので当たり前なのだが、なにせ普段の凶暴アリアを見ている身としてはすごい変化である。キンジの顔が少し赤くなり、照れているんだな、と分かった。

「先につけた人が勝ちょ？　陸、キンジ」
「なんだそりゃ、ガキかお前」
「まあ、いいじゃん。やろうぜ」
「やったわ、入りそう」
「こっちも……入るぞ、お前らには負けねー」

レオポンは携帯につけるストラップだった。アリアの提案でそれを二人で競い合う。しかしこのレオポン。しっぽ付近にストラップ用のひもがついているのだが、微妙な太さで入れづらい。しかもしっぽがすごく邪魔。誰だこの設計にしたヤツ。

「やった！　入ったわ！」

「こっちも入った」
「俺も」
「じゃあ、あたしの勝ちね　！」
「何でだよ」
「だってあたしが　1番最初だったじゃない！」
「いや、俺だ　！」
「もう同時ってことでいいじゃん」
「それはダメ」」

ぴったり声をそろえながら言う二人に思わずクスッ、と笑みをこぼした。元を含めたSランク武偵三人で挑む事件にしてはスケールが小さいが……普段がでかい分たまにはあってもいいだろう。事件に挑む日常のなかで普通の高校生みたいな日が。

「キンジ、気づいてるか？」
「ああ」

ゲーセンのゾンビゲーム（銃型のコントロールを握ってゾンビを倒すゲーム）を俺とアリアでやって最高点をたたき出したり、キンジが格闘ゲームで全勝したりと一通り遊び尽くしたところで俺たちは寮に帰る事になった。アリアは女子寮に一度戻ると言うので現在は俺とキンジの二人である。

そんな中俺たちは尾行されている。と言っても多分狙いはキンジなんだが。視線が一点集中しすぎて分かりやすい。相手は武偵高の1年。先ほど2階で俺の殺気に気づいてた女の子だ。もっとも、キンジは正体までは分かっていないだろう。尾行がヘタだから1年生って事は分かってるだろうけど。

「どうする？　このままやられっぱなし、とは行かないだろう？」

「いや、とりあえず撒く。風魔を待機させてあるからな。それでもついてきたら……面倒だが目的を聞こう」
「相変わらず消極的なことで」
「うるせー」

キンジの方針でとりあえずは撒く事に。後で合流するとしても、俺は一緒にいない方がいいだろう。俺はキンジ以上の警戒心を向けられているようだし。

「あ、キンジと桜さまだ！」
「ホントだー！　写メとんなきゃ！」
「こうやって見るとキンジも意外とイケてる……？」
「いや、桜さま効果でしょ」
「だよねー!!」

キンジに後で合流すると伝えて別れ道に入る。別れ際盛大にため息をつかれて「お前と歩きたくない」って言われたんだけど。いきなりひどくね　？　俺が何をしたと？

キンジと別れてから十数分後。

キンジを尾行けていた一年生を俺が尾行けている。今日は風が強い事もあって足音が響かない。さらに今通っている路地裏は所々途中で細道がついており尾行には最適のポジションだ。が、俺はそれを使わず普通に歩いている。ただ気配と足音だけを消して。強襲科の一年に気づけと言うのも酷な話だが、この子そう言うレベルじゃない。ほぼまっすぐ、キンジしか見ていないのだ。しかも憎き仇を見るような視線で。……あいつ、この子に何したわけ？

「――間宮殿。そこまでにされよ」
「……　!?」

キンジの曲がった方へと進路を定めた女の子の頭上から別の子が現れる。口当てをして少し時代がかったしゃべり方をした忍者のような女の子。専門科目は探偵科……いや諜報科だな。あの気配を殺した現れ方は追跡が目的の探偵科ではなく、潜入が目的の諜報科のもの。

「――お初にお目にかかる。某は遠山師匠の戦妹、　1年C組・風魔陽菜」
「――　!?」

キンジを尾行けていた方は間宮。現れたのは風魔陽菜、という名前らしい。『間宮』に『風魔』か。なるほど。なかなかの有名どころだ。風魔に至ってはキンジの

戦妹。あいつもやるな。

　ここまで別に逃げも隠れもせず傍観していたのだが両者ともいっこうに気づく気配はない。諜報科なら気づくかも、と思ってさっきよりは気配を出しているんだが。まあすぐに気づかれても困るんだけど。

「風魔一党は……相模の忍びだよね。なんのよう？」

「そちらこそ、遠山師匠を尾行して、何の用でござるか」

「うぐっ……！」

　風魔さんの言うとおり、１００％の正論である。尾行している人の戦妹が出て来て、ご丁寧にも名乗っているのに直接聞くか、普通。この子そもそも『探偵』が向いてなさそう……。

「風魔さんには関係ないもん！」

「……」

「……」
「……」

間宮さんの言葉に沈黙が訪れる。意外とおバカらしい。戦妹の風魔さんに関係なくて一体誰に関係があるというのか。風魔さんの落ちてこないスカート並に突っ込んではいけない質問な気がする。別に見たいわけじゃないけど。……本当だからね？

「遠山師匠は女子がお嫌いでござる。それ以上追わぬよう」

沈黙を破るとともに、

「ご友人も帰られた今、某が師匠を護衛いたす。ご免　！」

胸元から取り出した和紙の巻物の様なモノを勢いよく地面に投擲する。

なぜ武偵高の女子は胸元からモノを出すのだろうか。確かに安全上一番なのかもしれないが……。

「どこ……!?　あ、いた……」

俺が的外れな疑問と闘っている間に、風魔さんが煙幕を使って姿を消していた。一瞬戸惑っていた間宮ちゃん（あまりにドジなため呼び名変更）だが、この強風で煙幕はすぐに払われ、容易に風魔さんを見つけ出す。背中丸見せだったり、犬に吠えられてびびってるが……。ほう。なかなかの切れ者らしい。諜報科でもBランクあたりだろう。

風魔さんの策を失策（ミス）と決めつけた間宮ちゃんはその背中を追いかける。追いかけた先、路地を曲がったところで風魔さんは忽然と姿を消した。そこで初めて自分がだまされた事に気づき反対側へとかけていく。俺の真横を通って。間宮ちゃんにはきっと自分の真上にいた風魔さんが見えなかったように俺の事が見えていない。何

か１つに意識を集中しているため、他に予想外の事が起こると認識の外に出してしまうのだ。直情的で１つの事に対してまっすぐなところはアリアと似ている。

「風魔さん。俺もキンジのところに向かうんだけど、一緒に行く？」

「――――!?」

電線の上に立って間宮ちゃんの行く末を見ていた風魔さんは、聞こえてきた声に視線をしたに落とす。そこに俺がいるのを発見して、驚愕に目を見開いた。自分しかいないと思っていたら他人に声をかけられたのだから驚きもするだろう。

「桜田殿……いつからそこにいらっしゃった」

「俺、ずっと間宮ちゃん尾行してたから。キンジと別れてからずっと」

風魔さんの表情は口当てで大変わかりにくいが、かろうじて驚いているのが分

かった。そんなに前からだとは思っていなかったんだろう。

「某が気づかないとはさすが『ランクオーバー』殿でござるな」

今度はこっちに驚き、と言うか苦笑いが浮かぶ。理子にも言ったが、『ランクオーバー』は俺のランクを示すためのモノであって、俺の二つ名ではない。しかしこの二つ名もどきを、もう一つの二つ名だと思っている人も多くこちらで呼ばれることも多々ある。

もしかして、『静嵐』より多いんじゃ？

「伊達に　Sランク超えしてないからね」

「勝てないとは分かっていながらも悔しいでござる」

「じゃあ、俺も上から行くから競争する　？」

「こちらの土俵で勝負とは望むところでござる。それと、某は若輩者の身ゆえ、敬称など不要にござる」

「そう？　じゃあ陽菜、行くよ」
「合点承知ッ」

少しフライング気味に先行した陽菜を追いかける。まあこれぐらいのハンデは必要だろ。だいたいの場所は分かってるから迷う事はないし、今から抜かしてもいいわけだからな。

「なっ……！」

屋根を蹴るときに一気に加速して陽菜の横をすり抜ける。やっぱり日本は走りやすいな。向こうはビルが多くて走ると言うより飛なきゃ行けないから。

しばらく走っていると間宮ちゃんが一生懸命路地を走っているのが見える。なんかハムスターの運動会みたいなんだよなぁ。チマチマしてて可愛いんだけど。そんな感想を抱きながらあっさりと抜き去り、キンジの元に到着する。下に降りようか

とも思ったが陽菜を待つことにしよう。もうすぐ間宮ちゃんもつきそうだし。と言うことでキンジにメールだけおくる事にする。俺が立っているのはキンジの前の電灯の上。目と鼻の先のこの距離で。

「は……？　陽菜と一緒にって風魔!?　あいつも堕とされたか……」

一瞬呆けた顔をしてから携帯を顔に近づけ、なにやらぶつぶつ言っている。こいつもなにげに百面相できそうだな。相変わらず言ってる言葉の意味は不明だが。『堕とす』って何？

「はっ……はっ……」

キンジの言葉に疑問を感じていると後方にいた陽菜が俺の隣に立った。息は少し乱れている程度で切れてはいない。

「お疲れ。さすが本場の忍びは違うねえ」
「余裕で勝っておいて、何を言ってるでござる……」
「俺と勝負してこんなに早かった人そんなにいないから、驚いちゃって」
「（桜田殿が言うとイヤミに聞こえないとは何とも不思議でござる）」

乱れていた陽菜の息は完全に元に戻っている。息を乱さない訓練のようなモノをしているのだろう。俺も本気を出していないとはいえ、ここまで追いついてきたのは初めてかもしれない。Ｂランクでこの実力ならランクアップも間近だろう。キンジもなかなか人を
見る目がある。

「撒けてねーじゃねーか、風魔のヤツ。なぜか陸も一緒だし。……で、誰だお前？」

そんなこんなで陽菜とくっちゃべっていると間宮ちゃんが公園に入ってくる。間

宮ちゃんの位置から見ると死角になっていただろう木からキンジが姿を現す。上から見ていると全部丸見えだ。

「と、遠山キンジ　！　……先輩っ……」

キンジの声で振り返った間宮ちゃんがずいぶんと後付けに『先輩』という敬称をつけた。上下関係の厳しい武偵高では珍しいケースだ。間宮ちゃんはそもそも演技とかできない素直すぎる性格なのだろう。言葉の言い方から察するに何かキンジに恨みや妬みがあるらしい。視線も咎めるような色の強いものだしな。

「なんで俺なんかをつける　？」

間宮ちゃんに質問するキンジ。すごく面倒くさいと言う顔をしている。お前もそう言う負の感情に対しては分かりやすいな。

「だって……だって、ズルいです！　あたしは戦ってようやくお近づきになれたのに！　アリア先輩が自分から追っかけるなんて！　二人はどういう関係なんですか！」

激高した間宮ちゃんの言葉でだいたいを理解する。要はアリア信者の一人だ。どこの国にも存在していてだいたいはあのキュートな見た目と大男をも倒す実力とのギャップに惹かれるんだそうだ。俺もずいぶんと手荒い歓迎をうけた事があるよ。

「話が見えんが……アリアのファンか？」

怪訝な表情をしながらもどこか納得したように聞き返す。

「――俺はな、アリアに追われて迷惑してるんだ」

問題はここからだ。アリア信者に対してその一言は侮辱と同じ意味を持つ。「追っ

かけてもらってるのに迷惑とは何事!?」らしい。これだけでも危ないのに。

「どうだ。聞いて安心したか？　そしたら、もう俺をつけるな。今の俺はEランクだが、探偵科だ。1年の尾行くらいはさすがに分かる。次はシメるぞ」

キャンプファイアーに水素ぶち込まないでくれます？　アリア信者は武偵が多いために何をしでかすのかわからないんだ。間宮ちゃんも怒りでフルフルしてるし。でも何かが引っかかっている様子。『Eランク』あたりかな。

「何か隠していますね？　遠山先輩は……！」

「じゃあな」と背を向けて立ち去ろうとするキンジに向かって間宮ちゃんが指摘する。それは何かキンジの核心に触れてしまったらしい。その一言にキンジは立ち止まると――

「――度胸があるのと無鉄砲なのは違うぞ、１年」

強風に木々がざわめく中、振り返った。その眼光は鋭く、彼がＳランクだった時の姿を想像させるようなたたずまい。自分で背筋が粟立つのを感じる。普段の姿を見ている分こういう表情は鋭さを増し。――こいつ、強い。

あたりをキンジと先ほど下に移動した陽菜の殺気が広がる。それに慌てた間宮ちゃんが自分のマイクロＵＺＩを抜き、それに連動してキンジもベレッタ９２Ｆを構える。

強襲科のマニュアル通りに交互に銃口を向ける間宮ちゃんだが、

「こんなところで銃撃戦？」

――俺がいることを忘れてはいけない。

「桜田先輩!?」

「陸……先に抜いたのはその　1年だからな」
「分かってるよ」

電灯から下に飛び降りて音を立てずに間宮ちゃんの後ろに立つ。案の定驚いた顔の間宮ちゃんといいわけをたれるキンジ。本当に銃撃戦が始まってから来ても良かったんだけどさすがにアンフェアかなと思って。元Sランクと現Bランク相手にEランクじゃきついでしょ。

「間宮ちゃん、学校外で物騒な事するのは任務の時だけでいいでしょ？」
「へ……？」
「キンジもしまって。陽菜も」
「……」
「あれ!?」

間宮ちゃんから武器を掠め取って自分のポケットにしまう。それからキンジと陽

菜にも武器を下げるように指示した。キンジも本当は撃つ気なんてないだろうからね。

「桜田先輩　！　私の銃返してください！」
「俺からとれたらアリアの秘密を教えてあげよう」
「本当ですか　!?　頑張ります！」

俺に銃をとられた事に気づきすごい剣幕で迫っていたのに、アリアの話を出すとすぐに手の平を返した。目をきらきらと輝かせて違う意味で迫ってくる。そんな間宮ちゃんの姿にキンジが

「……現金なヤツだな」

と呆れた様に呟いた、そのとき。

――ぴゅう――！

強風が吹き付ける。その風によってふわっ、と間宮ちゃんのスカートの後ろ側が完全に上までまくれ上がり、中がはっきり確認できてしまう。

「ぱ、ぱんちゅーが　！」

慌てまくった間宮ちゃんはかみまくって、後ろをさえたまましゃがみ込んでしまう。言うまでもなく間宮ちゃんの顔は真っ赤で、ってキンジ。なぜお前まで赤い。思春期か？

「――なっ、なんなんだお前は　！」

「し、師匠　！　お気を確かに！」

ぶつぶつと呟きながらヨロヨロと歩き出したキンジを、陽菜が慌てて追いかける。

女が苦手、と言う話はウソではないらしいがあれはもっと違う種類の避け方に見えたな。例えば、女性が原因で何か起こるとか……。

「桜田先輩　？　……！」

「簡単にはとらせないよ」

俺が考え込んでいる隙にとろうと狙って来た右手から逃げるようにその場でターンする。間宮ちゃんの攻撃を躱しながらも、遠山キンジという男について解かなければいけない謎に優先順位を立て始めていた。

第８話はあかり目線で書かれているAAのシーンを陸目線にしてみました。ひたすらあかりはドジです。（笑）

キンジの戦妹・風魔陽菜のことを最初は『風魔さん』と呼んでいたのに敬称はいらないと言われてあっさり『陽菜』と呼んでしまうあたり天然たらしですねえ。（※ただしイケメンに限るww）

次回は試験が終わり次第早めに更新します！

9、身体測定

お久しぶりです！

テストと書いて地獄と読む日々が終わりました！

メンタルが粉々に粉砕されて灰になりかけているのでここら辺で更新して回復したいと思います。

では本編へっ。

――ｓｉｄｅあかり――

「――そーなんだ！　志乃ちゃんも戦姉妹（アミカ）契約できたんだね！」

「はい！」

体操着に着替えながら志乃ちゃんの報告に返答を返す。返すけれども。

志乃ちゃんもライカも大きくていいなぁ……。それに比べて私は……。

やっぱりそこが気になっちゃうんだ。志乃ちゃんは真っ赤で色っぽいランジェリーだし、ライカは黒の大胆な下着。私も2人みたいな下着が似合う様になりたいよ。

「……今日は先輩の引率で身体検査とか、イヤな予感しかしないぜ」

ライカが愚痴をこぼしながら見た、更衣室の入り口付近には――

制服姿でクリップボードを持ち、私たちの着替えを待っているアリア先輩がいた。アリア先輩今日もカワイイ……！

「ほら早く着替える　！　武偵憲章５条、行動に疾くあれ！」

怒ってるアリア先輩もキュート、ってそうじゃなかった！　ポスターにして貼りたいぐらい可愛らしいけど今は着替えて行かなくちゃ！

そうして体操着姿になった私たちはアリア先輩について行って専門校区の歩道を歩く。一番最初は救護科（アンビュラス）。

「よし、身長測るぞー」

「「え、桜田先輩　!?」」

救護科（アンビュラス）の保健室には医療器具の他にライフル棚が仮設されており、いろんなライフル銃がズラリと並んでいる。ここで身長測定をするのだがなぜか桜田先輩が身長

計の横に立っていたのだ。……なぜか白衣を着て。

「陸も一緒に回るわ。さすがに更衣室の前には行かせられないからここで待ってもらったの」

「「……はぁ」」

「１年生トリオ。俺の事は陸でいいから」

「じゃあ、陸先輩。あたしから１つ質問いいですか」

「どうぞ」

「なんで白衣着てるんですか？」

アリア先輩があまりにも普通に反応するから疑問に思ってるの私だけかと思ってたけど……ライカもだったんだね！　隣で志乃ちゃんも首を振ってるし。

「あ、これ？　似合わないか？」

「「いえ、格好いいです　！」」
「ありがとう」

ライカと声をそろえて否定する。すっごくかっこよくて、すっごく似合ってるんだけど問題はそこじゃなくて！

「……それでなぜ着ていらっしゃるんですか？」
「それは、ってなにしてんの、アリア？」
「避けてるんじゃないわよ、このスケコマシ！」
「それで止まってるわけないでしょ」

さすが志乃ちゃん！　頼れるお姉ちゃん！　聞きたかったことをズバッと聞いてくれたよ！
陸先輩っていつの間にか人のペースを持って行っちゃうから、いつの間にか話題

が変わるんだよね……。なんか志乃ちゃんが少し怖い感じがしたけど、きっと気のせいだよね？

と言うかアリア先輩が陸先輩に遊ばれてる……！

殴りかかってきたアリア先輩を陸先輩が軽く受け流し、おでこを押さえている。

アリア先輩、腕が届いてなくてブンブンと空を切っている。

「この白衣、高天原先生に渡されたんだよ。東京武偵高校の男子生徒が引率する場合には着るのが決まりだからって」

「「は　？」」

「ノルウェーとかもそうだったけど、ココって以外と珍しい事やってるよな」

「そうなんだ　！」

「いや、違うからな、あかり」

え、違うの!?

「……気にしなくていいわ。陸はかなり天然入ってるから」

「ああ、なるほど」

「なぁ、間宮ちゃん。何で火野さんと佐々木さんが頷いてるのか分かる？」

「何となく……？」

陸先輩に尋ねられて曖昧に答える。そうか、陸先輩って天然なんだ……。確かに男子生徒は白衣なんて聞いたことないもんね。でも陸先輩の話を聞いてるとノルウェーではあったってこと……？　あれ、ノルウェーってどこだっけ？

「ノルウェーはヨーロッパの北の方にある国でね。オーロラも見れるんだよ？」

「うへっ!?　あの、陸せんぱ、ちかっ……！」

目の前で私をのぞき込んでいる陸先輩のドアップ。肌白い。瞳の色が少し紫入っ

てる……。あまりの近さにテンパって全く関係ないことを考え始めてしまった。
って、あれ!?　いつの間にか声に出てた!!

「陸　！　アンタはそのアメリカ仕込みのパーソナルスペースの狭さを直しなさい！」
「何で　？」
「日本の女の子には狭すぎるのよッ」
「アリアにもこんなモノだろ　？」
「そういうことじゃなーい　!!」

うがー、とアリア先輩が真っ赤になりながら怒っている。陸先輩、ホントに天然なんだぁ。外国での暮らしが長いとみんなそうなのかな？

「遊ぶのはココまでにして」
「なんですって　!?」

「そろそろホントに身長測らないと時間なくなるな」
「……はぁ。そうね」
「火野さんはＦＡＬ、佐々木さんは　Ｍ4、間宮ちゃんはＧ１１」
「そんなところでしょうね。じゃあ　１人ずつこっち来て」

陸先輩がアリア先輩の横にポイポイとライフルをおいていく。
それにアリア先輩も賛同していて。２人ともすごい人だから考えも同じようなことなんだろうなぁ。そうやって以心伝心？　みたいなのすごくうらやましい。私なんかアリア先輩と全然釣り合ってなくて、今は銃も持ってないし……あ！　そう言えば。陸先輩からまだマイクロＵＺＩ取り返せてない！　アリア先輩の秘密、聞けてない！
そのとき陸先輩の白衣のポケットからグリップが覗いていた。あの色と形はマイクロＵＺＩだ！　あれだけ出てたら行ける！
背後からちょっとずつ近寄って後ろから一気に――！

「はい、残念。間宮あかり１３９㎝。やっぱりＧ１１だな。この銃やめておいた方がいいんじゃない？」
「あれっ？」
いつの間にか身長計に乗せられて身長を測られている。
あれ……？　私陸先輩に飛びかかったんじゃなかったっけ？　い、一体何が……。
「火野ライカ、１６５㎝っと。陸、何でアンタがあかりの銃をもってんのよ？」
「それにはちょっとした訳がありまして」
「ふぅん？　ずいぶん仲がいいじゃない。陸の好みは年下なのね」
「なに、すねてんの？」
「拗ねてないッ」
「心配しなくても一番仲のいい女子はアリアだよ？」
「――だから！　それが狭いっていってんのよッ」
「お？」

頭をなでられて真っ赤になったアリア先輩が陸先輩に背負い投げをかます。お手本みたいに綺麗なフォームのそれを陸先輩は少し腕をひねってから空中で2回転して着地した。

「「「すごい……」」」

私たち1年生は驚きの声を漏らしてしまう。陸先輩の事すごい人だと思ってたけど全然分かってなかったみたい。アリア先輩の技をあっさり受け流しちゃうし。あの完璧なアリア先輩も陸先輩の前だと雰囲気が全然違う。まるで好きな人と一緒にいるみたい――。

「〜〜〜っ　!!　次行くわよッッ」

「「「は、はいっ　!!」」」

怖いよぉおお!!

次に行うのは狙撃科（スナイプ）の狙撃レーンで行われる視力検査。狙撃銃のスコープを使ってやるんだ。

「構えて」

陸先輩のかけ声で立位射撃（スタンディング）でＬ９６を一斉に構える。使うのはスコープだから銃は何でもいいんだけど、これが一番多く用意されてるんだ

アリア先輩は陸先輩の横で記録係をするみたい。私が言えたことじゃないけど、陸先輩身長高いからアリア先輩が余計小さく見える。

「これは？」

「右」

武偵高の視力検査では一番最初に分かった人が解答する仕組みになっている。右かな？　と思ったときにはライカに先を越されてた。

「次は」
「下」
「正解」

答える前にどんどんライカに越されていく。ひぇぇ……！もう全部丸に見えるよぉ。

「じゃあ、これは？」
「右斜め上」
「オッケー。佐々木さん、そっちにランドル環はないよ？　それとも誰かいた？」

「い、いえ」
「そう？　じゃあアリア」
「何よ」
「間宮ちゃんと佐々木さんの方の視力検査やってくれる？　俺は火野さんを個別でやるから」
「わかったわ」

アリア先輩に見てもらえる！　と嬉しい反面、ライカが陸先輩と一対一になるのはすごくもやもやして羨ましい限りだった。

通信会社の様な趣がある通信科棟（コネクト）では聴力検査が実施される。部屋の中にはスイッチだらけの通信機がいくつも置いてある。そこでヘッドホンを装着して雑音の中から小さく聞こえる足音を判別する、と言うのが検査の内容だ。正直、ザザッザザッ、という耳障りな雑音しか聞き取れない。なので私は少し耳からずらして

ショートのツインテールで隠しつつ聞いている振りをしているのであった。
志乃ちゃんは真面目だからちゃんと聞いてるっぽいけど……答えられてないって事は聞き取れないんだと思う。

――そんな中、

「足音。　5人？」

方眉を寄せつつ、またしてもライカが答えた。
それにアリア先輩が「聴音弁別　OK」と頷いている。正解らしい。

「待って、アリア。それ何人かたりないから　Aじゃなくて　B」

そこでなぜか私たちと一緒にヘッドホンを装着して聴力検査をしていた陸先輩が待ったをかけた。

「５人でパーフェクトのハズよ？」
「そうですよ、陸先輩。５人ッス」
「まあまあ、とりあえず聞いてみろって」

アリア先輩とライカは反論するけど、陸先輩に言われて２人ともヘッドホンをつけた。志乃ちゃんはあきらめたみたいで完全に外している。これ、うるさいもんね。

しばらくして、少し険しい顔をしたアリア先輩が「確かに ５人以上いるわね。私には７人までしか聞き取れないけれど」と悔しそうに呟いた。
それに陸先輩も「だろ ？」と返している。ライカもすごく悔しそう。一生懸命耳を澄まして聞いていたけれど結局最後まで分からなかったみたいだ。

「じゃあ、アリアは Ａだな。これ抜き打ちの２年の検査だから」

「えっ !?」

白衣のポケットから出した紙にサラサラ〜と何かを書いている陸先輩。本当に先生みたい。

続いて訪れた諜報科（レザド）では三半規管のテストが行われた。これは宇宙飛行士の訓練に使うような回転椅子に乗せられる。これが結構しんどい。縦横斜めにグルグルと回されて――

「うぷ……」

数分後には自分でも分かるぐらいに真っ青になっていた。志乃ちゃんも横で伸びている。うっぷ……。

「あかり。もう、『まいった』か？』

1人だけ回転椅子に乗り続けているライカは笑みを浮かべながら、アリア先輩に抱きつく私をニヤニヤと見ている。

「後　5分よ」

「頑張れ、火野さん」

「ラジャー♪」

ライカは余裕の表情で答える。

どうやら仲良し3人組の中でも……ライカは武偵として一歩ぬきんでている様子だ。

そんなこんなで、武偵高流の身体測定の終了後――

「次で最後よ」

そう言うアリア先輩につれてこられた場所は……強襲科。

その、マンションのような形の別館（モック）だった。ここは普段突入訓練とかで使われる建物だ。

「最後のは何ッスかー？」

何でもこいという感じで余裕げにライカが訪ねている。

「ふふ。武偵高名物、運動神経測定（マッスル・リベンジャー）。行事みたいなものよ」

「これはどこの学校でも同じ事やってるな」

ニヤリと意味ありげに笑うアリア先輩と少し心配そうな顔をした陸先輩ととも

に……

5人で普通の女の子の部屋にしか見えない別館の一室に足を踏み入れていく。

「女の子の部屋みたいな……訓練室（モックアップ）ですね」

「そ。ココでの検査は――引率させられた　2年のストレス解消も兼ねてるの」

「要は体のいい八つ当たり　？」

「うるさい」

志乃ちゃんの言葉に頷いたアリア先輩が後ろ手にドアの鍵を閉める。

そして陸先輩が私たちを挟み込むようにアリア先輩の対面に立った。

「――室内を想定した近接戦（CQC）。陸、あたしがやってもいいわよね？」

「どうぞ　？　俺はストレスたまってないから」

「そう。あんたたち、レポートもちゃんとつけるからね」

アリア先輩は実に楽しそうに2丁拳銃を太ももホルスターから抜く。
いきなり近接戦――それもアリア先輩と!?　しかも反対側には陸先輩!?
と、予想外の内容を聞かされて驚きを隠せない。

「普通は　1人ずつなんだけど。3対1でいいわよ」
「戦力差的にもそのぐらいが妥当だろうな」

不敵に漆黒のガバメントを構えながら笑うアリア先輩と、ズボンのポケットに手を突っ込んで完全に傍観者を決め込んでいる陸先輩。
一年と二年、Sランク武偵とAランク以下の武偵という圧倒的な差はあれど――
この対応は、闘争心の高い武偵高生としては少し、カチンとくる。
もちろんこれはアリア先輩たちが1年たちが心おきなくかかってこれるよう、あえて挑発したのだろうが――

「陸先輩。　2人できてもらっても構わないんですよ？　それでも数の方はあた

したちの方が有利ですし」

それにライカが挑発を仕返す。勝てるかどうかは別として気持ちは分かる。

「――火野さん。冷静に戦力を分析しようか。佐々木さん」

「っはい？」

「戦闘機相手に歩兵が勝てると思う？」

「……思いません」

「そういう事だよ」

「「……」」

それ以降陸先輩は壁に背を預け黙ってしまった。

こういう時の陸先輩はとても怖い。雰囲気が鋭くて、触ったら切れてしまいそう。

「アリア、20秒な」

「半分で充分よ、ナメてるの　？」
「ははっ、ごめんって」

でも、次の瞬間にはすごく優しそうな顔で笑っているから余計に陸先輩の事が分からなくなる。

「……甘く見てくれるぜ」

ライカが体操服からナイフを取り出す。それに合わせて私と志乃ちゃんも武器を構えた。

「――いくぜ　！」

アリア先輩を３人で囲む陣形からのライカの特攻で一気に攻める。

圧倒的有利な人数、陣形にもかかわらず私たちは無力化されてしまった。――――アリア先輩の宣言通りたったの10秒で。Sランク武偵として活躍しているアリア先輩の強さをア改めて感じた。これで陸先輩も加わっていたら――そんな事は考えたくもない。Sランク武偵の上級生には敵わない、と痛感し、呆然としていた私と志乃ちゃん。それとは逆に悔しそうにしていたライカには、

「アンタは、ちょっと素質あるわね」
「さっきのは的確な指示だったよ、火野さん」

と、Sランク武偵2人から羨ましい言葉をかけられていたのだった。

ひさしぶりの更新をしました、メルチェです！

今回もAAからでした！

時系列的にこっちの方が先なので……でも次は多分AAじゃないと思います。多分。……まあ次回のお楽しみと言うことで！

また次話でお会いしましょう！

10、天然タラシ発動

後半少し変えさせて頂きました！

では、第10話。どうぞっ。

その日も強襲科棟では制服姿の武偵高生達が徒手格闘訓練をしていた。犯罪者との戦闘任務を受ける強襲系武偵にとって格闘技とはスポーツではない。いざと言うときには命が関わる事になってくるのでありとあらゆる技を磨く必要がある。自衛隊や警察と同じように自己防衛や敵を制圧するのに必須な履修科目なのである。

実戦で、『待った』はできない。動きにくいとか、男女の差があるとかそんな事で相手が止まってくれるならそもそも武偵という存在自体必要ないのである。その

ため拳の骨の保護のためにつける指ぬきグローブ[O][F][G]以外は普段の制服のまま、男女や体格を問わず戦うのが普通である。

「――――行きます！」

と、そんなわけでランク差も関係なしに行う事もある。そういう場合は大抵戦徒妹契約を結んでる者同士だが。

俺が今稽古をつけているのは強襲科のＥランク武偵・間宮あかり。いつも以上に気合いを入れて構えている。

「はっ」

気合いを入れて縦拳を繰り出してくれるのはいいのだが。

手首を掴んで可動域外に動かしてから小手がえしで、コロンと転がす。

あかりの場合、動きが大きすぎて転がしやすいんだよなあ。

ちなみに名前よびは本人の希望だ。ライカも名前で呼んでいるが佐々木さんからはそう言った希望がないので特に変更はしていない。むしろ名字で呼んでも機嫌悪そうなんだよね。俺相当嫌われてるみたい。

「あかりはもっと動きを素早くしないと。アリアに転がされるよ？」

「はい！」

手をさしのべて立たせてやる。アリアよりも軽いな。身長が小さいから仕方ないけど。

「……あかりったら、タフさだけはAランクね」

アリアは呆れた様な感心したような声で……そんなつぶやきを漏らし、苦笑いを

している。そんなあかりの視線の先では

「また男女の勝ちか」
「やるなぁ」
「強ェ――――！」

と、ギャラリーに騒がれているライカがいた。自分よりも大きな男相手にアキレス腱固めを極め、ギブアップさせたところだった。おお、綺麗に極めたなぁ。

「ッチ　！　この男女め！」

衆人環視の中、女であるライカに負けた男は悔しそうな捨て台詞を吐くのだった。負け犬の遠吠えってヤツ？　みっともないマネはしないでほしい。それにしても『男女』ねぇ……。

――sideあかり――

強襲科での格闘訓練を終えた私とライカは一緒に廊下を歩く。

「チョロいヤツらばっかりだったな」

男子をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返していたライカは気分爽快といったムードだ。

「ライカが強いんだよ」

私もこんなに強くてカッコイイ子が友達で鼻が高い。だが喜んでばかりもいられないのだ。私も武偵として麒麟ちゃんの依頼に応えなければ。麒麟ちゃんからはライカとの中継役をお願いされている。ライカも本心では麒麟ちゃんの事嫌ってな

いみたいだし、もっと仲良く慣れればいいとおもってる。なにかきっかけがあればなぁ……。

ライカの事をチラ見しながらそんな事を考えていると――

「……火野ライカぁ？　あんな男女は最下位だ！」

通りがかった廊下から強襲科１年の男子達の声が聞こえてきた。
なにやらライカの話題らしいのでつい２人は聞き耳を立ててしまう。
すると、

「顔だけは美人だけどな、ありゃ男だぜ」
「かわいくねえんだ。背だって１７０近くあるだろ」

……どうも女子としてのライカについて評価しているようだ。しかもかなりの辛

口ムードで。

廊下と教室を隔てる窓からこっそり覗くと、男子達は同学年の女子のランク付けをしているらしい。可愛いとか可愛くないとかそんな基準で。男子達が広げているノートには女子の名前がズラリと書かれていて失礼なことに◎○△×の４段階で評価がされている。

タイトルは『可愛さランキング』。

見たところ、『間宮あかり（強襲科）』は『△～○？↑チビすぎ』。『佐々木志乃（探偵科）』は『◎』となっている。納得しちゃいけないところだがこの評価には納得せざるをえない。ものすごく余計なお世話だが。

「――――じゃあ、最下位は火野ライカで決まりな！」

他の学科の子も次々と勝手に品定めされていく中、男子のうちの１人が『火野ライカ（強襲科）』の文字の上に大きな×をつける。

可愛さランキング最下位。

確かにライカは美人だけどカワイイというよりはカッコイイ女子高生。お世辞にも男子から人気が出そうな可憐さは持ち合わせていない。教室の男子達も全くライカに女子としての魅力を感じていないらしく爆笑している。その声は廊下の私たちには全て筒抜けだった。

人の弱点ばっかり笑いものにするなんて武偵高の男子はデリカシーがなさすぎる！

こっちとしては殴り込みにいきたいところだが、どうせ私がいっても結果は見えている。ライカが行くなら役に立たないかもしれないけど加勢するぞ、と思ったのだが。

「――ずいぶん楽しそうだけど何してるの？」

「……え、陸先輩!?」

ライカの反応を見る前に校舎側の窓から陸先輩が入ってきた。え、ここ3階ですけど!?
あんなところからどうやって……じゃ、なかった。

「ライカ、陸先輩だよ！」
「え？」

小声でライカを呼ぶ。ライカは私のすぐ隣にしゃがみ込んで2人して中を覗き見る形となった。

「へぇ。女子の『可愛さランキング』か」
「桜田先輩……！」
「これは……！」
「で？　なんでライカのところに×がついてるの？」

「いや、だって男女ですし……」
「美人だけど可愛くねぇし……」

ライカの『×』を指しながら笑顔で聞く陸先輩にさっきまで騒いでいた男子達は目をそらしながらもにょもにょといいわけを始める。陸先輩、なんかちょっとキレてる……？

「１つ確認したいんだけど。その『男女』っていうライカのあだ名はどういう意味で使ってるわけ？」
「え……？　『男みたいで可愛くない女』って意味ですけど……」

思わず隣のライカを見てしまう。ライカは気にしていないみたいな顔をしているけど絶対に傷ついているハズだ。ましてや憧れている陸先輩の前でこんな事言われて。

「――そう言う事なら実力行使に出ても問題ないよね　？」

「「「「え　　？」」」」

「なんたってココは武偵高。一般校での殴り合いは銃撃戦と同じ。そうだな……でもさすがにハンデがないときついか。じゃあ俺は素手で戦うからそっちは武器アリでいいよ。５対１で」

前にも言ったかもしれないけど、武偵高の生徒は闘争心が強い。そしてココにいる５人は

全員強襲科の男子だ。闘争心の強さは他よりも抜きんでているだろう。ましてや１度負けている相手からの挑発。恐怖より先に怒りが来てもおかしくない。

「……　１回勝ったからってずいぶんナメてくれるじゃねえか」

「俺ら全員　ＡとＢだぞ？」

「俺は　Ｓランクの中でも上位保持者だよ？」

「っ、やちまおうぜ　！」

「そうだなっ」

男子達が一斉に武器を構えながら陸先輩の周りを取り囲む。普通多対一の場合は背後をとられないようにするのが常識だけど、囲まれていても陸先輩は余裕の表情を崩さない。立ち姿だけでも風格があって、陸先輩なら絶対負けないって思ってしまう。でもさすがに……

「……全員銃ってひどくない ?!」

隠れて覗いている事も忘れて叫んでしまう。

5人とも全員銃で攻撃している。確かに武偵高のケンカって銃撃戦になるけど！　陸先輩素手なんだよ？　ちょっと卑怯じゃない？

「実戦ならそう言う事もあるだろうしある意味妥当」

「なんで ?」

「陸先輩の実力を認めてるから銃（飛び道具）を使ってんだろ」
「そうだけど……」
「逆に陸先輩がそれぐらいのハンデで負けると思うか　？」
「……全然」

そうなんだよねえ。男子達が卑怯だとは思うけど陸先輩が負ける姿は想像できない。実際に、

「ほら」
「……うん」

5人が時間差で撃った弾は肩や膝あたりを狙っているが、それを陸先輩は華麗に避けている。手をポケットに入れたまま重心をずらすだけで避けている陸先輩の姿はまるでダンスでもしているかのよう。キレイ……。

そして、しばらくは避けているだけだった陸先輩は、

「うあっ」
「がはっ」

銃撃がやんだ一瞬の隙に前方に駆け抜け突き小手返しで１人を机にたたきつける。そのまま机に手をついて右隣にいた男子を空中で蹴り飛ばして気絶させる。

「なっ……」
「ぐ、はっ」
「ああっ……」

その勢いを利用して横向きに一回転してから逆側にいた男子の側に着地し、掌打をお見舞い。その場で足を思いっきり後ろに振り上げ真後ろの男子の膝に引っかけて崩す。完全に崩れ落ちる前に銃を足で払いあげ、最後の１人に向かって蹴りつける。爆発の危険を感じて手が止まった隙にバックフリップで頭上まで飛び上がり

後頭部に蹴りを炸裂させる。最後の１人は気絶して前方に倒れた。

強襲科のＢランク以上５人を相手にものの10秒で無力化してしまった。しかも実戦に近い方式の戦闘で。これはきっとライカでもできなかっただろう。陸先輩本当に格好いい……！　男版のアリア先輩みたいな強さだ。

「……これでよしっと。２人ともお待たせ」

「「え　！」」

陸先輩何か書いてる……。何かいてるんだろ？　と考えていたら教室のドアを開けて陸先輩がこちらに声をかけてきた。ライカ共々驚きの声を漏らしてしまう。

「気づいてたんッスか？」

「そりゃあ、あれだけガン見されればね」

ですよねえ……。

「あの、陸先輩」

「ん？」

「何であいつらと戦ってくれたんですか？」

ライカが真剣な表情で陸先輩を見つめる。それに対して陸先輩は、

「俺の大事な後輩を傷つけたからだよ。余計なお世話だった？」

とても優しい笑顔で答えた。本当にライカの事を大事な後輩だと思ってくれてる。そう、分かる笑顔だった。

「いえ……とても嬉しいッス。ありがとうございます！」

「良かった。本当は体育館で潰そうとも思ったんだけど……言質と物的証拠を押さえた方が良いかと思って」

陸先輩、とても良い顔で笑っていらっしゃる。あれ、悪巧みする人の笑顔なんじゃ……。

「でも陸先輩。最後男子達になに書いてたんですか？」

「ん？　あー、あれね。見て来なよ」

ふふ、と笑い声を漏らしながら教室内を指さす。『？』マークを大量生産しながらおそるおそる近づくと。

「「ぶふッ　!!」」

なんと、男子達の額に『肉』と書いてあったのだ！

思わず２人で吹き出してしまった。だって……『肉』！　『肉』だよ？

「あははは！　陸先輩、『肉』って！　イタズラが古いです！」

「そう？　定番でしょ。写メ撮って情報科に流しちゃえば？」

「それはちょっと……」

さすがに可哀想かなー、なんて。でも、ライカをバカにしたんだからこれくらい当然？

「いや、いいっス。陸先輩のおかげで随分すっきりしたので」

笑いすぎて目に溜まった涙を拭いながら断るライカ。

本当にすっきりした顔をしていて、さすがは陸先輩だなと思った。

「ライカはもっと自分に自信持って良いよ」
「え？」
教室からでてきたライカの頭に手を乗せながら陸先輩は笑いかける。
「あいつらだって言ってただろ？『美人』だって。思わず本音が出るほどライカが美少女ってことだ。背が高いのも、気が強いのも全部ライカのステータスだよ。たまには『自分にない物』を羨むんじゃなくて、『自分にある物』を自慢してもいいんじゃない？」
「陸、先輩……」
「自分を偽らないそのままのライカでいいと思う」
「！　えへへ……あたし、そんなこと言われたこと無くって」
ライカは陸先輩に頭を撫でられながら俯き、目元を拭う。
角度的にそれが見えてしまったけど……今度は笑いすぎて出た訳ではなさそう

だ。

『ライカお姉様……。麒麟がお姉様の「無いもの」になって見せますわ　！　間宮様、次の休日はお姉様を尾行しますの！　付き合ってくださいまし！』

インカムからは少し元気すぎる麒麟ちゃんの声が聞こえてきた。

ははは……さすがだね、麒麟ちゃん。

第10話です！

結局AAでしたね。なんかライカフラグが立っている気がしないでも……しません!!

次話も是非ご覧ください！

11、日常

お久しぶりです、メルチェです！

投稿が１ヶ月ぶりとなってしまいました……。まあいろいろあったわけですよ、はい。

キンジがでてこないなぁ。

とそんな11話です。どうぞっ。

――陸ｓｉｄｅ――

「もっと脇しめて。親指はそこに置かない方がいい」
「はい！」
「桜田！　こっちも見てくれ」
「分かった！」

タァン、タァン！

長い銃身から出る弾が少し反響音を残しながら飛来する。

ここは狙撃レーン。今日の俺は狙撃科での訓練を指導している。

狙撃科の生徒に指導しているのは良いが、壁際で口を閉ざしている南郷先生がさっきから視線を逸らしてくれない。まるで実験動物を観察するかのような目でこちらを見ている。

「……桜田。手本、みしてやれ」
「分かりました。銃借りますね」

いったん後ろに下がろうと思ったら、バッチリ目が合ってしまった。
指示され狙撃銃を借りるために奥の武器庫にはいる。適当に一番手前のを掴んだらＭ２１だった。

このＭ２１はベトナム戦争の時にアメリカがＭ１４を改良した物で、アメリカ陸軍の主力狙撃銃だったが、現在はさらに改良したＭ２４があるため結構マイナーな狙撃銃である。

「状況（シチュエーション）は？」
「……狙撃手単独抗戦の場合の敵の完全無力化」
「了解」

狙撃レーンに立ち、１００メートル前方の人型の的に狙いを定める。
狙うは――――
タァン、タァン、タァン、タァン、タァン、タァン。
両手、両膝、そして首の両脇。
「……上出来だ」
「ありがとうございます」
訓練所内が唖然とした雰囲気に包まれる中、俺は狙撃銃を降ろして南郷先生にお礼を言った。
確かにみんな狙いは良い。的には高ポイントが与えられる場所もあるし、そこを

狙えば9割は無力化出来るだろう。

だが――残りの1割は？

実戦において「予想外なので時間をください」なんて言えるわけがない。だから予想外の事――学校の訓練では無力化出来ない場合――でも対処できるようにしなければいけないんだ。

「今のが基本。そこからは体格や装備、敵の身体能力によって変わってくる。狙撃は主に後方支援だけど単独で敵にぶつかる可能性がない訳じゃない。そのときに応援がくるまで1人で持ちこたえる技量も必要なんだ。的に当てるだけが戦術じゃない」

南郷先生は黙って聞いてくれている。この人が訂正を入れないって事は俺が経験

から経た分析も間違っていないらしい。

「とりあえずは止まってる的相手に誤差　2ミリ以下で仕留めること。それが出来るようになったらバリエーションを増やしてどれが一番自分に向いた仕留め方かをもさくしてもいい。その次は動く的に向けての練習。最終的には強襲科と合同訓練でも良いかと思っているんですが」

「……いいだろう」

最後は先生に提案をする。許可も頂いたので後はみんなが出来るようになってから蘭豹先生に話を持って行こう。……どうせすぐにOK出すだろうが。

「大丈夫。俺を練習台だと思って撃ってれば　A以下の強襲科生は倒せるよ」

(((だろうな！)))

みんなの顔が青白くなっていくので励ましたら、さらに真っ青になった。
普段から俺の事狙ってるくせに何でだろうね？

「なんか向こうが騒がしいな……」

体育の授業が終わり教室に戻る途中、なにやら教務科の前に人だかりが出来ていた。

噂している人たちの話を聞くに、４対４（カルテット）戦の対戦表を見に来た１年がケンカをしているのだとか。何とも武偵高らしい。

教務科の前でケンカしているのはどんなヤツらかと興味本位に近づいてみた。

「こらーッ　！　教務科の前でなにやってんの！」

どうやら争っていたのはあかり達のグループらしい。相手方は高千穂麗。強襲科でＡランクのいかにも典型的なお嬢様みたいなタイプだ。

今はあかり達のグループが一方的にやられたところらしい。１人三半規管をやられてるな。やったのは陽菜か。

「あ、陸！　あんたそこで面白そうに観戦してないでこっちに来なさい！」

おっと。魔王様に見つかってしまった。潔く出て行くことにする。

「随分派手にやられたもんだな。これでとりあえずは満足した？　高千穂さん」

「失礼します」

ふん、と顔を背けて高千穂さんは去ってしまった。

傾向的に加虐趣味がある。なまじ実力がある分、ああいうのは早く叩いとかないと危ないかもな。

「島さん、大丈夫？」

「桜田様……フラフラしますわ……」

ちゃんと聞こえてるみたいだし、鼓膜まではやられていない。まあ陽菜が牽制でそこまでするとも思ってないけど。

「アリア、お前シャワールーム行くだろ？」
「ええ」
「じゃああかり達連れて行ってやれ」
「もちろん。そのつもりよ」

だろうな。戦姉（アミカ）は戦妹（アミカ）に優しくなる傾向があるし。意外と世話焼きな一面もあるからな、アリア。

「ライカ、立てるか？」
「大丈夫ッス」
「じゃあ、島さんシャワールームまで運んであげて。１人じゃ歩きにくいだろ

うし」

男の俺に触られるのもいやだろうしね。

島麒麟。ＣＶＲ所属の中等部（インターン）。ＣＶＲでは女性犯罪者専門の色仕掛け（ハニートラップ）を学んでいる。

ここから察するに男嫌いだろう。ただ俺に話しかけられて答えるって言うことは恐怖から来る物ではない。

「なるべく横抱きで。俵担ぎにすると余計に揺れるから」

「え、で、でも」

注意点を付け足すとライカの顔が赤くなってしまった。女のこ同士で何を照れてるんだ？

「桜田様、感謝しますわ……麒麟、とお呼びくださいまし、うっ……」

「お、おい……大丈夫かよ　？」

「　？　なんか良く分からないけど、はしゃぎすぎるなよ麒麟ちゃん」

今の状況で何故感謝された？　俺今なにかしたっけ。

頭の中で大量の疑問符を浮かべながらも、何故か少し嬉しそうな麒麟ちゃんに忠告をしておく。あんまりはしゃぐと回復が遅くなるから。

＊　＊　＊

「陸先輩、お待たせしました　！」

「ん」

俺は女子更衣室の壁に寄りかかって後輩達を待っていたところである。なんでも聞きたいことがあるだとかで。あ、勿論待ってるのは外だからね。

「麒麟ちゃんはもう大丈夫　？」

「はいですの　！　桜田様のおかげですわ！」

心配したら手を握られブンブンと上下に振られた。え、なにこれ、え。

絶賛困惑中の俺に麒麟ちゃんは、

「桜田様、メールアドレス交換しましょうですの　！」

「え　？　いや別に良いけど……」

何故か追い打ちをかけてくださった。
困惑しながら携帯を取り出し連絡先を交換する。今の若い子って分からない。

「「あ、あたしも　！」」

その不思議現象にあかりやライカも加わった。いや、ホントに交換するのに何の問題も……あるかも。

なんかさっきからアリアさんがこちらを睨んでいらっしゃる。俺は何もしてないはずだ。多分。

「それにしても、高千穂のヤツむかつくよなぁ……」
「私の、あかりちゃんを……　！」

「どうかした？　佐々木さん」
「ッ、いえ！」
「？」

思い出したように眉をしかめるライカの横で佐々木さんが何事かを呟く。慌ててるのが気になるけど本人が何でもないと言ってることだし、別に良いか。

「相手の挑発に易々と乗るからよ！　……陸、何か言いたそうね？」
「滅相もございません」

それをお前が言うか、と思ったが口に出すようなヘマはしない。言ったら確実に風穴である。

それに珍しく先輩面が出来るのだからやらせてあげるのが優しさって物だろう。

「アリア先輩、陸先輩。　4対4（カルテット）戦について何かアドバイスって貰えませんか？」

どうやら後輩組の用事は元々是だったらしい。確かに俺たちは2年生だし先輩に過去の傾向とかを聞くのが一番だろう。

4対4（カルテット）戦とは一年の時に行われる4対4で争う一種の試験だ。武偵ランクは勿論、単位にも影響するきわめて重要な行事なのだ。今回はその中の1つ『毒の一撃（ブワゾン）』だが、他にも『宝探し（トレジャー）』や『兎狩り（ラビットハンター）』など種目は様々だ。

「……対策教えてあげたいけど、あたしその競技やったこと無いから分からないのよねぇ。陸は？」

「俺も教えてあげたいのは山々なんだけど、俺試験官だからなぁ……」

「「「あぁ……」」」

申し訳なさそうな顔を浮かべて呟く。

本当に教えたいんだけどね。あかり達には勝って欲しいし。でも試験官が試験について助言出しちゃ駄目でしょ？

放課後に居残りとか『ＡＤＣＴ』って不便だ……。それに蘭豹先生とかに資料整理押しつけられるし。あの人重要書類とか全部捨てちゃうんだよね。

「土日はあたし忙しいし、手伝ってあげられなさそうだわ」

「じゃあ、理子に頼みなよ。麒麟ちゃんの前の 戦姉（アミカ）でしょ？」

「――そうですわ ！　理子お姉様がきっと稽古してくださりますの！」

先ほどポケットにしまっていた携帯を取り出します。

「そうと決まったら、特訓に使う合宿所を借りようですの　！」
「それは無理じゃないかな　？」
「え　？」
「武偵高近辺の施設が高千穂の名前で借り占められてる」
「借り占め……　!?　なんてお金持ちなの……」

ライカの報告に目を丸くして驚くあかり。

武偵と警察や自衛隊の違い。それは違法で無ければ許されると言う点だ。金を使って勝利してもなんら批判されない。武偵にとっては救出、制圧、勝利といった事のためなら何をしてもかまわないのだ。金持ちにはそれなりの戦い方がある。

だが特訓できないのは困るか。

「佐々木さんのお家はどう？　こういう言い方は悪いけど、武装弁護士の家系なら広いんじゃない？」

助言できない代わりに提案をしてみた。と言っても提供するのは人の家だ。そう簡単には、

「ええ、そうしましょう、そうしましょう！　桜田先輩ありがとうございます!!　私も連絡先を交換して頂いてよろしいでしょうか!?」

いったようだ。

そして佐々木さんの興奮具合がおかしい。何故俺は感謝されているのだろうか。

むしろ佐々木さん俺の事嫌いじゃなかったっけ？

目をキラキラ（ランラン？）と輝かせて携帯を突きだして来るので、少し引き気味に俺も携帯を出す。

何だろう、今日は。感謝＆アドレス交換デーだろうか。なにその行事。

「志乃ちゃんのお家なら完璧だよ　！」
「いやーほんと、持つべき物は友だな」
「佐々木様のお家楽しみですわ　！」

まあ何にせよ、家主の了解も取れたし。みんなも乗り気だからこれで良いとしよう。後は理子に任せる。

「……やりました！　お家にあかりちゃんを泊める大チャンス……！」

俺から背を背けた佐々木さんがそんな事を呟いてるとは露も知らず。

「あの子達、すっかり陸に懐いちゃったわね」

「そうか？　まあ、俺も1年ではあいつらと良く喋るな」

更衣室前であかり達と別れた俺とアリアは教室に向かって歩いていた。

今はちょうど昼休みだ。武偵高の昼休みは次の５限が専門科目で各自移動があるため少し長めに設定されている。よって、少しおしゃべりしながらゆっくりと歩いていても時間に余裕があるのだ。

「ねえ、陸。ちょっと聞いて良いかしら？」

「なに？」

アリアは眉を下げながら不思議そうな顔で質問してくる。

「……なんで、あんた生徒から狙われてるのよ」

「ああ、それ」

どこか困ったようにこちらに銃口を向けているのが複数。まあ後は敵意？　た

ぶんこっちはアリア親衛隊の皆様だろう。

「狙撃科の連中にこの前狙撃銃での完全無力化について演習したんだけど、そこで『動く的として俺を練習台にしていいよ？』って言ったから」

まだ一度も掠ってすらいないんだけどね、というと、アンタねぇ……と呆れられた。

だって他に動く的無いんだからしょうがないじゃん。戦場で停止してる敵の方が少ないんだし。武偵は常時戦場。

「ま、陸のスパルタは今に始まった事じゃないわね」

「酷い言われよう」

「そんな事より今日は何処に行くのよ？」

「今日？　まだ決めてない」

「はぁ？」

『そんな事』と俺に対する評価が一蹴されてしまった。アリアにスパルタとかいわれたくねぇ。

俺が5限に訪れる専門科目では事前に申請があるのだが、ほぼ高確率で3科目ぐらいが被る。よってその日の気分でいつも決めるのだ。

今日は4つか……。

「アリア、俺が裏返しにするから　1枚引いて？」

「ホント適当ねぇ……」

文句を言いながら渋々引いてくれる。人に決めて貰った方が公平かなと思って。自分で混ぜて引いても場所覚えてるから意味ないんだよね。

「んー、これ」
「……探偵科か」
アリアが引いた一枚は探偵科の申請用紙だった。高天原先生の字で今日の授業内容が書かれている。今日は尾行術の発展的演習だそうだ。
俺が授業で教えるのは演習を元にした実戦で使える技。基本的に講義などは担当の教諭が行うのが常である。……蘭豹先生や綴先生はそれすらもやらせてこようとするが。
なので実際に対戦形式で戦う強襲科は一番行く回数が多い。俺自身も強襲科なので他の教科よりは動きやすい。

「バカキンジに演習やらせなさい。なんかあいつヘタそうなんだもの」
「了解。じゃあ俺教務科によるから此処で」
「分かった。じゃあね」

教務科へ行って高天原先生に今日行く旨を伝えなくてはいけない。

アリアと途中で別れて教務科へと向かうのであった。

俺の1日は大抵こんな感じだ。

どうでしたでしょうか？

次回は更新が遅くなりすぎない程度に頑張って参りたいと思っております！

次話もお楽しみに～

12、カルテット

第12話です！

新学期始まると大変ですよね……。

「――それでは　4対4（カルテット）戦、『毒の一撃（ブワゾン）』を開始します」

4対4（カルテット）戦当日の正午過ぎ。本来なら5限目の専門科目が行われる時間帯に幕開けを迎えた。

11区の中央にある車道交差点の脇に間宮班と高千穂班の計8名が集まっている。

交通規制もなにもしてないため、車道には車が走っているし、歩道には通行人がいる。

「間宮班は『蜂』、高千穂班は『蜘蛛』の攻撃フラッグを、敵の『目』のフラッグに接触させれば勝利です。フラッグの隠匿や班員間での受け渡し、敵からの奪取、破壊、全てOK。折られたり破かれたりしたフラッグは無効となります」

そして、教官として監督するのは、救護科非常勤講師の小夜鳴徹。武偵高の先生にしては珍しくきっちりとスーツを着ている。俺は正式に教官なわけではないので、試験監督補助、小夜鳴先生の手伝いが主な仕事だ。尋問科に情報を渡す役割もある。

「エリア内の物は何を使っても良い。けど火器の使用弾薬は　非殺傷弾（ゴムスタン）のみ」

小夜鳴先生の説明を引き継ぎ、ポケットから黒いゴム弾頭の９ミリ弾をつまんであかり達に見せる。

先日の事があったからか、高千穂達に対するあかり達の警戒はマックスだ。説明を聞きながらもその顔は険しい。

「まあ、頭とかに当たると死んじゃうこともありますけどね。あはは」

軽く笑っているが事実である。町中で実弾をぶっ放すわけにはいかないので、非殺傷弾（ゴムスタン）だが、ヘタすれば死ぬのが武偵という仕事であり、それは学生武偵でも変わらない。

「お互い頑張ろう」

チームを代表して高千穂に差し出されたあかりの手は――パシッ。

高千穂の鉄扇（バトルファン）によって拒まれる。ためらいなくあかりの手を叩いた高千穂は冷たい目で見下ろし、

「――私と対等なつもり？　不愉快だわ」

そう、吐き捨てた。

完全に自分が上に立っていると思い込んでいる。何があってもあかり相手に負け（自分より格下）

る事はないと思っているんだろう。

それがどれだけ危険なことかも知らずに。

あかりの手は少し腫れてるし、双方一触即発の雰囲気を出している。本当はアイシングをしろ、と言いたいところだったがここで言えばどうなるかは一目瞭然。

「はいそこまで。手を負傷しても実戦では戦わなきゃいけない。痛くても我慢な？　間宮班は南端、高千穂班は北端へ移動開始」

「10分後に試合を始めます」

あかり達を突き放すような言い方をしてしまったが、エコ贔屓だと騒がれるのは面倒だ。おかげで佐々木さんには睨まれてしまったが、別にそれでもしょうがない。

俺が何かと言われる分には慣れてるから良いが、俺が関わったことで他人がその実力を第三者に正しく判断して貰えない場合がある。

何かアドバイスしたとか、手を貸したとか。

ありもしない噂であかり達の実力が疑われるのは俺としても好ましいことではない。

高千穂は一瞬俺に向けて複雑そうな視線を向けた後、余裕の笑みを浮かべて北端に移動していった。

あかりは闘志を燃やしながら南端へ移動。俺に向けて一つ大きく頷いてから行っ

た。

「先生、少し気になることがあるので彼女たちの後を追います」

「分かりました」

小夜鳴先生に報告をし、手近なビルの屋上に上る。

高千穂が陣取るのは北端の工場現場だろう。周りを足場が囲っており、出入り口は１つだけ。遮蔽物が少なく狙い撃ちには最適の場所。相手を痛めつけることで自分が優位に立っていると思いたがるヤツらが好きな立地だ。

俺が高千穂を気にしているのは何も私情じゃない。勿論ああいうタイプはあまり

好きではないが、仕事に感情を持ち込むほど落ちぶれてはいないのだ。

過去に出会ってきた高千穂みたいなヤツらは独裁者を気取っているか、失敗して蔑まれていたのが多かった。あの双子みたいなのは別として、高千穂の事を友好的な目で見ているのは少数だろう。

そうなると必然的に単独行動が多くなる。いろんな処から恨みを買う武偵としては単独行動など『フルボッコにしてください』といっているような物だ。アリアは典型的なボッチだが、あいつの場合は返り討ちで徹底的に潰すので問題ない。それでも俺がフォローに入る事がままあるくらいだから、高千穂がうまく捌けるとは思えない。

このままじゃいつか絶対任務で失敗して命を落とす。実力もあって頭もそんなに悪くなさそうなのになんでそれが分からないかな。

「――人の精神は、その人の育てし者に宿る――」

屋上の縁から聞こえたその内容は随分と哲学的で。それを言っている人物の容姿と持ち物は全くあっていなかった。

「……そのオペラグラス、眩しくない？　――理子」

「!?　りっくん！　こんな処で会うなんて理子、運命感じちゃうなぁ」

クルッと理子が振り返るのに会わせて蜂蜜色のツーサイドアップの髪が揺れる。シナモンの香りを漂わせながら近づいて来た理子は、俺の右手にしがみついてくる。腕が柔らかい物に当たっているのはこの際気にしない。

俺にくっついて何がしたいのかよく分からない。

だって、理子ってキンジ狙いだろ？　キンジにくっついてるのをよく見るし。

「キンジに勘違いされるよ？」

「ん？　なんでここでキーくん？」

「……分からないんだったらいいよ」

「？？？」

首を大きく傾げて本当に分かっていないようだ。

演技の可能性も無くは無くはないし、むしろ理子の場合は率先してやりそうだが、もしそうでも会話はこれで終わりにした方が良いだろう。下世話な事をしても仕方がないし。

「……理子って意外と鈍感なんだな」

「!?　りっくんには言われたくないセリフナンバー1だよ、それ!?」
「???」

今度は俺が首を傾げる番だった。

確かに人から指摘されて嬉しい物では無いだろうけど……なんで『俺には』って付くんだ？

「本当に分かってないし……。りっくんはここで何してたの？」

そっぽを向いた理子がボソッと何かを呟いた。そのため、最初の方は何を言っているのか分からなかった。でも、わざわざ話題を変えたって事は聞かれたくない事なんだろう。話を続けることにする。

「4対4（カルテット）戦の監督補助やってるんだけど少し気になる事があってね。とりあえ

ず上から確認してから行こうと思って。理子は？」
「あかりん達の特訓してたから成果を見ようかなー、って」
「なるほど」

そういえば俺が『理子に特訓頼めば？』って言ったんだった。ちゃんとやってくれたようで何よりだ。

「じゃあ、俺はそろそろ行くから」
「えー、もう行っちゃうの　？」

高千穂達の姿が見えなくなったところで理子から腕を引き抜く。視力がそれなりに良いのでこれぐらいの距離なら肉眼で見える。

今度は正面から抱きついて来た理子が下から俺を覗き込む。キンジはこんなことされたら顔真っ赤にするんだろうな。

「可愛い後輩の勇姿を見届けに行かないとね」
「じゃあ理子は可愛くなぁい　？」

潤んだ瞳で見上げられた俺は――

「可愛いと思うけど　？」

あっさりと答えて額にチュッと口づけた。

俺はモテないので女性との経験というのは少ないが、仕事上色仕掛け（ハニートラップ）には対応できるようにしている。日本じゃあまり使われない手段だけど、外国じゃ良く使われるからな。それにあからさまに経験の少なさを出してると嘗められて総攻撃されるし。

「うにゃっ ?!」
「じゃあね、理子」

色仕掛け（ハニー・トラップ）をする人は仕掛けなれているけど仕掛けられるのにはなれてない。

理子も例外に漏れずこの類だったので驚いてあっさり離してくれた。その隙を突いて屋上から隣のビルの屋上まで飛び移る。

振り返り、少し顔を赤くした理子に手を振って、また次のビルに飛び移った。目指すは高千穂班陣地と思われる工事現場だ。

「あそこまで出来るのに鈍感って……なんで」

すぐにその場を立ち去ってしまったので、理子がそんな事を呟いているとは知りもしなかった。

ビル群の上を飛び移りながら、北側の工事現場を目指す。

途中、背後から膝裏にローキックを決められているあかりを発見した。あれだけ怪しい要素満載で殺気だってる相手に気づかないとか……後で説教だな。探偵科か諜報科で自由履修とらせようか。

それにしてもなんだその「みぎゃっ　!?」っていう悲鳴の上げ方。

あかりはいろんな処に手を突っこまれ、フラッグを折られてしまった。俺の名誉の為に言っておくが、断じてその最中は見ていない。

あかりの代わりに佐々木さんが双子を倒し、その隙にあかりが佐々木さんのフラッグをを持って工事現場へ向かう。

連携がうまいのはもちろんだけど一番は佐々木さんの戦闘力向上かな。双子対策もばっちりだし。

佐々木さんの方は心配なさそうだ。むしろあかりの方が危ないよな。

双子が完全に制圧されたのを見届けて、あかりを追いかけることに。道路を使わ

ない分すぐに追いつくことが出来たので視界の端に入れながらゆっくり尾行してていく。

「――お前が来たのね。これも因縁かしら」

守り手を一手に引き受けている高千穂が、あかりの前に立ちふさがる。

「……私ね、アリア先輩と陸先輩に戦姉妹契約をお願いしたの」

高千穂の言葉に記憶を探る。

「でも戦姉妹契約試験で躓いちゃって。その後いくら契約金を提示してもダメだったわ」

ああ……あの時の。

――基本的に『ＡＤＣＴ』だからと言って戦姉妹契約を規制されることは無い。むしろ学生武偵の『ＡＤＣＴ』には推奨されている事だ。厳しい規定があるこの制度が適用されるのはＳランク上位武偵。その武偵が教えるのであれば次世代の『ＡＤＣＴ』候補にもなり得る。

戦姉妹契約試験は申し込まれたら上級生は断れない。よって俺の処にもじゃんじゃか話が来たわけだが……。金を積まれたのは初めてでは無かったのでそこまで意識してなかった。あかり達と言い争っているところを見ても思い出せなかったのはそのためだろう。

「でも、今は戦姉妹契約試験に失敗して良かったと思ってるわ。お前を戦妹に強襲科に来て指導しているところを見るに――錯乱されているとしか思えないもの」

負け惜しみを口にしながらもしっかりと要点を押さえて挑発している。性格に難があるだけで武偵としての能力は高い、と言う俺の見解は最初から変わらない。

対してあかりは良くも悪くもアリアに似すぎだ。直情的で挑発に乗りやすいところなんか特に。挑発だとは分かっていても俺やアリアの事を言われて頭に血が上っている。

「私の事はなんて言ってもいい……でも、陸先輩とアリア先輩の事を悪

く言うな！」

――――ドウゥッッッッッ！

怒りに身を任せ突っこんだあかりの胸部に近距離から弾丸が撃ち込まれた。その出発点は、高千穂が構えるスターム・ルガー・スーパーレッドホース。威力の派手さもさることながら、精度も悪くない巨大なリボルバー銃だ。そのグリップには普通着けないようなストックも装着されていて、高千穂の性格が伺える。

「――――かはっ」

もろに食らったあかりは苦痛に顔をゆがめ後ろによろける。ここで倒れないのはアリア直伝の『根性』か。

だが、一撃に持ちこたえたところであかりの重心が定まらないのは変わらないし、戦況が良くなったわけでもない。

「ほほほっ　！　取り巻きがいないと何も出来ないとでも思ったかしら!?」

這いつくばりながら物陰に移動するあかりと高笑いをしながら連射してくる高千穂。どちらが優勢かは言うまでも無いだろう。

何故かおいてあるベスパを隠れ蓑として選んだあかり。ポケットから取り出した汎用の解錠（バンプ）キーが、戦況を大きく変える。

「なるほどね。やるじゃんあかり」

あかりの意図を理解した俺は１人ほくそ笑む。確かに人じゃなければあそこまで行けるかもしれないな。

周りのものを活用して戦況を変える。これは武偵にとって必要な技能であり、それをひらめくかは才能でもある。

使えるものは全て使って勝利する。そのためには『金』という手段に出ても非難されないのが武偵だ。たまたま用意されていた物を使っても不公平では無い。

――ブォオオン！

けたたましい音を鳴らしながらベスパが進んだ先は、砂山の上に立てられた目のフラッグ。座席に座ったあかりは高千穂の方には目もくれず横を通ってさらに肉薄する。

そこまできてやっと意図を理解したのか、高千穂は銃口をあかりの方へ向け発砲した、その瞬間。

「あかりちゃんの邪魔はさせません　！」

高千穂の下のマンホールから出て来た佐々木さんが、刀の柄でグリップを跳ね上げる。その勢いで弾道はあかりの遙か頭上にそれた。

「佐々木志乃……　　！」

「貴方に良いことを教えてあげます。友達は／お金じゃ買えない　！」

悔しげに顔を歪めた高千穂の武器を佐々木さんがもぎ取った。もうこれで後は見ていることしか出来無くなった。

「いっけぇ――――ッ！」

あかりが渾身の叫び声を上げた数秒後。

パァンッ！

軽快な音がしてフラッグ同士がぶつかったあかり達４人の一撃（ブワゾン）が届いた瞬間だった。

AAのあかり視点を陸視点にしました！

前もやりましたけど、好きなんですよ。視点変えるの。他の人から見たらこの場面ってどう見えるのか、とか色々想像がふくらみますよね！

そろそろバスジャックが来ると思うのでもう少ししたらキンジが出て来ます！

やっとだね！

13、1歩ずらす事

第13話をお届けします！

「では、間宮班の勝利に、カンパーイ　！」
「おめでとう」
「おめでとー　！」

乾杯の音頭を取るアリアに続いて祝いの言葉を述べる俺と理子。もう1人はあかりの妹・ののかちゃんだ。

席順は俺を挟むように理子とアリアが座り、理子の隣にののかちゃん。対面に1年だ。場所を決めるのに女子の皆様は必死になっていたが、最終的にアリアがガバで脅し、理子が言いくるめてこの席になった。全くもって意味が分からん。

理子はさっきからやたらとひっついてくるし、それを剥がそうとアリアは大騒ぎだし。貸し切りにした方がよっかったかな、とか思ったりするほどの騒ぎだ。周りのお客さん済みませんねぇ。

注文したアイスティーを飲みながら1人、心の中で謝る。こいつらそろうとうるさいんだよ。

「しっかし良く高千穂に勝てたよなぁ。たまたまベスパが置いてあるなんてラッキーだったな、あかり」

「間宮様は強運の持ち主ですの　！」
「勝てたのはあかりちゃんが頑張ったからですよ　！」
「そんな事ないよ　！　みんながいなかったら勝てなかったもん」

みんなに一斉に褒められてあかりは照れまくっている。微笑ましくて良い光景だ。

「そういえば陸先輩。さっき高千穂さんと何話してたんですか　？」
「何か真っ青な顔で座り込んでいましたけど……」

あかりと佐々木さんが『先ほどの件』について聞いてくる。

あの場にはこの２人もいたけど、結構至近距離で話して居たため聞こえていな

かったのだろう。

高千穂はあの時、あかりが乗っているベスパでも手でも無く、頭を狙っていた。故意に『頭への被弾（ヘッドショット）』を引き起こそうとしていた。事前に非殺傷弾でも死の危険があると知っていながら。だから少しお灸を据えてやったんだ。そう、少しだけ。

「別に大したことは言ってないよ。3条を元に少し『お説教』を、ね」
「り、りりり、陸！　アンタ、まさかあれを!?」
「あ、アリア先輩……？　どうかしたんですか？」

武偵憲章3条。強くあれ、その前に正しくあれ。

『お説教』を強調していうと、隣でアリアが震えだした。っていうか『り』多くね？

１年生ズは頭にハテナを浮かべてるし。理子はなんか動画再生して……って……おい。

「理子、お前のその動画。何撮った？」
「お？　りこりんの秘蔵動画、りっくんも見たいのかにゃ？」
「いや、なに人のこと勝手に撮って秘蔵にしちゃってんの」
「りこりんの特技なのですよー！」
まさかの隠し撮りされてましたよ、はい。

高千穂にお説教したときのヤツね。アングルがバッチリ真横なのはどうしてでしょうね。

「りっくん、こんな怖い顔しちゃだめだぞー　？」
「怖いか　？」
「理子お姉様見せて欲しいですの　！」
「わ、私もみたいです　！」
「ちょ、アンタ達やめときなさい　！　死ぬわよ!?」

しなねぇよ。動画見て死んだら呪いのビデオじゃねぇか。

アリアが必死に真っ青な顔で止めるも、好奇心に負けた1年生は動画の公開を迫る。俺としては別に見られても良いけど、撮ってるのが理子ってあたりがちょっと……。

「後で加工して売りつけるつもりだったけどー、後輩にも優しいりこりんは見せてあげるぞよー？」

そういった理子は画面を１年生ズに向けて再生する。残念だが言葉全てが理子に対する不信感を全力で肯定してしまっている。

アリアは顔を覆った指の隙間からチラリ、と見ていた。お前は怖い物見たさにホラー映画を借りるびびりか。

「見ても面白く無いと思うけど」

「まあまあ。物は試しってーことで　！　ポチッとな」

理子がタブレットで撮った動画を見た結果。

「うぇぇぇぇん‼」

「こ、ここここ、こわ……　　！」

「恐ろしいですわ……　　！」

「い、今まで済みませんでした……志乃とお呼びください……！」

「だから見るのはよせって言ったじゃない‼」

「にゃはっ！」

上からあかり、ライカ、麒麟ちゃん、志乃、アリア、理子だ。

もはや大災害に匹敵するほどの騒音。店員さんには本当に申し訳ない。

「あの……お客様」
「ああ、すみません。うるさいですよね」

注意のためだろう。近寄ってきた店員さんに謝罪をしたところ。

バタン。

……店員さんが倒れてしまった。

それを仲間らしき人たちが急いで引きずっていく。きっとぶっ倒れるほどの騒音なのだ、こいつらの会話が。

「お前ら少し静かにしろよ　？　うるさすぎて店員さん倒れちゃったじゃん」

チューッとストローからアイスティーを口に含み注意を促す。少しは公共の場所でのマナーを学習して貰わないと付き添いの俺が恥ずかしい。

「「「「　（いや、あんたのせいだろ）」」」」

何故か不服そうな顔の5人。悪いのはお前らだぞ？

「あれっ、ののか何処行くの？」

「あ……ちょっとお手洗いだよ」

あかりの質問に答えながらののかちゃんは席を立つ。

それを見送りながら俺は彼女を注意深く観察していた。彼女、何かが引っかかる

んだよね……。

祝勝会から数日後の昼休み。俺は強襲科の射撃レーンに来ていた。理由は簡単。

「じゃあ、何発か撃ってみて。普通に」

「え……はい」

後輩（あかり）の射撃訓練をしてやってくれとアリアに頼まれたからだ。

あまりにも命中率が悪いと言うことでアリアが矯正を命令したところ拒否されたんだとか。普段アリアには絶対服従のあかりが反抗するなんて珍しい事もあるもんだ。

アリアも相当ショックを受けたと見えて意気消沈してたし。

バララッ、バララッ！

あかりは正しい姿勢を心がけているようだが、実際にそれでうまく撃てるかと言われれば答えはNOだ。マイクロUZIは唯でさえ反動が大き、巨漢かよほど銃の扱いに慣れている者でなければ着弾点がぶれてまともに当たらない。そもそもこの

銃は前提として精密射撃用では無く、牽制や至近距離からの攻撃で使われることが多い。どちらにせよ、アリアより身長が低いあかりに向いている銃とはお世辞にも言えない。

「……マジか」

「……マジです、すみません……」

よってあかりの命中率が良い訳もなく、人型ターゲットには数えられるほどの弾痕しか無かった。それでももしかしたら何発か重なってるかもしれないし、とスコアペーパーを見た結果。現実を突きつけられた。

アリアより命中率の悪さは聞いていたので10メートルレンジと5メートルも短くして見たのだが……。結果は何度見ても同じ　11／１００、つまり１００発撃って有効着弾数が11発。前回は6発だったらしい。今回のスコアは2倍近くに増えたが安易に喜べるわけない。距離が短いのだ、それなりに当たるだろう。というか10メートルでこれだけしか当たらなかった、というべきか。

これは予想以上だ。額に手を当て考え込む俺にあかりは申し訳なさそうな顔でシュン……としながら銃を置いた。

「あー、別に責めてるわけじゃないからな？」

「本当にすみません……」

弁明はするものの、あかりの態度は相変わらずネガティヴである。

このままでは埒があかない。

「先に言っておくけど別にやましい気持ちは無いから」

「　？」

「ちょっとごめんね」

「!?　陸先輩!?　な、なにをっ」

あかりの右腕を軽く数回撫でる。端から見たら確実に変質者だろう。やべぇ。

まあ宣言通りやましい気持ちは一切無く、これは単に確認行動だ。

「うん、こう、かな？」

ババババッ、ババババッ。

脇を開けて腕を伸ばし、余計な力は抜く。銃の反動で手がぶれるのまでを意識して発砲。

隣からは驚愕の声が聞こえてきた。

「それは……　　！　何で陸先輩がその技を使えるんですか!?」

「間宮は公儀隠密の家系。請け負う任務の大半が――暗殺。もちろんあかりはそれがイヤだから無理にでも矯正してたんだろうけど……。これ、『　　9条破り』の技だよね？」

俺がやったのは多少違いがあるが、あかりの家系、間宮一族の『殺人技』。

相手の急所を確実に打ち抜き、声を上げる暇さえ与えずに絶命させる。その証拠に放った10発の銃弾はそれぞれ額、右目、左目、ノド、心臓に各2発ずつ命中している。どこか1つでも致命傷になる箇所だ。

「――陸先輩は、私が隠してたこともすぐに暴いちゃうんですね」

「……」

「こんなの、武偵の技じゃない！」

涙をためた瞳でキッ、とこちらを睨むあかり。いつも底抜けに明るく笑っている後輩の姿はなく、ただ、悲しみとやるせなさに溢れた瞳で『助けて』と懇願する少女がいた。

あかりの性格で暗殺なんて出来るわけがない。でもその体には人を殺めることが出来る技が染みついている。

「今のは忘れてください」

「あかり」

ペコリ、とお辞儀して去ろうとするあかりの腕を掴む。この後輩が逃げ出してしまうことは予測できていた。人の為ならどんな危険なことにでも突っこむくせに、自分の事となると途端に臆病になる。

これが赤の他人の話であれば、俺は絶対に引き留めなかった。だってそれは、俺と関わりの無い人が関わりの無いところで抱えている問題だから。

「なんですか。離してください」
「――武偵ってさ」
実力があっても、全人類を救うことなんか出来ない。
「『殺すこと』と逆の性質を持つ職業じゃないと思うんだ」
「……　　？　だって、武偵は」
ましてや、気持ちだけでどうにかなる仕事じゃない。

「結果的には助けてる。助けようと思ってみんな戦っている。でも」

依頼人と仲間。命の危険が及んだとき、最優先で助けるのは依頼人の命。

「助けるためにはさ、『殺す知識』がないといけないんだよ」

誰かを助けるとき、他の場所で誰かが助けを求めているかもしれない。
そういうとき、人間は無力だから。いくら力が有っても神様でも無い限り自分の近くの人しか助けられない。

「何処をどうしたら人は死んでしまうのか。人を死に至らしめる環境は何か。どういう精神状態が人を死に追いやるのか。――どうしたらその人を殺せるのか」

「……　　!!」

誰かを助けるには代償が必要で。

それは、遠くの誰かだったり、自分の感情だったり。

「『殺し方』を知っているから、殺せる武器を持っているから」

それでも助けたいと願うから。

「――そこから　1歩ずれた行動を取ることで人を助けることが出来る。その『1歩』をずらすことが出来る人が武偵なんだよ」

「……　　1歩」

目の前の人を、仲間を助けたい。そのために行動を起こすのが武偵。

「これは俺の考え方だし、戦闘系の学科意外にはほとんど当てはまらない事だけど。あかりの持っているその技はただの枷じゃない。武偵として胸を張れるようにするための第一歩だよ」

「……　！」

「あかりは急所に命中させられる。急所って言うのはそこに当たるから大ダメージになるんだ。1歩でも外れれば、動きを制限できる最大の攻撃になる」

「私の技が……最大の攻撃……」

うわごとの様に俺の言葉を繰り返すあかり。その頭に手を乗せ、視線を合わせる。

「今はうまく出来ないかもしれない。体に染みついた技を変えるのは凄く大変

だ。でも、武偵でいたいと、誰かを救える存在になりたいとそう願うのなら――

諦めるな」

「10条……」

武偵法10条。

諦めるな、武偵は決して諦めるな。

「努力すれば何でも出来るなんて、そんなきれい事は言わないけど」

台に置かれたあかりの銃を取り、その小さな手に握らせる。

「努力しなきゃ何も出来ないし、なにも変わらない」

あかりの瞳には光が戻っていた。いつも前向きで、なににたいしても一生懸命な後輩の姿が。

頭の上から手をどけてかがんでた姿勢を元に戻した。

「あかりがその気なら俺も手伝うし。お前の周りにいる人、全員協力してくれると思うよ？」

「……こんなこと、初めて言われました。陸先輩はやっぱり、すごい人ですね!!」

さっきとは違い、目に涙を浮かべながら微笑む。その手に握っている銃が何ともミスマッチではあるが……可愛い後輩のイイ笑顔だ。

「アリアはどうする？　昨日随分と悩んでたけど」
「……自分で伝えます。もう少し、勇気が溜まったら」
「そう」

目元の涙を拭って俺と視線を合わせるあかりからはなみなみならぬ覚悟が伝わってきた。

俺の方から話しても良かったけど……余計なお世話だったな。

「本当にありがとうございました！　私、頑張ります!!」
「うん。じゃあ一番最初のアドバイス」
「はい！」

射撃場のドアを開けながら一言。

「安物だからって、大量生産の銃を使うんじゃなくて、自分にあった銃を探す努力もしないとね？」
「……はい」

腕の良さを生かすには、良い武器を使わないとね。

本来ならあかりがアリアを突っぱねるシーンですが、オリジナル展開にしてみました！

な・の・で

アリア先輩はほとんど出てこないですww

最近あかりばっかりやん、キンジでてこないやんと思ったそこの貴方!!

大丈夫、出しますよ！　次話で!!

ということで、次もお楽しみに　!!

メルチェでした。

14、イヤな予感はよく当たる

どうもメルチェです！

更新をサボ……げふんげふん、止めている間に10月になってしまいましたね！

では第14話どうぞっ。

その日は、朝から煙たい雨の降る日だった。

「キンジ、いつも遅刻寸前なんだから早めに出るぞ」
「50分って……早くね　？」
「そういう考えだから遅刻するんだ」
「してねえよ」

人間何でも早めの行動が基本です。

いつもなんだかんだアリアと揉めたりしてバスに乗り遅れそうになるからな。

だが今日は遅刻の原因となりそうなアリアも別登校だ。さっきあかりから写真付

きで送られてきた。サイドカーに乗せて貰うんだと。

だらだらとしているキンジのケツを押してバス停に向かう。

「あれ……　？」

いつもより結構早めに出たはずなのに、何故かそこには7時58分のバスが到着していた。

1時間目が始まる前に着くのはこのバスが最後。一般校区にはギリギリ間に合うぐらいの時間に到着することもあって、すでに学生による詰め込み大会が行われている。

「やった！　乗れた！　やったやった！　おうキンジに陸おはよう！」

キンジ共々慌てて駆け寄ると、入り口のタラップで剛気がバンザイしている。

ただでさえ満員になる事もあるこのバス。それが今日は雨だということもあり、自転車で通っているヤツも乗ってきている。奥の方まで満杯で、とてもじゃないが人が乗れるとは思えない。

「のっ！　乗せてくれ武藤！」

「頼むよ剛気！　お前だけが頼りなんだ！」

「そう言われてもなあ……。陸だけでも全力疾走すれば間に合うかもしれねえぞ？」

キンジが手つきで中へ行け、と指示をするが、剛気はむしろ押し出されそうになるのを必死に堪えているようだ。

全力疾走って……雨の時にやっても濡れるだけじゃねえか　　！

「武藤頼むッ　！」

「ムリなモンはムリだ　！　お前ら、男は思い切りが大事だぜ？　雨の中全力疾走してこい！

水も滴るいい男ってな!!」

水も滴るいい男じゃねえよ！

ただのずぶ濡れで可哀想なヤツじゃねえか。

無情にもバスのドアは俺たちを残して閉まった。中にいる剛気に恨みがましい視線を送ってやる。

強襲科式の感謝でフルボッコにしてやろうか。

「仕方ない。濡れはするがチャリでいくか」

「そうだな、遅刻するよりは……って、は　!?　お前チャリあったっけ？」

「最近拾った」

そう、ついこの間不法投棄されてたチャリを見つけ修理したのだ。そしたら結構

普通に乗れた。装備科で必要な部品を仕入れてきたし。なんか文ちゃんにぼったくられた気もするけど……。

「拾ったって……それ大丈夫なやつなんだろうな　　？」
「俺がそんな初歩的なミスをするとでも？」
「……しないな」

今のご時世、防犯登録などが厳しく行われている。不法投棄されていたと言うことは、もちろん持ち主が捨てた可能性もあるが、盗難品が用済みになったから捨てた、という可能性もあるのだ。そして後者の場合だと盗難届けが出されており、俺が犯人みたくなってしまう。

よって俺は証明書などが無くても新しく防犯登録をしてくれるお店に行き、登録

を済ませてあるのだ。

まあ、警察に協力する立場の武偵が警察に補導されることは無いだろうけど。されたらよほどのバカだ。

「自転車だとギリギリか……。キンジ早く乗れ　　！　じゃないと置いていくぞ？」

「お、おう」

「じゃあ、飛ばすからな。しっかり捕まっておけよ？」

「お前どんだけスピード出すつもり――――うわあああああああ!?」

自転車の後ろにキンジが乗ったのを見て、ペダルに足をかける。

それじゃいっちょ行きますか。

1限目には間に合うようにこいでやるから、振り落とされないようにがんばれよ？

キンジの悲鳴を聞きながら、一般校区までの道を剛気の言うとおり全力疾走してやった。

「はっ……はあ……死ぬかと思った……」
「大袈裟すぎだろ」
「いやマジで。絶対　60キロぐらいは出てただろ」
「体感で 57キロな」
「早すぎるわ ！」

時刻は8時10分。あと5分後には授業が始まるのでギリギリだが……
まあ少し遅れて入っても問題ない。

それにしても乗せてやったのに文句の多いヤツだ。振り落とされなかっただけ有り難いと思えよ？

「おかげで間に合っただろうが。それともさっきのカーブで崖下に落とした方が良かったか？」
「いえそんな滅相もございません」

廊下でそんな会話をしながらタオルで濡れた制服をふく。

雨の中自転車を飛ばして来ればそうもなるわな。

ほとんどの生徒は授業開始の数分前と言うこともあり、いつもなら教室にいる時間だ。が、今日は何故かほとんどの生徒が廊下にいる。そして何か喋りながら悲鳴を上げている。主に女子が。

……なんだ　　？　Ｇでもいたのか？

俺は多くの人が嫌うであろう黒い虫がいるのかと思ったけど、中には俺たちを指している人たちもいる。

しばらくその理由を考えて、やがて１つの答えに思い至った。

……ああ。俺たちが濡れ鼠だから哀れみの目を向けられてるのか。それはどうもお見苦しいところをお見せしました。

廊下に溜まっている女子達に目礼して自分の教室に向かう。

「（こいつの無自覚やめてくんねえかな……　　）」

もちろん、キンジがこんな事を考えているなんて俺には分からなかった。

「あの……桜田くん、おはよ　　〃」

「ん？　おはよう」

クラスの女子に声をかけられたので挨拶を返す。と言ってもそこまで仲がいいわけでも無いのだが。

「相変わらずモテるなぁ！　このリア充め！」
「今日も絡んでくるな、吉野」
椅子に腰掛けたところでいつの様に声をかけてくる吉野。
当然の様に肩を回してくるほどの馴れ馴れしいヤツだが、嫌いなわけではない。
「それはいつもの事だろ～　？」
「まあな」
適当に吉野の相手をしながら濡れたブレザーを背もたれに掛ける。意外と重い。

「お前今日歩き　？」
「いやチャリだけど」
「この雨の中チャリとかマジか　!?　バス連中より早ぇじゃん！」

そう言えば、バスは俺たちの前で出発したはず。俺たちもそこからほぼ同じ時刻にバス停を出発している。

いくらこぐのが早くても此処まで差があるとは思えない。雨だから速度を落としているッてこともあるだろう。だが――

……イヤな予感がする。

「なぁ吉野。剛気ってもう来た？」
「武藤？　いやまだだけど」
やっぱり。
「OK。今からキンジを連れて少し出る」
「は？　今から？」
「そう。だから先生には『後で話します』って言っておいて」
「お、おう」

さっき掛けたばかりのブレザーを着直して席を立つ。雨で濡れたワイシャツが体に張り付くが、今はそんな事もいっていられない。

「キンジ、ちょっと来い」
「は？　なん、」
「いいから。早く」
「は、ハイ」

キンジの腕を掴んで半ば強制的に連れて行く。

俺が考えている通りならば。

――俺たちが乗り損ねたバスは事件に巻き込まれている。

『陸、今どこ！』

キンジを強襲科の体育館でＣ装備――ＳＡＴやＷＡＴに似た、武偵が『出入り』の際に着込む特殊装備――に着替えさせていると、焦った様子のアリアから電話が掛かってきた。

「強襲科の体育館だ。もうすぐキンジの着替えが終わる」
『！　さすがね。事件があったわ！　とりあえず第三女子寮の屋上に来て！』
「了解」

やっぱり事件か……。

このタイミングって事はアリアがここ最近電波を追っていた『武偵殺し』のものだろう。頻繁に通信科に出入りしていたからな。

「陸、終わったぞ。しかしなんで　C装備なんか……」
「今アリアから連絡があった。事件が起きたそうだ。その装備で出張る意味、しっ

かり考えろよ」

「……　！　そんな、大きい事件なのかよ」

自分の装備をキンジは苦々しく見回す。

まあ『C装備で挑む事件』に小さいのは無いからな。

事件に消極的なのが武偵として良いか悪いかは別として。関わると決めたからには油断しないで欲しいんだがな。

「アリア」
「陸　！」

向かった屋上にいたアリアもC装備に身を包み、額にしわを寄せている。それだけ事態が深刻になっていると言うことだろう。

「陸はその制服で良いのか　？」
「ああ。　C装備はあんまり好きじゃなくてな。この服少し改良してるから丈夫だし」

武器の位置や弾の数など、装備を確認しながら答える。

俺が着ているのはキンジたちの様なC装備では無く普通の制服だ。ただ、服の防御力自体を大幅にあげてある。

「レキ」

無線機に向かって話すアリアの傍らで、キンジは階段のひさしの下に座っている美少女に話しかけていた。

黄色い大きなヘッドフォンをしていて、何かの音楽を聴いているようだ。キンジの声に気づかず、虚空を眺めている。

無表情ながらも精巧な作りで整った顔のこの少女の事は俺も知っていた。
狙撃科Ｓランクのレキ。愛銃のドラグノフをいつも背負い、基本無表情。天才少女と名高い人物だが、近寄りがたい雰囲気の所為か友人関係は広くない。

「お前もアリアに呼ばれたのか」
「はい」
頭を突かれて視線をあげたレキは、随分と抑揚の無い声で答えた。
それからこちらに視線を移す。

「初めましてレキ。俺は桜田陸」

「レキです」

その視線の意味は何となく理解できたので自己紹介をしておく。と言っても会うのが初めてなだけであって、名前と顔はお互い知っているのだが。

「何か音楽でも聴いてるの　？」
「いえ」
「じゃあいつも何聞いてんだ、お前」
「風の音です」

風？

いまいちよく分からない。音楽の代わりに風のサウンドでもきいてるのか？
『自然の音』みたいなやつ。確かそんなのがあった気がする。

「あと　2、3分ってところね」

通信を切ったアリアが、濡れたツインテールをひらめかせてこちらへ来る。

「アリア、状況説明（ブリーフィング）」
「バスジャックよ。この　4人パーティーで追跡するわ」
「――――バス　？」
「武偵高の通学バス。　7時58分に男子寮前に停留したヤツだな？」
「そうよ」

外れて欲しいと願っていたが……当たっちまったか。

キンジが驚いた顔で目を見開いている。

「悪いな、キンジ。ただの予想だったから確信が持ててから言おうと思って」

「いや、別に、いいけど」

そう言う割には随分と不満げな顔をしている。

「犯人の目処は立ってるのか」

「ええ。バスには爆弾が仕掛けられているわ」

――爆弾――

そう言えばキンジと初めて会った日。チャリに爆弾を仕掛けられたと言っていた。

武偵、爆弾それに乗っ取り（ジャック）。ここから導かれる犯人は――

「これは『武偵殺し』の仕業よ。キンジ、アンタの自転車をやった犯人」

『武偵殺し』

捕まったとされている凶悪犯。爆弾魔。

「――車内に犯人は？」

「分からないけどヤツは爆弾を遠隔操作するわ。高確率で車内にはいないと思う」

あのバスは定員オーバーのすし詰め状態で走行している。車内にいないと言うことはあそこで戦わなくても済む、ということだ。その点だけが唯一の救いだな。

「最初の武偵はバイクを乗っ取られたわ。次がカージャック。その次がキンジの自転車で、今回がバス……ヤツは毎回、乗り物に『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でもその操作に使う電波にはパターンがあってね。アンタを助けたときも、今回も、その電波をキャッチしたのよ」

「でも、『武偵殺し』は逮捕されたハズだぞ」

「それは真犯人じゃないわ」
「なんだって？　ちょっと待て。お前はなんの話をしてるんだ――」

困惑した表情のキンジが待ったをかける。今回も、前回と同じように模倣犯の仕業だと思っているんだろう。

だが、模倣犯にしてはおかしな点がいくつかある。でもそれを1から説明している余裕は無い。

「アリア、それは確証があっての話だな？」
「ええ。時間がないから背景を説明する気はないけど、これは確かな事よ」
「キンジ、ひとまず信じよう。アリアは嘘を吐いてない」
「……分かった」

「そろそろヘリが来ることになってるわ。それに乗るわよ」

アリアの言葉通り、上空から雨の音に混じって激しい音が聞こえてくる。

さっきの無線ではヘリを呼んでいたらしい。

「武偵憲章　1条！　『仲間を信じ仲間を助けよ』！　被害者である武偵高の仲間を救助するのが今回のミッションよ！」

ヘリの音に負けじとアリアが声を張り上げる。一番手っ取り早い救助方法は爆弾を切り離す事だな。

「初っぱなからこんな大事件なんて、俺はとことんついてないな」

「２年の最初ですでに出会ってるだろ」
「イヤなこと思い出させるなよ……」
「陸ぐらい、とはいかなくても、アンタの実力には期待してるからね」
「せんでいい。こんな難事件にブランクが長い、それもＥランクの武偵を連れてっていいのか」
「もしピンチになったら、そのときはあたしが守ってあげるわ」
「それは頼もしいな。じゃあアリアの事は戦兄の俺が守ってやるよ」

そんな話をしながら４人でヘリに乗り込んだ。

如何でしたでしょうか。

やっと1巻の半ばくらいまで進みました！

この後の展開を色々練り練りしてます。頑張って更新しますので！

15、事件発生

お久しぶりです、メルチェです！

試験近いのに勉強に飽きて載せてしまいました……あはっ。

――ｓｉｄｅキンジ

インカムに入ってくる通信科の話によると武偵高のバスはいすゞ・エルガミオ。

武藤らを乗せた男子寮からはどこの停留所にも停まらず、暴走を始めたという。その後車内にいた生徒達からバスジャックされたという緊急連絡が入った。

60人という定員オーバーな人数を乗せたバスは現在台場に入ったらしい。

「警視庁と東京武偵局は動いてないのか」

ヘリの轟音で互いの声が聴こえないため、インカムを通じて会話をする。

『動いてるだろ。でもバスジャックともなるとすぐには急行できないんじゃないか？』

「じゃあ俺達が一番乗りか」

『陸の言うとおりよ。相当な準備が必要なはず。それにヤツの電波を掴んで、通報より先に準備を始めたんだもの。そのぐらい当然だわ』

相変わらず偉そうにフン、と鼻を鳴らしたアリアは愛用の二丁拳銃のチェックを行っている。

その横では、まるで母親のように優しく目を細めた陸がアリアを見ていた。……戦兄妹として組んでいた影響だろうか。陸は時々アリアにこういう視線を向ける。この後は大概……

「アリア、１人で突っ走るなよ？　パーティーとは１人の行動をその他が支えるんじゃない。≫全員で≪同じ任務に挑むものだ」
「知ってるわよ？」
「……ならいい。単独任務じゃないんだ。連携はかかさずにいこうな」
「も～～う！　なによ!?」
「いつものおまなじない」

「お、おまじないなら仕方ないわね　！」

……最後に恋人的展開が来るんだよな。主に陸の所為で。

衝動的にインカムの電源を落とそうとした右手をなんとか手前で止める。よくやったぞキンジ。

そういうのは俺のいないところでやってくれないかなと心中で思いつつ（口に出すと飯が消えるので）、隣に座るレキをちらりと横目に見る。

こいつもこういうのには縁がない人種のハズだ。きっと俺と共感できるものがあるに違いない、って！　いつもどおりの無表情でカロリーメイト食ってるし！

そうだ……レキは縁がないとかじゃなくて別に関心が無いからどうでもいいってタイプだった。この２人のやり取りを前にして２対１っていうのは俺のヒス的にかなりやばい気がするんだが。

『見えました』

それから少ししてやっと危ない展開が終わった頃。

窓の外を見ていたレキがインカム越しに端的な報告をしてきた。

俺達は揃ってヘリの防弾窓に顔を寄せる。右側の窓からは台場の町並みやりんかい線が見える。しかし道路を走っているだろう車を識別できるほどの距離ではなかった。

「何も見えないぞレキ」
『ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えています』
『ホテル日航……ああ、本当だ。剛気のツンツン頭が入り口の窓から見える』
「!?　陸、お前も見えてるのか!?」
『あんたたち、よく分かるわね。視力いくつよ』
『『左右ともに6・0だ(です)』』

サラッと超人的な数字を言った2人に俺とアリアは思わず顔を見合わせてしまう。陸、お前はもう人間じゃねえな。

ヘリの操縦士が陸とレキの言った辺りへ降下していくと、本当にそこに武偵高のバスが走っていた。速い。かなりの速度を出しているぞ。

他の車を追い越しながら、テレビ局の前を爆走している。局の中から人々がこち

らを撮影しているのが見える。

『空中からバスの屋上に移るわよ。あたしはバスの外側をチェックする。キンジと陸は車内で状況を確認、連絡して。レキはヘリでバスを追跡しながら待機』

『いや、「武偵殺し」ならキンジのチャリジャックのときのように外側からの攻撃があるはずだ。俺はそのまま屋上で待機する』

『それもそうね。じゃあ陸は屋上で待機、そこからの細かい指揮は任せるわ』

『はいはい』

テキパキと2人で指示を出し合い強襲用のパラシュートを天井から外し始める。

こういうとき、アリアと陸は一緒に任務をこなしてきたんだなと思う。相手への掛け合いも、指示の的確さも、ともに過ごしてきた時間があるからこそできること

だろう。

「内側……って。もし中に犯人がいたら人質が危ないぞ」

『「武偵殺し」なら、車内には入らないわ』

「そもそも『武偵殺し』じゃないかもしれないだろ！」

『違ったらなんとかしなさいよ。陸もいるんだしあんたならどうにかできるはずだわ』

「お前なあ……――」

『落ち着けキンジ。アリア、お前は周りの人間が全員自分と同等だと思うな。環境だったり精神状態だったり、能力を活かすには〝条件〟がある』

――『条件』。

その言葉に心臓が跳ね上がる。まさかこいつ俺のヒステリアモードのこと知ってるのか？

俺のヒステリアモードは性的興奮によって引き起こる。それによって俺の能力は何倍にも膨れ上がるわけだが……あまり好きではない。なのでなるべくならないように気をつけている。

それがアリアでなっちまったから今目をつけられてるんだがな……。

『現場でそんな甘いことは言ってられないわ』

『そのとおりだ。だからこそのパーティーだろ？　足りないところを補い合って事件を解決するからこそ複数人で組む。その場その場で仲間の調子を読み取るのもリーダーの役目だ』

『……』

『よし、キンジ』

「あ、ああ。なんだ？」

『多分車内にはいない。通報ができるってことは犯人からの脅しがかかってないってことだ。それにもし車内に犯人がいて誰かに緊急要請を出させたなら、恐怖で声が震えるはず。電話をかけてきたのは救護科の生徒らしいが途中から強襲科の生徒に変わってる。俺が犯人なら反撃されるかもしれない強襲科の生徒が動く前に脅して止める』

陸の言うことには一理ある。

ちゃんとした根拠があるなら俺も納得するしか無い。ここまで来てしまっては後に引けないのも事実だし。

「……それもそうだな」

俺は渋々頷いて強襲用のパラシュートを天井から外した。

「おっと。しっかりしろよ」

「ちょっと――ちゃんと本気でやりなさいよ！」

久々の空挺（エアボーン）だったのでバスの屋上から危うく俺は滑り落ちそうになる。そこを陸とアリアが2人で両腕を掴んで引き留めてくれた。

「本気だって……これでも、今は……！」

イラッとした声で叫ぶアリアにワイヤーを打ち込みながら返す。これでも必死に

やってるんだよこっちは。

そこの超人（陸）とは違って運動神経ももともと良くないし。こいつ今、ワイヤーも刺さずに爆走中のバスの上に立ってるんだぜ？　しかもご丁寧にパラシュートたたみながら。

「爆弾が仕掛けられているなら下の可能性が高い。アリアは見つけたらとりあえず型を報告してくれ。キンジは車内に入って状況を。一応車内に爆弾が無いかも確認してくれ」

「分かったわ！」

「了解」

陸の指示に従い、一応伸縮ミラーで車内を確認してから中の生徒に窓を開けもら

い乗り込む。

もともと大混乱だった生徒たちは俺が来たことで更に騒ぎ立て、一斉に何かを喋り始めた。言葉が交錯していて誰が何を喋っているのか理解できない。

「と、ととと遠山先輩　！　助けてっ」

「どうした、何があった」

俺たちを見捨てた武藤に声をかけられ、「あの子だ」と指された方向を見ると中等部の後輩がいた。メガネを掛けたおとなしそうな少女である。

「い、いい、いつの間にか私の携帯がすり替わってたんですっ。そ、それが喋りだして」

「速度を落とすと　爆発しやがります」

アリアの言ったとおりだ。

俺のチャリジャックの犯人と同一犯の仕業――！

『キンジ、そっちはどうだ？』

『ちゃんと報告しなさい！』

陸とアリアの声だ。

「アリアの言ったとおりだったよ、このバスは遠隔操作されてる。車内はすでに生徒が探してて爆弾らしきものは見つかってないみたいだ。そっちは？」

『――爆弾らしきものがあるわ！』

その声にバスの後方を背伸びして見ると、窓の外にワイヤーとアリアの足が見えた。

どうやらこっちも陸の言ったとおりみたいだな。

『ガンジスキーβ型のプラスチック爆弾（composition4）「武偵殺し」の十八番よ。見えるだけでも――炸薬の容量は３５００立方センチはあるわ！』

『……それはヤバイな』

ヤバイどころではない。

３５００なんて……ドカンと行けばバスどころか電車でも吹っ飛ぶ量だぞ……！

あまりにも過剰すぎる炸薬量に気が遠くなる。

『潜り込んで解体を、――』

『アリア、少しうるさくするぞ』

陸がアリアの言葉を遮ったのとほぼ同時に、パンパンッと短い銃声が２発聞こえた。

発砲音に慣れてるはずの生徒たちもこの状況では悲鳴を上げている。

慌てて後ろの窓を見ると――

そこに追従していたであろう１台のオープンカーが横転するところだった。バ

ラバラに砕けた銃座のようなものも見える。

陸がやったのか。

『アリアは作業を続けてくれ』

『わ、分かった』

『キンジ、生徒たちの様子は』

「今のでだいぶビビってる感じだな。戦闘系の生徒以外は特に」

『そうか……』

暫くの間沈黙が続き、生徒の混乱の声だけが聞こえる。

『みんなに伝えてくれ――』

そして聞こえた声は凛としていて、まさに任務慣れしているプロの声だった。

「分かった」

『頼んだぞ。俺は今みたいな襲撃に合わせて見張ってるから』

会話の間にまた銃声が聞こえ、今度はバスの右側に来た銃座が吹っ飛んだ。あれは、ＵＺＩだな。

「みんな聞いてくれ！」

手を大きく2度ほど叩きながら声を張り上げる。

ざわめきはあるものの、いくらか落ち着いてきた。

「今この上に陸がいて襲撃者を寄せ付けないようにしている。その陸からの伝言だ」

「え、桜さまが……？」「桜田がいるなら……！」

――すごい。

あいつの名前を出しただけでこんなにも混乱は収まるものなのか。

さっきの悲鳴に似たどよめきとは違う、安堵の声があちこちから聞こえてくる。

「まず専門科目ごとに別れて移動してほしい」

陸が言っていたのは、応急処置などができる救護科や衛生科の生徒を中央に。その周りを強襲科や狙撃科、諜報科の生徒で囲み、前方を装備科と車輌科で運転手をサポート。ランクが低いものや中等部の生徒も中央へ。

それから、もし流れ弾などで窓が割れても破片で怪我をしないように予め窓は開けておくこと。戦闘系の生徒はいつでも応戦できるように戦闘準備。

以上のことを伝え、各々その指示通りに動いてもらう。尋問科や探偵科の生徒なんか自分たちで事件のあらましを整理し始めている。

生徒たちは武偵である自分を取り戻していた。

『アリア、解体作業は進んでるか？』

『ええ。でも運転が時々乱れるのがやりにくいわね。間違って変なところ切りそうだわ』

『頼むからやめてくれ。……キンジ、運転手の状態はどうだ？』

陸に聞かれて初めて運転手の様子を確認する。

バックミラー越しに見えるその顔は……ダメだ。真っ青で手先も震えてる。

「完全に萎縮状態だ。なんとかハンドルを握ってる感じだぞ……！」
『ちょっとこのインカム武藤に渡してくれ』
「あ、ああ」

――爆弾の解体作業、と言うのは多大な集中力がいる。
危険物な上に、失敗すれば人質が全員死ぬんだ。相当なプレッシャーもかかる。
的確かつ安全に作業をすすめるには車体はあまり動かないほうが好ましい。
それがこの運転手じゃ難しいだろう。この人も完全なる被害者だし。

「――お、おう。それなら任せろ！」

その点こいつなら安心だ。乗り物ならなんでも乗りこなすAランク武偵だしな。

「ほれ、キンジ」

武藤はインカムを俺の手に乗せ運転席に向かう。

「兄ちゃん、後の運転は俺が引き受けるぜ！　襲撃とかも来るから兄ちゃんは真ん中にいてくれ」

「は、はい。頼みます……!!」

運転手の男性と交代し、自分がその席に収まった。

車輌科の優等生だけあってスピードはありながらも随分揺れなくなった。これでアリアの作業も捗ることだろう。

「有明コロシアムの　角を　右折しやがれです」

さっきの女子の携帯からボーカロイドの声が聞こえてくる。

武藤はその指示に従って速度を保ちながら右折した。対向車が慌てたように避けていく。

「危ないからこれかぶっとけ　！」

「いいけどよ　！　お前はいいのか？」

「俺は……なんとかする　！」

窓に手をつき外の様子を確認する。よし、今のところあのオープンカーは来てないな。

「これスピード違反とかで減点にならねえよな？　俺、この前改造車がバレてあと1点で免停になっちまうんだよ」

「安心しろ。そもそも交通帯違反だ。晴れて免停おめでとう！」

「そこから落ちやがれ！　轢いてやる！」

かくいう俺にも武藤と軽口を叩くぐらいの余裕が出てきた。

主な敵は陸が全部防いでくれるという安心感があるからだろうか。たまに来る流れ弾に気をつければ比較的バスの中は安全だ。

――やっぱりお前はすごいよ、陸。

こんななんでもかんでもできる天才と、なぜ俺が同等の戦力に考えられているのか全く不明だ。

俺には混乱を瞬時に収められるようなカリスマ性も、１人で事件が解決できるような実力も、難事件でもひるまない程の経験も無い。

それでも今ここまで来たらやるしか無いんだ。

ヒステリアモードではない、ただのＥランク武偵の今の俺の実力で。出来る限り。

いかがでしたでしょうか。

珍しく１話まるまるキンジｓｉｄｅ。原作と似たような書き方になってしまいました。

でも少し展開が違うのでそこを楽しんでいただけたら良かったです。

やっと始動したバスジャック。今後の展開も考えてありますので、次話もぜひ御覧ください！

16、悪寒

だいぶお待たせしてしまいました。
覚えていますか？　メルチェですよ～！

バスジャック編もこの話で終わりとなります！
第16話をどうぞッ。

――ｓｉｄｅ陸

爆弾を未だに解体できないまま、バスは速度を保ってレインボーブリッジに入っていった。こんな走る爆弾を都心部に入れる気かよ。

「陸　！　順調か？」
「今のところは、な」
「陸、キンジ　！」

またも近づいてきたルノーにぶっ放して破壊しているところに中からキンジが出てきた。
俺達の声が聞こえたのか、アリアがワイヤーを伝って屋上に登ってくる。

「あんたヘルメットは　！」

キンジの頭を指しながら怒鳴るアリア。

「運転を代わった武藤にかぶせて来たんだよ　！」
「そんなことは知ってるわよ　!!」
「なんだよ　！　じゃあお前はどうしたんだよ！」
「さっきバスが横転しそうになったときに道路と挟まれて割れたのよ　!!」

その通り。俺もアリアもインカムでなんとなく話は聞いていたから武藤が運転していることも知ってる。問題は

「なんでヘルメット無いのに出てきたのって言ってんの　！　無防備すぎるわ！
そんな初歩的な判断がどうしてできないのよ！　危ないからすぐに車内に隠れ

なさい！」

行動に危機感が無いところだろう。銃弾が飛び交う中頭(急所)を晒して出てくるなんて言語道断。と言っても俺も被ってないから強くは言えないんだけど。

「とりあえずお前らは中にはいれ　！」
「ヘルメットが無いのは陸も同じでしょ!?　私も残るわ！　キンジ、あんたは中に行きなさい！」
「お前らが危ないのも変わりないだろ　！」

3人中2人のインカムが無いので仕方なく大声で会話する。この暴風の中じゃやっと聞こえるくらいの音量だ。

キンジもアリアも全く引く気が無い。段々と関係のない言い合いが入ってきてるし。

こいつら本当に今の状況わかってるのか？

「お前ら落ち着け　！　こんなところで言い争っていられるほど悠長な事態じゃないだろ!!」

「「いッ　!?」」

ゴッ！　と少し鈍い音を立てて2人の頭にげんこつを落とす。アリアのほうが若干弱めではあるが。

「お前らがやってるのは成績がつく演習じゃない。人命、それも仲間の命がか

かってる事件だ！　そんなときに自分の感情を優先させるなら最初から関わるな」

「「……」」

2人の行動があまりにも幼稚すぎたため少し頭を冷やしてもらおうと思って言った言葉。

目があったアリアが瞳を潤ませているのに気づいて言い過ぎたかもしれない、と思った。

でも、間違ったことは言っていない。感情はときに思考を鈍らせ、判断を間違える。怒り我を忘れて自滅する武偵の話はさんざん聞いてきた。

何も感情を捨てろと言っているわけではない。誰かを想う気持ちが潜在能力を引き出すこともある。

ただ、怒りの感情は別だ。それを糧に冷静な判断をできるものとできないものに別れる。少なくとも――アリアとキンジは後者だ。正常な判断ができていない。冷静になれていない。だから言い争っている。

このままではどちらかが絶対に傷つく。仲間だと、友達だと思っているからそんなことになるのを見過ごす訳にはいかない。

「……すまん陸。俺が中に戻る。ここにいたってSランク武偵よりいい仕事ができるとは思えないしな」

「そうか。アリアは？」

「あたしは……もう一度解体してみるわ。さっきはいいところでヘルメットが割れちゃって登ってきたし」

「分かった。じゃあ俺は引き続き敵の掃討に専念する。アリア、深追いはするな。少しでも難しい状況だったら引き上げてこい。いいな？」

「ええ」
「よし。それぞれの役割につこう」

3人で顔を見合わせ1つ頷く。やっと冷静になったか？

2人がそれぞれの場所に行くのを確認して弾倉をセットする。

バスの前後方からルノーの大群が押し寄せていたざっと……20台ずつ？　まだ来るのか、しつこいな。

「レキ。援護射撃を頼む」
『分かりました』

取りこぼすつもりは無いが不足の事態に備えてレキにはいつでも撃てる状態にしてもらう。ロボットのように無機質な声が機械越しに聞こえた。

あまり接近させてこちらに飛び火したら大変だ。ある程度の距離を保って仕留める必要がある。

バスから30メートルぐらいの位置で狙いを定め左右に腕を広げて射撃を開始する。狙いは銃口とルノーの少し前方のコンクリート。車体が防弾性だろうと関係ない。エンジンを一気に破壊する。

――ドッガアアアアン!!

こちらに向かっていたルノーは連鎖的に爆発を起こし、視界一体が炎で包まれる。前方は少し見えにくいが武藤の腕なら乗り切るだろう。

他に襲撃も無いようだし、とりあえずこちらは終わりか。後はアリアだけだな。

「陸　！」
「アリア。　……　！」
「解除したわよ　!!」

ちょうどその時、最後の懸念材料だった爆弾も無事解除できた。もうこれで心配はいらない。

『陸！　武藤がこのまま抜けていいのかって』

「ああ。今アリアが爆弾を解除し終わった。この炎を抜けたところで停車しよう」

『マジかよ!?　おいみんな！　爆弾を解除したぞ!!』

インカムごしと足元の両方から大勢の歓声が聞こえてきた。安堵からかすすり泣く声も聞こえる。

ガラクタとなったルノーの破片を的確に避けながら進んだ武偵高のバスは――ゆっくりと停車した。

「アリア、よくやったな　！　お手柄だぞ」
「えへへ……」

停車したバスの上でアリアの頭をガシガシとなでてやる。途中不安なこともあったが持ち直してくれたらしい。まだあそこで喝を入れられるほどの余裕があってよかった。

「今日は俺たち　4人の初の事件解決祝だし家でご馳走にしよう」
「本当　!?　桃まん出してね！」
「他のものも食えよ……」
「はーい」

生徒を誘導しているキンジは後で声をかけるとして。まあどうせ同じところに帰るんだし最後でいいや。後はレキを誘うか。

「レキ」

道路に留められたヘリからドラグノフを背負ったレキが降りてくる。声をかけるとどこを見ているのかわからなかった視線が俺に定まった。

「今日家で解決祝をするから良ければ来いよ。ご馳走するから」

「分かりました」

それだけ言ってレールによりかかり、目を閉じてしまった。……よく分からないな。

救護科の生徒がけが人を手当するのをぼーっと眺める。あまり大怪我をしたやつはいないみたいだ。みんな和やかな表情で手当を受けている。

「陸」

その時、横から袖を小さく引っ張られる。その主は桃まん大好きっ子のアリア。

この顔は何か言いたいことがあるけど言い出せない、ってやつだな。いつもなら助け舟を出して上げるんだけど。

「どうした？」

「あの……その…今回のこと、ごめんなさい……」

目を逸しながら呟くアリアは、その瞳を不安げに揺らしていた。
さっき入れた喝がだいぶ効いているのか。

「振り出しに戻っちまったな」
「うっ……。陸がいなくなった後の考え方がこびりついてて――陸？」
「どうした？」

目の前のアリアが大きい目を更に見開いて俺の腹辺りを凝視する。

「どうしたって、なんか、赤い染みが、どんどん広がって――」

ガハッ。

何を言われているのか理解できない。

言葉の真意を聞こうとして開いた口からは液体がこみ上げてくる。手で拭ったこの赤いのは
――俺の血？

「陸　？　陸!?」

視界が霞む。
音が消えていく。

なんだこれは。俺の体に何が起きてるんだ？

「アリ、ア……」

背中が悪寒が走る。突然の喪失感に襲われた。

体のバランスが取れなくて、後ろに重心が傾いたとき。

――前方からやってきた強風で、体が宙を舞った。

「陸 !!　陸ぅー!!」

朦朧とした意識の中で、俺を呼ぶアリアの声が聴こえる。声音からしてきっと泣いてるんだと思う。

ごめんな、アリア。

意識がなくなる直前。覚えていたのは頭から飛び込んだ、東京湾の冷たい水の感覚。

――sideキンジ

「陸　!!　陸!!!」

バスジャックを解決し、人質となっていた生徒を誘導しわった頃。

最初は陸のところに行こうと思っていたが、アリアと何やら話をしているみたいだ。仕方ない、武藤で手を打とう。

ちょうど、そんな呑気なことを考えているときだった。

――バッッシャァァン!!

はるか下の方から聞こえた何かが水に落ちる音と、アリアの悲痛な叫び声。

一体、なにが？

「きゃあああ　!!　さ、桜さまが、下に!!」
「今落ちたのって……桜田　?」

陸が落ちた?　海に?

本当に、何があったんだ……!

「アリア　!　ッ!?　お前やめろ!!」
「離しなさいよ、キンジッ　!　陸を、陸を助けないと…!」

ガードレールに足をかけて今にも飛び込まんばかりのアリアが目に入る。考えるより先に体が動いていた。アリアを後ろから羽交い締めにして道路の方に倒れ込

む。

『キンジ。アリアはカナヅチだから、水場の任務とか行くときあったら助けてやってくれ。あ、それと。この事本人には内緒な？　バレて無いと思ってるから』

陸から教えて貰った情報が頭を支配したからだ。アリアが行っても助けられない。

「お前が行っても無理だ!!」

「陸は、ケガをしてるの！　血が、血が……！」

「なんだって……！」

それっきりアリアは座り込んでしまう。

あの陸がケガを!?

疑問に思うところは多いがとりあえず陸を海から引き上げなければ……！　血が滲むってことは相当大きいはずだ。海水に浸かるのは危険。

「すまん！　男子で潜水術及び水泳が得意な奴3、4人で救助してくれ！　陸はケガをしている！　見つけ次第何かで連絡をしてくれ！」

「お、おう！　おまえら行くぞ!!」

先陣を切って海に飛び込んだのは武藤。他に3人の生徒が飛び込んだ。

俺はアリアに気を配りながらも眼下の海に視線を向ける。アリアがいつ暴れだすかわからないため、陸の救助には向かえない。

「キンジ！　陸がいたぞ！」

その声にガードレールから身を乗り出す。ちょうど真下あたりに３人がかりで担ぎ上げられている陸がいた。ぐったりしていて動く気配は無い。

「すげえケガだ！　出血点は……両脇！」

「結構な出血量だ！　早く手当しないと……！」

全身から血の気が失われていくのがわかる。両脇といえば腋窩動脈が通っている場所でもある。出血がひどければ失血死もあり得る場所だ。

武藤からの報告では別に背骨は心配しなくて良さそうだが、穴が開いてるとなると出血量がヤバイ。

「武藤！　今からそっちにヘリを下ろす！　陸を抱えて縄梯子登れるか!?」

「やってやるよ　!!」

返事を最後まで待たず各方面への指示を飛ばしてヘリに乗り込む。

「衛生科と救護科の生徒は今から陸を運んでくるから手当を頼む　！　レキ、お前はアリアを見張っててくれ」

「分かりました」

早く陸を引き上げないと。武藤たちにも被害が及ぶ。

5月の海はまだ冷たい。その上脱力しきった人間を支えてるんじゃ疲労はハンパないだろう。

「武藤　！」

「おう　！　なんか結ぶものくれ!!」

ヘリを下ろせるギリギリの高度で保ってもらい、縄梯子を下ろす。そしてヘリの中から適当な縄紐を何本か海に落とした。

仲間の手を借りて水中で背におぶった陸を紐で固定していく。

武藤は今、陸を背負っているため男2人分の体重がある。それを俺1人で引き上げるのは……情けない話だが少し無理がある。その為武藤より先に1人中に来てもらって、後の2人で武藤を下から支えてもらうことにした。

「武藤、あと少しだ！」

「おう！……おっらぁ！」

武藤が縄梯子を登り始めてから数分後。ついにヘリの縁に手をかけた武藤を俺ともう一人で引き上げた。

その後につづいて残りの2人も登ってくる。

陸が揺れないように固定しながらもう一度さっきの道路の上に着陸した。

「陸　！」

衛生科や救護科の生徒が駆け寄って応急処置を始める中、アリアはずっと陸の手を握っていた。

陸の体は今だいぶ冷たい。失血に低体温症までとなると危険度は確実に増す。

何かをしたい。でも結局は何もできない。陸みたいに多方面に精通しているわけでもなければ１つのことに特化しているわけでもない。そんなしがないＥランク武偵の俺にできることは――黙ってこの現状を見ていることだけだ。

「遠山くん！　桜田くんの治療は終わったわ。一回武偵高に戻ってそこから救急車で救護科に運んで頂戴。連絡はしてあるわ！」

「分かった！」

多分同級生と思われる女子に返事を返してヘリに乗り込む。

乗っているのは俺と陸とアリアの３人。レキはもしものときのために置いてきた。

陸の手を握って涙を浮かべるアリアを見ながら俺は心の中で陸に話しかける。

お前を助けるために多くの人が手を貸してくれた。

あのアリアが珍しくしおらしい表情でお前を心配してるんだぞ？

これまでたくさんの任務をこなしてきたお前ならこのぐらいのケガ大丈夫だよな？

お前の元気な姿をみんな望んでるんだ。

だから――――こんなところで死ぬんじゃねえぞ。

17、入院

大変ながらく書いてなくてすみませんm(_ _)m
もう、お前誰だよ？状態かと思いますがまた読んでいただけると嬉しいです！

ｓｉｄｅ陸

目を開けて１番最初に見えたのは真っ白な天井。まだ視界はぼやけていて、覚醒しきっていない頭では的確な状況整理もできない。

えっと…ここは？

首を回して辺りを見回すと『レキより』とメッセージカードのついた白百合。後

は果物の入ったバスケットや、ベッドの上に持ってこれるキャスター付きの机。
ということは、

「病院か」

海に落ちたあたりから記憶が無い。ここはたぶん武偵病院だな。飯が不味いことで知られている。
そして病室で寝ているのが俺、ということは…俺が入院してんだろうな。

「陸…！」

病院特有の引き戸をガラガラと開けて入ってきたのは、コンビニの袋を持ったアリア。
最近までコンビニに行ったことなかったのに、1人で行けるようになったのか。

なんて場違いな驚きを浮かべてみる。

「陸ーー！」

しばらく固まっていたアリアだが、袋をポイッとほっぽり出すと飛びついてきた。

「心配かけたな、あり、痛い痛い……！　脇腹！」

「あ！　ごめん！」

背丈の関係か腕を回したのが負傷中の脇腹だったので激痛が。

まあ、でも涙目だったし。相当心配させたのは十分分かったから。

「心配かけてゴメンな。御見舞ありがとう、アリア」

「…陸がこんなに大ケガしたの初めて見たから、このまま目が覚めないんじゃないかって思って、だから、起きてくれてよかった……」

溢れてきてしまった涙を一生懸命拭いている。

俺はよしよし、とずっと頭をなでていた。一定の速度で同じことを繰り返されるとリラックス効果が出てくるんだ。少しは落ち着いてくるだろう。

「そうだ。バカキンジにも伝えて来ないと。陸、ちょっと電話してくるね」

「分かった」

アリアが泣き止んだ頃。恥ずかしくなったのか、アリアは早口に喋ると病室から出ていってしまった。

キンジに電話、は嘘じゃないだろうけど、逃げるための口実だな。あれは。昔からそういう照れ屋なところは変わらないなあ、と少し微笑ましく思ったり。

アリアが帰って来るまでになにか果物でもむいておくか、とバスケットの中身を物色する。お、メロンとかあるじゃん。

ガラガラー。

メロンを手に取りナイフを探していたところで後ろから扉の開く音がする。アリアが照れを冷ます時間にしては短すぎるような……？　振り返るとそこにいたのはアリアではなく。

「おー、レキ」

「こんにちは」

なんとレキであった。

人となりを理解するほど知り合ってからの時間は立っていないがなんか意外な感じだな。

「見舞いにきてくれたのか？」

「はい。風がそういっていたので」

「風？」

「はい」

……風か。レキはなんとも不思議ちゃんだよな。バスジャックの前にもやったこの風のくだり。いまいち理解できないんだよなあ。

「…この白百合ありがとな。なんか悪いな、こんな立派なもの貰っちゃって」

「はい」

分からないことはとりあえず放置で。

たぶん今考えても結果は出てこないだろうしな。

「今、メロン食べようと思ってむいてるところなんだ。アリアももうすぐ帰ってくるし一緒に食べる？」

「いえ、陸さんの顔を見たので帰ります」

ペコリ。

肩にかけてるドラグノフとともにお辞儀をしてレキは病室から出ていく。なんと滞在時間２分。

本当に顔を見に来ただけのようだな。

「お見舞いありがとなー」

聞こえるかは分からないがその背に向けてお礼を言っておく。
風のような子だな。

「陸！」

レキが病室を出てから10分後ぐらい。
今度はあわただしくキンジがやって来た。
軽く汗をかいてるし、走ってきたな。

「おー、キンジ。メロン食うか？」
「あんはほほはんはっへひたんへほーね？」（あんたもまん買ってきたんでしょーね？）
「食べ終わってから喋りなさい」
「みゃう」

お行儀の悪いアリアに軽くチョップ。
まず何喋ってんのか分からないし。

「おまっ…ケガは？」
「全回復ってとこだな。もうメロン食ったら退院する」
「…は？」

ハトが豆鉄砲を食らっているような顔だ。あ、ほんとにキンジの顔が鳩っぽく見えてきた。

「え、だって脇のところえぐれてたんだぞ!? そのうえ海にまで落ちて、1日もたたないうちに全回復って、は!?」

あらら。見事にパニクってるじゃないの。

キンジよ。お前は重要なことを見落としているぞ。

「おいおい、忘れたのか？　俺は全専門科目Ｓランクだぞ？」

「…？」

「そしてそこにはもちろん、ＳＳＲも含まれている」

「なっ、まさか!?」

アリアは俺のここら辺の事情もよく知っているので驚きはしない。それにしてもキンジはいい反応するなあ。

「超能力で回復治療も出来るってわけ」

「むぐっ!?」

回復具合を証明するため、病院着の上だけ脱いでみせる。なぜかアリアがノドを詰まらせた。というかすでに桃まん３個目。…没収だな。

「桃まん！」
「ご飯なし」
「…いらないです」

すっごい恨めしそうな顔で桃まんの入った紙袋を睨んでる。手を左右に動かすと視線もついてくるし。あ、ちょっと面白いかも。

「…やっぱりお前は人間じゃないな、うん」
「ご飯なし？」
「ごめんなさいうそです」

しみじみと呟かれたので伝家の宝刀（脅し）を使う。これ最強だな。今後も使うとしよう。

人様に向けて人間じゃないとか言ったらいけないんだからな？傷つくんだからな？

「まだ仮段階のものらしいが報告書を預かってきた。理子を中心に探偵科と鑑識科で調べてるヤツだ」

「さんきゅ」

キンジからファイルを受け取る。パラパラとめくってみるがあの場にいればわかるような事がほとんどだな。でも良くまとまってて読みやすい。

「アイツら今夜は徹夜してでも証拠見つけるって息巻いてたけど、実際はほとんど分からなくて苦労してるみたいだった。一応俺のチャリジャックの時の調査も入ってるけど、セグウェイもＵＺＩも盗難品で手がかりなし」

「だろうな」

「でしょうね」

キンジの言葉に俺とアリアは同時に頷く。

相手が相手だからな。みんなが力不足なんじゃなくて、『武偵殺し』が何歩も上手なだけだ。

「やつはケタハズレに狡猾なやつよ。これぐらいで尻尾を出すわけがないわ」

「俺はチャリジャックもバスジャックもてっきり模倣犯の仕業かと思ってたんだけどな。なんたってーやつはもう捕まってるんだら」

「だから何度も言ってるじゃない。それは誤認逮捕なのよ」

「模倣犯にしては犯行が完璧すぎる。逮捕された人も報道とか見る限り大した証拠もないのに引っ張られてるし、何かしら裏がありそうなかんじだな」

俺が根拠を示したことでキンジはアリアの仮説に反論出来なくなった。これに反論するんじゃ相当なこじつけが必要だからな。

「明日になれば本格的な報告書を持ってくるだろうけど…まあ、あんまり期待できる感じでは無かったな」
「そうね。そんなもの最初からしてなかったし別にいいわ」

キンジの言葉に強気な返事を返しながらも落ち込んでいるふうに見えるアリア。『武偵殺し』はアリアがずっと追ってる事件だったみたいだし、心のどこかでやっぱり期待していたのだろう。

「まあ、ここで終わりにするような犯人でもないだろうし手がかりを掴むチャンスはすぐやってくるさ。だからそんなに落ち込むな？」
「なっ、落ち込んでなんかないわよ！」

よしよし、と頭を撫でてやる。真っ赤になって否定しながらも、俺の手は振り払わないんだよな。

「〜〜！　もう全部食べてやる！」

照れが最高潮に達したのか、俺がむいたメロンを両手にそれぞれ掴むと。
ガブガブガブー！
大食い女王もビックリなメロンの早い食いをしだした。

「ふー。ごちそうさま！」

そして、俺とキンジがほうけていた数分の間にメロン丸々１つを食べてしまったのだ。
俺は１切れ食べれたし別にいいけど…。

「…はぁ!?　お前、全部食べたのか!?」

キンジに一口もやれなかったな。

「そうよ？　なにか悪い？」

「当たり前だ！　1人で全部食べやがって！」

「あんたがトロいのが悪いんでしょうが！このうすのろ！」

「お前なぁ！」

こんな感じでキンジとアリアの口論が始まった。食べ物の恨みは恐ろしいって事だな。

しばらく終わりそうにもないし、他の果物でもむいとくか。

俺が早々に放置を決め込んだこの言い争いは病院の廊下にまで響いており、救護科の生徒に怒られたのは言うまでもない。

＊＊＊

バスケットに入ってた果物を3人で全部食った後2人は帰っていった。と言っても、俺の服を取ってきて学校に1度よったら戻ってくるそうだ。教務科への報告もあるし、俺も退院したら寄るように、とキンジが伝えてくれた。

「失礼するわね。桜田くん具合はどう？」

1人になってヒマだったので、外の様子でも眺めようかと思っていた時。病室に救護科の矢常呂イリン先生がやって来た。武偵病院は救護科の担当だし、ここに担当教諭が来るのは普通のことだ。

「まあ、超能力使ったんで自然回復じゃ無いですけどバッチリです」

「退院する気って言うのは本当かしら？」

「はい」

アリア達が来れば着替えて即出るつもりだったしな。今はいたって健康体だし。

「とりあえず担当としては許可出来ないわ。腋窩動脈損傷に低体温症で死ぬ間際だったのよ？いくら桜田くんと言ってももう少しいてもらいます。せめて検査で異常なしと出るまではね」

「いや、でも健康体ですし…」

「い・い・わ・ね・　？」

「はい」

じゃあこっち来て、と言って出ていく先生に着いていく。とりあえずアリアには書き置きを残しといて、っと。それにしても…こっわかったぁ。美人な分迫力が凄い。

いくつかの検査（結構精密というか本当にくまなく）をして、病室に戻ってきた。

矢常呂先生いわく、

「検査結果出すのにそこまで時間かからないけど、そのまますぐ帰りそうだから明日伝えるわ」

だそうだ。今日は泊まりだな。

「陸、服持ってきたわよ」

「さんきゅー、アリア」

はい、と渡されたバックを受け取りベッドサイドに置く。と言っても今日はこれ意味無いんだよな…。

「陸は早く退院したかっただろうけどあたしは安心したわ。今日ぐらい休みなさい」

「そうだな。今戻っても教務科行って終わりそうだし。そうだ、キンジは？」

「教務科への報告で捕まって、さらに強襲科でも捕まってたから置いてきたわ。あいつ意外と人望あるのよね」

あいつもカリスマ持ちだからな。それにしてもご愁傷さまって感じだな。

「これ、装備科から預かってきたわ。あんたの携帯」

「おおー！もう出来たのか。さすが文ちゃんだな」

アリアから携帯を受け取る。俺のなんだが、海に落ちた時に思いっきり海水に浸かってぶっ壊れていたので修理してもらってたんだと。見たところデータとかもとんでないみたいだし、よくもまあこの短時間で。

「キンジも人気者だけど陸だって凄いわよ。学校よったらみんなが陸のこと聞いてくるんだもん。火野や佐々木にはあんたが無事だって伝えといたわ」

「そっか…みんなにも心配かけたな。…ん？あかりは？いなかったのか？」

「陸をヘリで乗せて武偵高の救急車まで運んだんだけど、その時に飛び出したっきりで帰ってないらしいの」
「それは気になるな」
ライカ達も行き先を知らないとなると…危ないな。あかりには間宮の秘術があるけど、不意打ちされたら反応出来ないだろうし。
「なにか行先の手がかりになるようなものとかは？」
「雨の中傘もささずに飛び出したらしいから、陸が運ばれてパニックになったと思うんだけど…。ふらふらと歩いていったって言う目撃情報しか無かったわ」
超能力でも使って調べるか？そんなのは簡単な事だけど…その必要も無いな。たった今、新情報が入ってきたところだし。
「アリア、メール見たか？」

「メール？」
「ああ、高千穂から」
「本当だわ」

『拝啓陸先輩へ』
その書き出しで始まったメールは…ものすごく長文だった。それは短編小説なんか書けるんじゃないかってぐらいの長さ。なので省略してまとめると。

『あかりが敵と思われる黒髪ロングの少女と接触。ＴＮＫ製のワイヤーで攻撃されていた所を救出。相手は一時撤退したようだが、またすぐに襲撃してくるだろう』

といった感じだ。高千穂ナイスタイミングだな。さらにあかりから話が聞ければいいんだがな。俺の無事を証明するためにも１度ここへ来てもらうか。

「アリア、読んだか？」
「ええ。内容も同じようね。あんたのは最初の謝罪文がものすごく目立つけど…」
「…あかりを探しに行こう。きっとお見舞いに来てるハズだし」
「…そうね」

謝罪文が内容の半分を占めているという事実。
俺は携帯をそっと閉じてベットから降りる。微妙な顔をしたアリアが後ろから着いてきた。
…そんなにトラウマだったのかなぁ？高千穂。

18、交響曲

大変お久しぶりでございます。メルチェです。

お久しぶりの更新ですが読んでいただけて嬉しいです！

あかりｓｉｄｅ

「あかり！」

「あかりさん！」

「ついてこないで！　私が犠牲になれば、いいの！」

ののかが夾竹桃に狙われたのはやっぱり間宮の術のせいだった。私が間宮の一族じゃなければ、私がもっと強かったら…。夾竹桃に言われた言葉がよみがえる。

『あなた弱いんだから』

私が弱いからののかを守れなかった。だから、夾竹桃のものになることでしかののかを救えない。私は行かなくちゃいけないんだ！

みんなの制止を振り切って病室を飛び出した。

「きゃっ!?」

「おっと」

そこでドン、と誰かにぶつかる。いてて・・・。鼻を押さえてその人を見ると。

「陸先輩!?」

「こんばんは」

突然の登場に頭がパニックになる。え、陸先輩がケガしたって聞いて、この病院にきて、でも会えなくてどうしようってなって、それで。

「――俺はここにいるから、落ち着いて」

「は、い」

ぽんぽんと、頭をなでられて目を覗き込まれる。うわー、陸先輩の顔ってやっぱりきれい・・・。優し気な先輩の目となでられる一定のリズムにだんだんと落ち着きを取り戻していく。

「今日お見舞いに来たんですけど先輩に会えなくて・・・。聞いた話では大けがをしたってことだったのですごく心配したんです。でも思ったより元気そうで安心しました！」

「あー、たぶん検査に引っ張りまわされてた時に来てくれたのかな？　いなくてごめんな。一応ケガは超能力で治したから心配ないけど、念のために今日は一泊す

るんだ」
「さ、さすが陸先輩…」
「あかり！」
「陸先輩?!」

病室から私を追いかけてきたライカたちが陸先輩に気づく。私もなんで病室を飛び出したか思い出した。早く夾竹桃のところにいかなくちゃ。

「私行くところがあるので失礼します！」
「――――アリア」
「まったく、落ち着きのない子ね」
「!?」

陸先輩の横をすり抜けた時に、ぱし、と手首をつかまれた。え、と思っている間にはすでに体が宙を舞っていて。

「よいしょっと」
「？」
床に叩きつけられる衝撃に備えた。でもいつまでたってもそんな感じはない。あれ？　おかしいな。恐る恐る目を開ける。
「アリアも手荒い止め方するなあ」
「あんたの指示でしょうが」
「方法に性格が…ナンデモナイデス。あかり、大丈夫か？」
おなかのところで抱えられるようにして陸先輩に持たれていた。
「！？！？！？！」
陸先輩に触られてる！　おなかを！

「〜！〜〜〜!!」
「ごめんごめん」

ダイエットしとけばよかった！　おなかぷにぷにだよ〜！　いやー!!
じたばたと暴れてやっとおろしてもらう。アリア先輩の後ろに隠れるようにして陸先輩と距離をとった。うー、恥ずかしいよー！

「ほら、陸。あんたがそーゆーことするからあかりに警戒されてるわよ」
「え。そうなの？　あかりごめん！」
「ええ!?　いや、違うので謝らないで下さい！」

陸先輩に頭を下げられてしまい、慌ててアリア先輩の後ろから飛び出す。違うんです先輩。陸先輩はわざとじゃないって信じてるので頭上げてくださいー！

「よし、じゃあ本題に入ろうか」
「本題？」
「そんな血相変えてどこに行くつもりだったんだ？」
「あかり、いくな！」
「そうです、あかりさん！　夾竹桃のところにいくなんて危険すぎます！」

ライカ・・・。志乃ちゃん・・・。ごめんね。
ののかは私が守らないといけないんだ。そのためにはどうしてもここを通らなければいけない。さっきから隙を伺ってるけど、先輩たちにそんなものあるわけないし。というかあっても攻められるわけないし。先輩たちは私を挟んだ状態のまま退いてくれそうにないし。普通にきりぬけようとしたって無駄なことは嫌というほどわかっている。陸先輩は無理でもアリア先輩なら・・・鳶穿の勢いでそのまま抜けられるかも。

「あ・か・り」

「みゃきゃ!?」

鳶穿の構えをし始めたところで突如視点が高くなる。わきの下に手の感触。

「陸先輩！　下ろしてください！」

「はい、行くよー」

陸先輩に高い高いの状態で運ばれる。さっき飛び出してきたののかの病室に。暴れてはみるけど叶うわけもなくて。あっさり戻されてしまった。

「陸先輩！」

「だめ」

扉の前を占領してしまった陸先輩は退いてくれないし、アリア先輩も陸先輩の真横に仁王立ちしている。

「あかり。敵に接触（コンタクト）されたんだろ」
「どうしてそれを・・・？」
「高千穂がさっきメールで教えてくれたんだ」
高千穂さんが・・・。
「ねえ、あかり。あんた隠してることがあるでしょう？　あたし勘は鋭いほうなの」
「・・・！」
アリア先輩の言葉に黙ってしまう。だって、本当のことだったから。
「今回の敵のことだけじゃない。自分自身のことも隠してきた。それはあんたの武偵ランクが低いまんまなのと何か関係があるのね？」
「それは…」

つい、事情を知っている陸先輩を見てしまう。だけどその表情は変わらない。

「何もかも隠したまま、何もかも解決出来るの？」

「今まで貯めた勇気はここで出すべきなんじゃない？」

アリア先輩と陸先輩の言葉にハッとする。

間宮の殺人術が、武偵としての根幹に繋がっていると教えてくれた陸先輩。私を戦姉妹にしてくれて、たくさんの稽古を付けてくれたアリア先輩。

私は変われず弱いままだったけど、きっとこれが最後だろうから。ここで話すのが誠意ってものだよね。先輩達や友達への。

「――話します。尊敬する先輩に、嘘はつけませんから」

覚悟は決めた。全部何もかも伝えよう。これでみんなが離れても、軽蔑されても仕方ない。

アリア先輩、陸先輩。ありがとうございました。…そしてごめんなさい。さようなら、みんな。

「私は最初から、この学校に来ちゃいけなかった生徒なんです」

――――――――――――――――

――――――――――――

――――――――

――――

「間宮の一族は公儀隠密、現在の政府のスパイみたいなことをやっていたんです。

時には命に関わるような危険な仕事もあったりして…。でも時代とともにそういう仕事は減って、戦技だけが子孫に伝えられていったんです」

みんな驚いた顔をしてる。陸先輩だけは何を考えているのか分からないけど。

「間宮の術は門外不出。その技を狙って、二年前、私たちの一族は襲撃を受けたんです」

人々を守るために伝えられてきた技だった。だから夾竹桃達がその技を狙ってきても一族は拒否した。悪党に渡すわけには行かなかったから。戦えなかった。技を盗まれたら、悪用されるから。だから一族は掟の通りに戦わずに逃げた。それは間違っていないと思う。でも。

「間宮の術があったから私とののかは逃げて、ののかはこんな目にあって…だからもう、いいんです。」

私が犠牲になれば全て丸く収まる。ののかも助かって、夾竹桃が狙うことも無くなるんだから。

「――あかり、少しきついこと言うぞ？」

全て話し終えた私に陸先輩が近寄ってくる。すごく真面目な顔で、それはいつもの笑顔やさっきまでの無表情とも違って。何だか、怒ってる？

「自分の弱さを諦める理由にするな」

「…！」

一言が胸に突き刺さる。

『だって、あなた弱いんだから』

私は弱い。

「陸先輩、それは…！」

「下がってなさい」

今にも食ってかかりそうなライカをアリア先輩が止めている。普通ならオロオロしてしまうところだけど、いまはそれどころでは無くて。

「でも、ののかを助けるにはこの方法しか、」

「自己犠牲は自分が満たされるだけだ。相手のためと履き違えるなよ？ののかちゃんに、一生消えない傷を背負わせるつもりか？」

はっ、とののかを振り返る。

「お姉ちゃん…」
「ののか…」

そこにはこちらを泣きそうな顔でみる妹がいて。
私がののかの心に傷を…。それはやだ。でも、じゃあ。

「…じゃあ、どうすればいいって言うんですか。私は陸先輩みたいに強くない！アリア先輩にはなれない！」

思ってることを吐き出すように叫ぶ。陸先輩なら受け止めてくれるから。

「昔の技は封印して、新しい技は身につかなくて」

変換出来たのは鷹捲だけだった。何年もかかって、やっと一つ。

「夾竹桃は強くて、あたしは弱い！　それこそ、先輩達が戦ってる敵と同じくらいに」

陸先輩に怪我を負わせた敵と同等の夾竹桃。先輩達の足元にも及ばない私が勝てるわけがない。

「いったい、どうすればいいんですか…」

拭ったはずの涙が溢れて止まらない。なんで、こんなに弱いんだろう。なんで妹の1人も守ってあげられないんだろう。

「あかり」

「ふぇ？」

俯いていた私の頭に大きな手。ポンポンとリズムよく撫でてくれるのは陸先輩の

手。感触に驚いて顔を上げるとそこには――陸先輩の顔。

ち、ちちちち近い！

「先輩としてこれだけは教えておこう」

「な、なんですか？」

私の両肩に手をおいて陸先輩は言う。

「本当に守りたい相手なら、自分の命だけは掛けちゃだめだ。それをしていいのは、必ずその人の前に戻ってくる覚悟がある時だけ」

「覚悟…」

「弱いのは強くなるための前段階。逃げるのはより態勢を整えてもう一度挑むため。だからそれは恥じゃない。恥ずかしいのは変われないまま自分に負けてしまう事だよ」

そういって陸先輩は悲しそうな、少しつらそうな顔をした。その顔に私の心もぎゅーッと締め付けられる。先輩のこんな顔、見たことない。

「できないことがあったっていい。誰に負けたっていい。でも、自分の弱さに負けちゃだめだ。諦めたら、後悔するよ」

武偵憲章十条。諦めるな。武偵は決して諦めるな。

「あかり。あんたこのまま行かせると、武偵も、あたしとの戦姉妹契約も破棄しそうだから先に釘を刺しておくけど」

きろっと、今まで黙っていたアリア先輩がこちらを向く。な、なんで分かったんだろう。陸先輩の話を聞かなきゃ絶対そう言ってたよ。

「戦姉妹の途中解散には規則上双方の合意が必要よ。私は合意しない。あたしの戦妹なら最後まで武偵として戦いなさい。敵と――そして自分と」

「アリア先輩…」

逃げようとした私を、まだ戦妹だと言ってくれた。追いかけていた背中が、いまは私を引き留めようとしてくれている。

「やっぱり、あかりは武偵に向いてるよ」

「陸先輩…？」

優しく笑った陸先輩がそれでも視線は外さず、そういった。

「間宮の術は人を殺める術。でもそれは人々を守るためにある。何年もかかって人を殺さない術に変えてきたその根性は褒められるべきだし、その術を封印してまで人を助ける側になりたいと思うその考えは立派な武偵だ」

その言葉を聞いて、また涙が溢れてきてしまう。どれだけかっこいいんですか、陸先輩。

「だからこれからもあかりには武偵として、俺の後輩として、頑張って欲しい。ちゃんと、笑って戻ってこい」

「り、りぐぜんばあい…！」

「あんたに教えなきゃいけないことはまだまだあるのよ！」

「ありあ〻ぜんばあい！」

陸先輩がかっこよすぎて。アリア先輩が優しすぎて。ほんとに、尊敬できる先輩達だなぁ。

「私、何も持ってなかったけど…。先輩達に勇気を貰いました！　必ず勝って見せます！夾竹桃にも、自分にも」

握りこぶしを作って気合を入れる。でもどうしようか。私１人だけで勝てる相手じゃないし…。

「あかり。一つ間違えてる」

「間違い？」

「あかりは大切なものをこんなに持ってるじゃないか。振り返って見てごらん？」

不思議に思いながら先輩の手の動きに釣られるようにして振り返る。そこにいたのは、

「家がなんだ！　技がなんだ！　あかりはあかりだろ！」

力強く叫ぶライカがいた。

「微力ですが、お力添えしますの！」
笑顔の麒麟ちゃんが宣言する。
「あかりさんが死ぬなら私も一緒に死にます！」
涙ぐみながら言う志乃ちゃん。
「某も助太刀致す。風魔の秘伝『符丁毒』の悪用、許すまじ」
風魔さんもそんな声をかけてくれる。

みんなの声が、胸に響いて。
「みんな…」

さっき、陸先輩に声をかけてもらった時のような、温かい気持ちになって涙が溢れてくる。

「…助けて、くれるの…？」

涙をぼろぼろ流して。顔もぐしゃぐしゃにしながら。そんな情けない顔をしてしまった。

「1年暗唱！武偵憲章1条！」

「ーーー仲間を信じ、仲間を助けよ！」

アリア先輩の鋭い号令に、みんなが直立不動の姿勢をとって強く、言葉を放った。

武偵憲章。

10条まである武偵の心得の中でまず最初に書かれている、大事なこと。

「あかり、分かったかな？　自分のことを信じてくれる仲間がいるってこと。あかりがどれだけ素晴らしいものを持っているかってこと」

「陸先輩…」

憧れの2人の前でみっともない顔で泣き続ける。みんなへの感謝の気持ちと一

緒に涙も溢れて止まらない。
頬を流れる涙が、熱い。

「ーーーあかり」

アリア先輩の隣に立っていた陸先輩が近づいてくる。私の前で止まり、ぎゅっと。
さっき投げ捨ててしまった武偵高の校章を拾い、手の中に握らせてくれた。

「俺とアリアから、作戦命令を下すぞ」

「！」

作戦命令。
ここ一番の急襲作戦に付けるコードネーム、『作戦コード』に憧れてアリア先輩に一度断られたもの。
まだ一人前ではないから、と。

武偵の戦いに待ったはない。一人前でなくとも、勝たなければいけないここ一番はきてしまうのだ。

「コードネーム『交響曲（シンフォニー）』」

ーー交響曲。

「交響曲は複数の楽器で構成されるオーケストラの多重奏楽曲のことなんだ。1つでは奏でる音が小さくても、たくさん集まれば規模が大きくなって音が届く。ーー仲間となら大きな力を発揮できる。そんな想いを込めて、このコードネームにしたんだ」

「私は借りをきっちり返す主義なの。あんたも自分の借りを返して、同時に2人の犯罪者を逮捕するのよ」

背筋が震えた。すっ、と体の芯がまっすぐ立った気がする。

だって、はじめての作戦命令。しかも、陸先輩とアリア先輩という世界でも活躍しているような武偵からの正式なもの。

「ー返事は？」

「はいッ！」

姿勢を正して勢いよく返事を返す。

爽竹桃は私なんかより全然強い。でもなぜか今は怖くないんだ。みんながいてくれるから。アリア先輩が、陸先輩がついていてくれるから。

みんなで、爽竹桃を倒す。そしてののかを助けるんだ！

19。平和ボケ

大変お久しぶりです。めるちぇです。

もし更新を待ってくれている方がいたらとてもうれしいです。

サラッと更新させていただきます。

陸ｓｉｄｅ

「貴方本当なら重症なんだからね？ＩＣＵにまだいるような怪我だったんだからね？　何かあったらすぐくるのよ？」

「分かってますってば！」

翌日。

やっと退院できる事になった俺は病院の入り口で矢常呂先生に捕まっていた。

心配してくれてるのは分かっているけどなにぶん距離と圧がすごい。

無茶なことは（多分）しないので少し離れて下さい。

「ではお世話になりました」

「気をつけるのよ」

「はい」

一礼して武偵病院から遠ざかる。

昨日の夜、あかり達も無事に夾竹桃を逮捕したと連絡があった。後輩達は見事作戦をやり遂げたらしい。先輩としてここは何としても『武偵殺し』を逮捕しなければいけなくなったな。あと、俺を襲って来た犯人も。

「陸！」
「アリア」

考え事をしながら歩いていると前からピンクのツインテールが。
すごいスピードで走って来て、ドン！っと俺に突進してくる。

いや、俺は支えられるからいいけどね？キンジとかにしたら吹っ飛ぶ勢いだったからね？気をつけようね？いや、マジで。

「退院おめでとう！　元気になったみたいでよかったわ」
「ありがとう。今日の夜はこないだできなかったから祝勝会でもするか？」
「うーん…それは今度にしましょ」

アリアが微妙な顔をした。

まあ、まだ『武偵殺し』を捕まえたわけでもないしな。勝ったとは言えないか。

「でも陸の退院祝いはするわよ！　バカキンジに作らせるわ！」

「え？　アリアが作ってくれるんじゃないの？」

「あ、アタシとレキは装飾係だからいいのっ」

「ふっ。なんだよそれ」

顔を赤くして慌てているアリアに笑みをこぼす。

アリアに料理では期待してないけどね？何回作らせても炭ができるんだもんなぁ。

でも俺の戦妹（アミカ）やっぱり可愛いわ。

頭を撫でながら笑っていたら更に真っ赤になって怒られた。

「ただいÄÄÏどうゆう状況？」
「なっ!?　何盛ってるのよ！エロキンジ!!」
「ち、違うんだ!!　これは誤解で！」
「キンちゃんちに女が!?　泥棒猫！　今すぐ出て行ってー!!」
「うわ!?　ちょっとキンジ！なんなのよこの女!!」

お菓子やら何やら買って寮の自室に帰るとそこはもうカオスだった。

ズボンにスウェットという楽な服装のキンジが白雪を押し倒している。しかも白雪の服が結構乱れている。

今までの様子からみてキンジが自分から迫るわけがないのはわかっているので誤解はしていない。

だが何がどうしてそうなった？

「アリアにいきなり『料理しろ！』って言われて、俺まともなもん作った事ねぇから白雪に電話したんだよ。で、料理教わろうと思ったらこっちにきちまって…こんな事に」

「そうか」

「わかってくれたか！」

「まぁ、事情は分かったから取り敢えずそこからどいたほうがいいと思うぞ？」

「ÄÄÄ!!」

隣で恥ずかしさに燃えてるアリア火山が噴火寸前です。

はい、どーどー。

キンジが恥ずかしさからとアリアの怒り具合をみて顔を真っ赤にしながら青ざめ

るという器用なことをやってみせた。

そして白雪の上からパパっとどき、端の方に避難していく。

「私、き、キンチャン様になら何をされてもいいよ！」

「キ、キンジ…このっ!!」

「だから誤解だーー!!白雪も黙れ！頼むから黙っててくれ！」

「そ、そうだよね…。妻たるもの夫の3歩後ろを黙って着いていくべしだよね！」

「ちっがぁーーう！更なる誤解しか生まない発言をするな！」

「つ、妻ってあんたたちそーゆー関係…!?」

ダメだ。カオスが解消されない。そろそろ白雪の発言により慌てふためくキンジと、アリアの地団駄（怪獣）によって沈みゆく床が本格的に可哀想になってきたので助け舟を出すとするか。

「白雪ー、今日は俺の退院祝いで美味いもん作ってくれるって聞いたけど？」
「はっ！そうだった！りっちゃん退院おめでとう！本当によかったよ！」
「おー。ありがとな。と、言うことでアリアにもぜひ料理を仕込んでくれ」
「「え？」」

戸惑いを見せるアリアと白雪をぽいっとキッチンに放り込む。

「ちょっと陸!?私は料理できないって…！」
「スーパー家事マシーンの白雪がいればお前でも作れるって。アリアの美味しい手料理食べたいなー？」
「うっ。…不味くても美味しく食べなきゃ風穴だからね！」
そんな理不尽な話ある？もう美味しい（強制）しかないじゃん？
「りっちゃん！こんな泥棒猫と一緒に料理なんて…！」
「お前しか頼れる人はいないんだ白雪。頼む！あれもつけるからさ（コソッと）」

「任せて！美味しい料理を作るよ！」

キンジの寝顔写真（賄賂）により平和は保たれた。許せキンジ。

「あ、ちなみにだけど」

「「??」」

「武器を持ち出すほどの喧嘩をした痕跡が見られたら１週間お前らと口聞かないからよろしく」

「「!!」」

２人が慌ててこちらを振り返った。結構本気だから喧嘩するなら取っ組み合いまでにしとけよー。

「よし、じゃあ行くかキンジ！」

「いや、どこに？」

「ちょっとお前に話があるんだわ。ちょっとそこまで」
「？まぁいいけど」
「じゃあ出かけてくるな。１時間くらいで戻ると思うから！」
「「い、いってらっしゃーい…」」
ぎごちない笑顔で仲良く（装って）手を振る２人を見て笑いが込み上げできた。
あいつら意外と相性いいとおもうけどな？

「で、話ってなんだよ？」

学園島内の公園にて。夕焼け色に染まった太陽が地平線の向こうにゆっくりと沈んでいく。そんな時間帯。
公園のベンチに腰をかけても話し始めない俺にキンジが痺れを切らしたように話

しかける。どう伝えようか迷ったけど、でもこいつにははっきり言った方が伝わるよな。

「俺を襲ってきた相手は武偵殺し本人じゃない」

「？まぁ、奴はかなり悪質だが、乗り物ジャックしかしてないしそうだろうな」

「問題はやつに仲間がいることじゃない。俺が完全に不意打ちを食らったってこと」

「それって…」

一応俺はＳランク武偵であり、静嵐なんていう二つ名ももっている。『ランクオーバー』などと呼ばれてＳランクの中でもそれなりに強い自信はある。

その俺が不意打ちを喰らったってことは、あの時の相手はやろうと思えばあの場にいた全員を殺すこともできたわけだ。それをしなかった理由はただ一つ。そう。

「あくまで俺だけを狙って攻撃してきた。そしてあの時のあの状況下でうちの鑑識科の検証でも物的証拠が出ないとなると犯人はーーー超能力者」

キンジがごくりと唾を呑むのがわかった。俺が不意打ちを喰らうレベルの超能力者。武偵ならばSランクは確定の強者だ。そして俺はーーーその相手に心当たりがある。

「やつは武偵殺しの仲間かもしれないしそうじゃないかもしれない。俺たちが他校や地元警察と共闘（チームアップ）することがあるように犯罪者たちもその場限りで協力することもある。武偵殺しがバスジャックした現場で強襲したことを考えれば次も一緒に仕掛けてくる可能性は高いだろう。いつ、どこでかはわからないが、乗り物ジャックという点は変わらないだろうからお前も十分注意をーーー」

「ま、待て待て！待ってくれ！」

「なんだよ？」

キンジが慌てたように声を荒げる。

これからが重大な話だってのに。何か分からないことでもあったのか？

「いや、バスジャックが終わったばっかりでなんで次とかって話になるんだよ？そもそももう仕掛けてこない可能性だってあるだろ！」

「ーーーねぇよ」

「っ」

「キンジは前は強襲科にいたんだよな？探偵がに移ってから平和ボケしちまったのかよ？武偵殺しは愉快犯だぞ？あいつは俺たち武偵をどうやって殺すかって言うゲームを楽しんでんだよ。お前だってゲームとかしてさ、僅差で負けたらくそぉー！もう一回！ってなるだろ？それと同じだよ」

目の前のキンジが愕然とした様子で言葉を飲む。

こいつはチャリジャックで武偵殺しの愉快犯っぷりを体感してるはずだ。それなのに何故そんな平和ボケした意見を言える？少し考えればわかることだろう。あまり本人に無理強いするのも、と思ったがやっぱり。

「キンジ、お前、自由履修の頻度増やせ。それか放課後に俺が直接訓練つけてやる」
「なんでそんな話に、」
「お前は自分から目を逸らすあまり武偵として事件の先を読むことからも目を逸らしてる。お前の頭は悪くないはずだ。逃げてばかりいないでちゃんと考えろ」
「なんでお前にそんなこと言われなきゃいけないんだよ！」
「お前のその体質（ヒステリアモード）はそんなに忌み嫌うものじゃないだろ。うまく利用できれば多くを救える力だ」
「!?　どこでそのことをーーー調べたな？」

普段から目つきの悪いキンジがさらに目を細めて詰め寄る。
進んで使いたいと思えるような発動条件（トリガー）ではないだろうが、必要な時にはうまく使えばいいだろうに。それもまた一つの大きな能力だろう。

「俺は各国を飛び回ったおかげで結構機密情報に触れる機会も多くてな。遠山キンジーーー遠山の金さんの家系で代々ヒステリアモードと呼ばれる特異体質を受け継

ぐ、遠山金叉の息子」

「父さんのことまでーーお前なんなんだよ。機密情報ってなんだよ！それと父さんと何か関係があるのかよ！」

父親のことはともかくヒステリアモードは推理でわかる範囲だ。始業式のチャリジャックの時のキンジを見ればな。

突然人が変わったように強くなり発言にも変化がみられる。直前までそのような兆候が見られなかったことから何かしらの発動条件（トリガー）があり、それがあの場で発動されたことになる。キンジにはＳＳＲの適応もないし超能力による身体強化ではない。そしてあの場で薬剤や注射のようなわかりやすいドーピングもかけていなかった。と、なれば遺伝レベルの体質による身体強化。あの時キンジは跳び箱から出てきた瞬間に人が変わった。となれば発動条件（トリガー）は危機的状況か密閉空間もしくはーーー女性関係。そしてチャリジャックをされた時でもなく、跳び箱の上段が飛んで解放空間だったにもかかわらずあの場で発動したということは必然的に女性関

係に絞られるわけだ。
　あとは校内で情報を集め、キンジが女性を苦手としていること、Ｓランク武偵として活躍しているときの言動について情報が得られれば裏付けも取れる。あとは俺の情報網を使っていろいろ探らせてもらえれば実家のことや父親のことでも確証が得られるわけだ。遠山金叉がキンジの父親ということはやはり父さんが言ってた友達の息子というのがキンジで間違いないだろう。

「まあ今はその話は関係ないんだ。ともかく武偵殺しは絶対にまだ事件を起こす。大なり小なりかかわった事件を１つ一緒に解決するといったよな？この事件はまだ終わらない。チャリジャックにキンジが普段なら乗る予定のバスで起きたバスジャックお前が今度の標的にされていることは十分考えられるんだからな。とにかくそんな平和ボケした考えでいつまでも事件から目をそらさずちゃんと訓練をしろ。今回俺個人を狙ったやつの実力を考えればもしもの時に俺が守ってやるとは言い切れないからな」
「…関係ないってなんだよ」

うつむいたキンジが静かにそうつぶやく。

「俺の父親の話だぞ。なんで息子の俺が知らなくて他人のお前が知ってるんだよ！何をつかんでるのか教えてくれてもいいだろ!!」

「悪いがまだ言えない」

「なんでだよ!!」

「時期じゃないっていうのもあるが俺には守秘義務がある。いくら遠山金叉の息子でも現段階でいえるのはここまでだ。それともお前――国一つ的に回す覚悟あるのか？武偵殺し（偵殺犯）一人と向き合う覚悟もないのに？」

「っーーーー！クッソ……わーったよ！今は聞かないでおく。お前がそんな奴じゃないのは知ってるがヒステリアモードの件は黙っておけよ」

「もちろん。俺は人の秘密をペラペラしゃべるような真似はしない」

「…ならいいけどよ」

「キンジ…ごめんな。いろいろ言っちまって…。言えないことも多くてさ」

俺はキンジに頭を下げた。少し焦って言い過ぎた自覚はある。まさかあいつが来るとは思わなくて気が立ってたんだな。

「でも目をそらさないでちゃんと考えてほしい。友達だと思ってるからこの事件を一緒に無事に解決したいんだ。考えておいてくれるか？」

「…ああ」

「よかった。じゃあマンションに戻ろうぜ。アリアと白雪が待ってるはずだ」

「…食えるものができてるといいな」

「白雪もいるし大丈夫だろ。うん」

少しだけ気まずい空気を残しながらも、軽口をいいあってその日はマンションの俺たちの部屋に戻った。白雪先生に料理を教わったアリアは何とか食べれるレベルの料理が作れるようになり、俺も一安心したのだった。あ、ちなみにマンションの部屋をくまなく見たけど武器を使用した痕跡は見られなかったな。よかったよかっ

た。

事件発生のカウントダウンはすでに始まっている。俺も準備をしていろいろと備えなければいけない。来るその日に。

俺も、キンジも心から楽しめたとは言えないが、それでも十分楽しい思いをした退院祝いだった。

20・パートナー

どうもメルチェです。
やらなければいけないことがあるときに限って今すぐやる必要のないことがはかどりますよね！
そんな1日です。
では第20話をどうぞ。

陸ｓｉｄｅ

日曜日の昼下がり。
ｉ－ｉ－学園島の片隅にある美容院の前にて人だかりができていた。

「え、あれ桜さまじゃない!?」
「めっちゃかっこいいんだけど写メ写メ!!」

困った。大変困ったぞ。人を待っている間に俺の周りを女性陣が取り囲んでしまった。軽く、というかだいぶ通行の迷惑である。そして堂々と盗撮をやらかす通行人。いや、俺の写真意外と出回っているらしい。
『りっくんはイケメンさんだからすっごい人気で写真も爆売れなのだよ！りっくんのおかげでりこりんは大儲けさせてもらってますぜぇ！』
脳内で盗撮魔のハニーブロンドの声が再生される。いや、人の写真で大儲けしてそれを本人に自慢する盗撮魔ってどうだと思う？
あまり好き好んで取られたいわけじゃないが、悪用されないならと許容しているこの頃である。まあ、盗撮からの販売は悪用に入らないのかと聞かれると大変グレーゾーンというか黒な気がするが、出所もわかっているのでよしとしてやろう。

そうこうしているうちに待ち人が…来た来た。

「すみません。彼女を待たせているので通してください。すみません」

周囲の人だかりに頭を下げて待ち人のもとへ急ぐ。怒らせてはいないだろうか。ご機嫌取りが楽だといいんだが…。

「彼女だってー」

「え、アリアと桜様ってそういう…？」

「でもアリアって…中学生みたいだよね。え、もしかして桜様もロリコン？」

「アリア、お待たせ」

「っ…！」

待ち人ーーーアリアのもとに駆け寄るとピンクのツインテールを揺らしてプルプ

ルしていらっしゃる。あ、これやっぱり怒ってらっしゃる。

「だ、れ、が！　ロり中学生よ！　私は高校生だ！」

「どうどう！落ち着けって！」

ちょっとちょっと！ガバがこんにちわしてますよ！しまってしまって。

若干命がけでアリアの両手に握られたガバをホルスターから抜かせないようにする。

先ほどの群衆の疑問が聞こえてしまったらしい。

俺もロリコンとか言われて風評被害なんだが。特にそちらの趣味は持っていないんだけども。

「あんたもよ陸！」

「え、俺？」

「だ、だれが！いつ！あんたのか、か、か、」

「か？」

「か、ーーーカノジョになったっていうのよー!!」

アリアさんが真っ赤な顔をしてビシッと指をさしてにらみつけていらっしゃる。

と、ここで俺も一つ純粋な疑問をぶつけてみる。

「俺が第三者にアリアのことを示すんだから『彼女』だろ？え、アリアは女の子だからあってるよな？あれ、もしかしてここ10年ぐらいで日本語の使い方変になってたりする？」

え、俺あってるよな？一応日本国籍だから今更日本語間違えるとか恥ずかしすぎて無理なんだが？

「わ、わざわざか、か、『カノジョ』とか言わなくても友達とかでよかったじゃない！」

「あ、それもそうだな。その方がキンジとかにも使えるし今度からそっちにするよ」

「……はあぁ。そうよね…陸だもんね……天然にまともに相手しちゃいけないわ」
「あれ、なんかひどくない？」

何、今日は俺の扱いが雑になる日なのか？

「ここじゃどんどん人が来ちゃうわ。行きましょ」
「おう。それにしてもアリアは前髪おろしてるのもかわいいな。少し斜めに流してるのが大人っぽくて素敵だと思うぞ」
「そ、そうかしら。陸が言ってくれるなら間違いないわね！」

目いっぱいおしゃれして、美容院で髪の毛もセットしてきたアリアは雑誌から抜け出てきたといっても不思議じゃないくらいかわいい。
いつもはパッチンで止めている前髪もおろして斜めに流しているからか、若干大人ぽく見える。
俺も変に見えないくらいのおしゃれはしてきたつもりだが、これだけの美少女の

隣に並ぶんじゃ足りなかったかもな。なんて、冗談交じりに考えた。

ーーー学園島から電車とモノレールを乗り継いだ俺たちは新宿駅で降り立った。

にしても人の多い場所だよなぁ。通行人の視線が刺さる刺さる。敵意のある視線は…まあ、あるけど原因はこれかなぁ。

俺は隣をミュールをかつかつ鳴らしながら歩くアリアを見る。男たちの視線がアリアを見て、それから俺を見て敵意に代わっていく。まあ、こんなかわいい子がいたら隣にいる男が気になりますわな。これが武偵高なら銃弾やナイフや素手が飛んできそうなものだが、ここは大都会新宿。通行には武偵などではなく一般市民だ。放置で問題ない。

「陸。こっちよ」
「こっち？」
「うん」

実は今日はアリアに誘われて一緒に出掛けているだけなのである。ちなみに行先は知らされていない。

アリアに先導されるようにしてしばらく歩く。ーーーそれにしてもどうしたもんか。

「……下っ手な尾行。シッポがにょろにょろ見えてるわよ」
「あ、わざとやって何かを試されてるわけじゃなかったんだな」

背後にいるであろう人物に振り返らず声をかける。その正体は。

「ここで何してるんだ？キンジ」

「…ばれてたか」

あれだけわかりやすくされたらそりゃな。逆に試されてるのかと思って声をかけるべきなのか迷ったぞ。

「陸。あんたちゃんとキンジに教えてるの？探偵科のくせに尾行下手くそとか終わってるわよ」

「演習はやらせてるはずなんだけどなぁ」

「な…毎回演習で俺が当たるのはお前のせいだったのかよ。勘弁してくれ」

「しつけ直しが必要ね。もうちょっと役にたつドレイにしないと」

「おい」

信号待ちの間に軽口をたたきあう。

あ。今周囲の人がアリアの「ドレイ」ワードに若干引きを見せたぞ。ＴＰＯは考えて発言させないと俺まで風評被害くらいそうだな、これ。

「で、あんたここまでついてきて何の用よ？」
「あ……その。お前、昔いったろ。『質問せず、武偵なら自分で調べなさい』って」
逆ギレ気味にそういったキンジは俺の隣に並んだ。俺を挟んでアリアとけんかするのはやめてね、マジで。
「ていうか、気づいてたんならなんで言わないんだよ」
「教えるかどうか迷ってたのよ。あんたも武偵殺しの被害者の１人だから」
「？」
「まあ、どうせついちゃったし。いいわ。ついてきなさい」
そういって俺とキンジを伴ってアリアが入っていった建物はーーー新宿警察署、その署内であった。

留置人面会室でアクリル板の向こうに座った人物。その女性に俺は見覚えがあった。懐かしさと同時に驚愕する。なんで、なんであなたがそちら側にいるんですか。

「お久しぶりです。かなえさん」
「あら、あなたもしかして……陸くんかしら？」
「はい」
「あらまぁ…かっこよくなったわねえ」
「かなえさんはあの頃と変わらずお綺麗ですね」
「ふふ。ありがとう」

かなえさんと久方ぶりに会話をする。アリアと戦兄妹になってから何度かお家へお邪魔してお世話になったことがある。

「ちょっと！ママも陸も時間ないから」
「ごめんなさいね？あら、そちらの方は？てっきり彼氏は陸くん一人だと思ったけどまさかアリアったら２人目を？」
「ち、違うわよママ」
かなえさんがおっとりした口調でキンジに目をやる。ここが留置所の面会室だということを忘れるぐらい平和な会話だ。
「こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で、今は陸と一緒に躾中なの」
「あらあら。大切なお友達なのね。キンジさん。初めまして。アリアの母で――神崎かなえといいます。娘がお世話になっているみたいですね」
「あ…いえ…」
かなえさんの自己紹介にキンジはたじたじだ。もとから女性態勢がないキンジにはかなえさんは毒だったらしい。しかし友達の母親に初対面で娘が『躾中』とかず

いぶんなことを言っているがそれは気にしない方向なのだろうか。

「ママ。面会時間が3分しかないから手短にいうけど…このバカ面は武偵殺しの3人目の被害者なのよ先週、武偵高で自転車に爆弾を仕掛けられたの」

「…まあ…」

かなえさんは表情を硬くする。

「さらにもう1件。おとといはバスジャックも起こしてる。やつの活動は急激に活発になってきてるのよ。てことはもうすぐシッポも出すはずだわ。だからあたし、予定通り武偵殺しから捕まえる。ヤツの件だけでも無実を証明できればママの懲役８６４年が一気に７４２年まで減刑されるわ。最高裁までの間に他も絶対何とかするから」

懲役８６４年、か。

「そしてママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を全員ここにぶち込んでやる

わ」

「アリア、気持ちは嬉しいけどイ・ウーに挑むのはまだ早いわ。陸くんはパートナーになってくれたの？」

「それは…」

「――――はい。俺はアリアのパートナーとして今も、昔も隣にいるつもりです」

「陸…」

「それなら安心ね」

アリアが泣きそうな目でこちらを見つめる。

足りないものを見つけたらパートナーになってやるといったのは確かだが、ロンドンにいるときも東京武偵高校であった時からも何かあれば力になろうと思ってたよ。俺は。

「神崎、時間だ」

壁際に立っていた管理官が時計を見てそう告げる。

「陸くん。アリアのことよろしくね」
「はい、任せてください」
「キンジさんもご迷惑おかけするかもしれませんがよろしくお願いします」
「あ、はい」
「アリア、あなたは一人で行動してはだめよ。周りの助けてくれる人をちゃんと頼りなさい。私は大丈夫だから」
「ママ！」
「時間だ！」

早口に俺たちに言葉をつげていたかなえさんの腕を管理官がつかみ引きずるように移動させる。
あっ、とかなえさんが小さくあえいだ。
「やめろ！ママに乱暴するな！」

分厚いアクリル板に向かってとびかからん勢いのアリアを抱きすくめ、アクリル板から引きはがす。

懲役８６４年なんてどんな罪を起こせばつくのかもわからない年数だ。大罪人に間違いはないだろう。それでも。

「公平と正義を謳う警察組織の人間が無抵抗の人間に行う行動とは思えませんがいかがお考えでしょうか？」

「…」

「あ、申し遅れました。私『静嵐』を名乗らせていただいております。桜田陸と申します。――犯罪者だろうが何だろうがそんな扱いしていいわけないだろ。俺は素手でもこのアクリル板ぶち抜けるが直接会話するのが好みか？」

俺にとってアリアは大事な女の子だ。その子の母親なら大切に決まっている。だからこそこの管理官の行動は許せない。

殺気を織り交ぜながら凄むと慌てて腕をつかんでいた手を放し、普通の対応で面

会室を出て行った。

新宿のアルタ前にて。

管理官の態度に憤り一通り泣いたアリアを落ち着かせた俺たちはしばらく新宿の街を散策することにした。キンジは様々な情報が一気に入ってきて混乱したのだろう。うつむき加減で先ほどから無言だ。

「…ちょっと陸と話があるの。キンジは帰ってくれる？」

「あ、ああ…」

また駅前に戻ってきたタイミングでアリアがキンジにそう告げた。キンジは気ま

ずさからか、どうしていいのかわからないといったような、すこし安堵したような顔で新宿駅の改札の中へ消えていく。

それを見送って俺はアリアの方を向きなおした。

「行こうか。人に聞かれると困る内容の話ならどっか部屋を確保するけど」

「…歩きながらでいいわ。バカキンジには関係のない話だから帰らせただけだもの」

そういうとアリアはかつかつとミュールの音を響かせて駅から離れていく。俺はその横について黙ってついていった。

「ママは武偵殺しの罪を着せられてつかまって、そのあと余罪が出てきたって言って懲役はどんどん長くなったわ。今は弁護士の先生が頑張ってくれてるの」

「そうだったのか…。かなえさんに罪を着せたのがイ・ウーなんだな？」

「そうよ」

アリアは暗い表情でうなづいた。

イ・ウーという犯罪組織。かなえさんにかかった８６４年という懲役年数。武偵殺しの件が片付いたとしても残り７００年という年数がかかる。新聞を読んだときに経緯に裏があるとは思っていたがこれは…真っ黒だろうな。確実に警察組織、もしくは国の中枢にイ・ウーと関係あるやつがいる。何とかしてその関係を暴くかイ・ウーを倒さなければかなえさんの実質上の終身刑は覆らない。あとから余罪を足せばいいだけだ。

「あたしはママを助けるためにイ・ウーをつぶすわ。それでなんだけど…陸は、そのさっきぱ、パートナーって…」

「ああ。あんな事情を聞いた以上はな。お前の家には『パートナー』が必要なこともわかってるし。特にアリアは一族の遺伝を強く受け継いでる子供っぽくて直情的なところ、だっけ？」

「も、もう！からかわないでよ！」

冗談めかしてアリアをからかうと真っ赤になってぽこすかと叩いてくる。

少しして動きを止め、二人して「「アハハ！」」と顔を見合わせて笑いあった。

「俺はお前に足りないことを見つけてほしいと思うし、そのためには俺以外の人間を仲間と認めてともに戦うことも覚えてほしい。だけど『パートナー』は俺だ。だからどんな時でもそばにいるよ。昔みたいに勝手にいなくなったりして悲しませないって誓う。だからーーー俺の『パートナー』になってくれますか？」

「よ、よくそんな恥ずかしことスラスラ言えるわね……ま、陸だもんね。…うん。あたしのほうこそ。よろしくお願いします」

「ああ」

差し出した掌にアリアの小さな手が置かれる。この小さな手で、この小さな体で

こいつは今まで一人で戦ってきたんだ。なぜ俺はあの時この小さな女の子を一人にしてしまったんだろうと後悔ばかりが浮かぶ。だが過去は過去だ。変えられないものに固執するのは意味がない。それよりも今、この時から。俺はアリアという女の子を守っていきたいと思う。強くて、それでもか弱い一人の女の子を。

「俺たちは正式に今日から『パートナー』だ。と、さっそくで悪いんだが荷物の準備をしておいてくれ」

「？　どこか行くの？」

アリアが首を傾げ不思議そうに尋ねてくる。

「ああ。ちょっと所用でな。ついてきてくれるか？」

「いいけど、いつ、どこへ行くのか教えなさいよ」

「出発は明日の夕方。行先は――ロンドン・ヒースロー空港だ」

緋弾のアリア――碧き守護者――

著者　メルチェ

発行日　2022 年 2 月 21 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/88030/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。